
Fairy Tail ~ 魔を極めし者 ~

雷神の鉄槌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fairy Tail 魔を極めし者

【Nコード】

N0652Y

【作者名】

雷神の鉄槌

【あらすじ】

俺は死んでしまった。

死んだら死んだで神と名乗る美女に会うわ、転生させますとか言われるはで、混乱もした。

けど、セカンドライフを送ることができるんならまあいいか。

特典として力を貰い、俺はFairy Tailの世界へ転生する。原作にいないはずの俺がいることで何が起るかわかんない。

けど、それは俺のせいでもあるからな……どんなイレギュラーが起ったとしても俺がどうにかしてみせるぜ！

プロローグ

皆は輪廻転生って言葉を知っているよな？

これは宗教用語で、その意味は人は死んでも、また新しい命に生まれ変わると言うものだ。

初めて聞く人は、そんなことは「あり得ない！」「んなバカなことがあるかよ！」と否定するだろうな。

俺もそう思っていた。そう、過去形なのだ。

何故、過去形なのかというと……自分がその輪廻転生を体験している最中だからさ。

俺、神崎刀也は25歳だった。恋人はいないが、充実した人生を送っていた最中だった。働きながら趣味であるアニメ鑑賞、ゲームプレイ、漫画・小説を読む……そういった毎日を送っていた。

暇さえあればジョギングとかな。

俺の就職先はアニメの映像を作ったりする会社だ。俺も新人だが、実力を認めもらっていたんだ。

そんなある日のことだ。俺が会社に出勤するために駅のホームで電車を待っていた。

その時だ。ある出来事が起こったのは……。

その出来事とは……電車がホームに近づいている時に誰かに背中を押されたんだ。いきなりすることに反応できなかった俺はそのまま重力に逆らうことができず、ホームに落ちた。その時、見たのは……俺と同じ会社の職場で働く、同僚だった。

俺は実力を買われていたが、そいつは平凡だったため、見向きもされず、失敗ばかりな奴だった。そんな奴は俺を妬ましく、恨んでいたようだ。表情を見ると、狂気が走っていた。

そして……俺の横からは電車が……ああ、俺、死んだわ。

グチャ！

自分が轢かれたことはわかった。意識が遠のく中、

「神崎！死ぬな！！神崎イイイイ！！」

俺を認め、買ってくれていた上司が俺の名を呼んでいたが、俺は意識を失った。

これが、俺が死んだ時の経緯だ。次に今、俺がどうしているかと言うと……目の前に美女がいるんだよな。

これが俗に言うテンプレなのだろうか？生きている時に転生者ものの小説を読んだ時にこんな描写があったな。

そして、俺は美女に問う。

「問おう。あなたは神か」

「はい、私はあなた達が言う神の一人です。名を明かすことはできませんが」

まあ、そこは神様のご都合ってやつか。

「ええ。そうです」

「心を勝手に読むなよ」

「すみません。こういうものなので」

……まあ、そういうことにしておこう。

「それで？俺は何でここにいるんだ？
その前にここはどこよ」

「ここは生と死の狭間です。」

あなたは本来、あの若さで死ぬはずではないのです」

………どういうことだ？25歳で死ぬはずではないって………

「あなたは本来、100歳以上生き、数々の名作とも呼ばれるアニメを作る人物だったはずなのですよ。
ですが、何が起ったのかこちらの世界………天界にあるあなたの書類の寿命がいきなり0になったんです」

「はあ！？なんでだし」

「調べた結果、死を司る神が手違いであなたを殺してしまったためです」

………マジかよおおおおお！

「はい、マジです」

「俺は……どうすればいいんだよ」

俺はorzと沈んでいると、神が俺にいう。

「あなたにはこちらの神による手違いで死んでしまったため、別の世界ではありますが転生するという道があります」

ピクン！

「それは……本当か？」

俺は耳を疑った。転生だって？あの死んだらよくある異世界転生トリップってやつか！

「はい。その転生です。特典として魔力をチート級、武道の才能、物造りの才能を……あといくつかの能力を授けます。何か希望はありますか？」

……能力か……。

「何でもいいのか？」

「はい。私が授けることのできる範囲で」

「……よし、なら魔眼……眼関係の能力、ネギま！・テイルズ系シリーズ・RAVEの魔法系全般で！」

……どうだ！

「魔眼……ああ、なるほど、伝勇伝やNARUTOとかのですね。魔法関係もいいですよ。前に別の世界に転生させた人物はFateのギルガメッシュやシロウの能力とか言っていました……」

「それじゃあ、つまないじゃないか。貰った能力をしっかり使えないと意味ないし」

「なるほど……わかりました。では、特典はあなたが転生したら使えるようにしますね」

「ありがとう」

俺はお辞儀をし、敬意をはらう。

「いえいえ。では、セカンドライフを楽しんでください。行く世界は？Fairy Tail”です」

転生する世界の名前を聞き、最後に意識が薄れていった。

そして、意識が再び回復すると、

「ばぶう（勘弁してくれ）」

まさか、赤ん坊からやり直すとは……。それに、意識が薄れる前に聞こえた世界の名前…… Fairy Tailだと……。まさかと思うが、この赤ん坊の状態ってことは竜に育てられたりしないかな？

って、これを言っているとフラグが立つな。さて、どうしよう……

そう、俺が思っていると、

ギヤアアアオオオオオオオオ！！！！

空から何かの雄たけび……。叫び声が聞こえてきた。

俺の……。まだ、生まれて間もない赤子の眼が少し、開いて見えたのは……

ミラボレアスを思い出させるような容姿の竜だった。

【人間の子どもだと？なぜこのような森林の奥地に……。？……。捨てられたのだな。人間とは哀れな生き物だ……。だが、生まれたばかりの子どもには罪はない】

そっつい、竜は俺を翼で包む。

【あの日まで……。我がお前を育てよう。これも何かの縁】

俺はその竜の暖かさを感じながら、急に眠気が襲い、眠りについた。

プロローグ（後書き）

初めて書かせてもらっています雷神の鉄槌です。
これから書いていきますのでよろしく願います。

ブログ2（前書き）

11月3日に名前変更しました。

プロローグ2

俺が転生し、竜……破邪竜のヴリトラに拾われ、育てられてから早
十一年。

今と前世の記憶もはつきりしているし、魔眼……直死の魔眼の制御
も出来てる。

魔力で直視の魔眼の死の線を消しているので、変な気持ちになるこ
ともない。

さて、十一年間俺が何をしていたのかというとヴリトラとの模擬戦
を繰り返しながら自分の使える魔法を確かめ、それと共にヴリトラ
に滅竜魔法を教えてもらった。

そして、原作で竜達が消えたという777年7月7日の朝。俺はい
つもより早く目を覚まし、空を見上げていた。

「……………ヴリトラ」

空を見上げれば、ヴリトラが俺を見下ろしていた。

【……………】

バサ…………バサ…………

ヴリトラは何も言わず、その場から離れ、飛んで行った。俺にはヴリトラが何を言おうとしていたのかわかった。

？達者で暮らせラゲナ”

そう、俺にはヴリトラが言おうとしていたと思った。

ああ、わかったよヴリトラ。俺は……元気で暮らしていくよ。

だから、ぎにじないでくれ……

俺は……この世界に来て初めて涙を流した。

涙を拭いた後、俺は荷造りを始める。重いものは換装魔法の応用で空間にしまう。

そして、服も新しいのに変える。ヴリトラの羽で作った伸縮自在の服だ。歳をとるたびに大きさも変えていくというすぐれものだ。

よし、これでOKだな。

「行こう！フェアリーテイルへ！！」

俺は地図を出して、マグノリアと今、俺がいる地点に印をつけ、歩き始めた。

ナツ達と会ったのが楽しみだな♪

第1話 破邪竜のラゲナ（前書き）

今回からSIDE。。。とつけていきます。

第1話 破邪竜のラグナ

〔SIDE：ラグナ〕

俺がヴリトラと過ごした森から旅立って早1年。フェアリーテイルのある街……マグノリアにかなり近づいている。

えっ？何で魔法を使っていけないんだかって？それは修行も兼ねているからさ。

この世界に転生する際に貰った特典の一つである『物造りの才能』で作った腕時計型重力装置で自分の周りだけ重力を10倍に設定して歩いているんだ。それに加えて、手足には『呪霊錠』をつけてある。

簡単にいえば、魔力で毎日身体は補助され、それと同時に『呪霊錠』を底上げしているようなもんだ。

これを1年続けているが、未だに重力装置も『呪霊錠』もOFFにしてないし、『開^{アンデ}』も唱えていないので自分がどれほど魔力が上がったかわかんないし、身体がどのくらい軽く感じるかも分かんないんだよな……。まあ、いつかわかることだからいいや。

さて、地図を見る限り、そろそろマグノリアが見えるはず……。

俺は辺りを見回し……見つけた。

「おお！あれがマグノリアか！ここから見ても結構活気のある街だなー！」

俺は走り出そうとした……その時だった。

カン！カン！カン！

「な、なんだ？」

街の方から鐘の音が鳴り響いてきた。

街を凝視してみると……街に魔物がなだれ込んでいた。

おいおい！何で魔物があんなになだれ込んできているんだよ！？折角来たのにこんなことに巻き込まれなきゃなんねえんだ！？

けど……折角、ここまで来て、加えてあんなに魔物が街に入ってきているんだし……見逃せないな！

俺は左手首に付けてある腕時計型の重力装置をOFFにし、外し、

「『^{アンテ}開』！」

カチャン！

ゴオオオオオオオオオ！

久しぶりに『^{アンテ}開』してみたが……ここまで魔力が上がるものなんだな……ふっ、行くか！

シュン！

俺は木々を足場にしながらマグノリアへ向かった。

〈SIDE：ラグナ OUT〉

〈SIDE：第三者〉

ドカアアアアア！

街になだれ込んだ魔物達をマグノリアにある魔導師ギルド、『フェアリーテイル』の魔導師達は魔物達と戦っていた。

「火竜の鉄拳！」

「アイスメイク・槍騎兵！」

桜色の髪と鱗模様のマフラーが特徴の少年と何故か上半身裸の少年は背中合わせに魔物達と戦っていた。

「ぜえぜえ……」

「はあはあ……どうした？クソ炎、もう息が上がってんじゃねえか」

「うつせえぞクソ氷。てめえも人のこと言えねえだろうが」

そう、互いに言いあいながら戦う2人に、喝を入れる人物が近づく。

「ナツ！グレイ！喧嘩をしている暇ではないぞ！」

「そつだぞ！街の人たちを魔物から守らないといけねえんだぞ！」

小さい体なのに鎧をその身に纏いながら剣で戦う紅髪の少女と白髪にも銀髪にも見える背中から悪魔の翼を生やし、手には黒い球体を宿している少女が2人の少年……ナツとグレイにさういう。

「んなこといったってよお！こんなにいるんじゃ、キリがねえぞ！」

「エルザ！ミラ！不本意だがこいつに同意だ！ただでさえ、今日はギルドメンバーの大半が出払っているんだぜ！！お前たちだってかなり疲労してんじゃねえか！」

ナツとグレイは2人の少女……エルザとミラにさういう。確かにグレイの言うとおり、エルザとミラも息が上がっている。

「マスターも戦っていらつしゃるが、叩けば叩くほど魔物達が増える一方なのも事実だ。だが……」

「そのマスターも先ほどな、ぎっくり腰で戦闘不可能になってしまったんだよ！」

『な、なんだとおーーーー！？』

ミラの言ったことに悲鳴を上げるナツとグレイ。フェアリーテイルのマスターにして、聖十大魔道の称号を持っているマスター……マカロフ・ドレアーが戦闘不可能になってしまったことにショックを受けている。

「ちょ、ちょっと待てよ！？ってことはなんだ？今戦っているのは、俺・クソ炎・エルザ・ミラの4人なのか！？」

「……そういうことになるな。エルフマンもリサーナもまだ、戦えるレベルじゃないしな」

ミラは2人の……自分の弟と妹の名を出す。2人もフェアリーテイルにいるが、まだ、戦えるレベルに達していないので、戦力がいないのだ。

「くそ！おっさんが……ギルダーツがいれば！！」

「居ないもののことを言うな！ギルダーツは10年クエストに出ているのを忘れるな！」

ギルダーツ……フェアリーテイル最強候補のS級魔導師だ。どうやら、彼もいないようだ。

「くそっ！どうすればいいんだよ！」

「俺が全員、ぶっ飛ばしてやるぜえ！！」

意気込んで炎を拳に纏って魔物達を殴るが、

「ガアアアアアアアアア！！！」

ドカアアアアアアアン！

「げふうう！？」

ナツはそのまま、魔物に吹き飛ばされた。

『ナツ！』

グレイ・エルザ・ミラの3人は吹き飛ばされたナツを見に行く。

ナツは目を回して、気絶していた。

「おいおい！マジかよ！？」

「ここにきて、戦力が減るとは……」

「このクソ炎！！」

グレイはナツの頬を叩く。

「起きろ！起きろってんだ！」

パチン！パチン！パチン！

何度叩いても起きないナツ。

ドシャ！

「無理だろおい……」

グレイの目の前には……街になだれ込んできたすべての魔物達がい
た。

エルザは剣を構え、ミラは拳を握る。

「（マスターの腰が治るまで、時間を稼げば……）」

「（他のメンバーがクエストから帰ってこれるまで時間を稼げば……）」

2人はこの状況をどう持ちこたえるかを考えている。3VS多種多勢の魔物達。エルザとミラの額に汗が流れ出す。

2人がいざ、動こうとした……その時だ！

「おいおい……多勢に無勢って言葉を知らんのか？って言っても魔物がわかるわけないか」

2人の前に……ラグナが現れた。

（SIDE：第三者 OUT）

〔SIDE：ラグナ〕

おいおい、何でマカロフさんとか、ギルダーツがいないんだよ……
他のメンバーもいないし、ナツ達だけで戦っていたのか？まあ、い
いか。無事みたいだし。

「お、お前は誰だ！」

エルザが俺に剣を向ける。おいおい、助けに来たのにそれはないだ
ろう。

「俺はギルドに入ろうとここまできたら、魔物と戦っているお前た
ちが見えてここに来たんだよ」

「なに？そうだったのか。それは申し訳ないことをしたな」

剣を納めるエルザ。

「お前たちは下がってな」

俺は荷物を降ろす。

「な、何を言っていやがる！てめえにはあの魔物の大軍が見えねえのか？！」

「見えているさ。が、この程度の数なら問題ない」

俺はそういいながら、魔力を高める。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

俺の魔力に反応し、大気が揺れる。

「な、なんという魔力だ！マスターと同じ……いや、それ以上か！」

「マジかよ、こいつ……私たちと同じぐらいの年齢に見えるのに……」

「すげえ……ウルよりも……じいさんよりも……」

俺の後ろにいる3人は俺の魔力に驚いているようだ。まあ、ここま
で魔力が多ければ、驚くよな。特典に+して『呪霊錠』で底上げし
たしな。

「さて……お仕事の時間だ。魔物達よ……覚悟しろ」

そして、一方的な戦いが始まったのであった。

俺は破邪竜の魔力を拳と足に宿し、魔物達を蹴る。

「破邪竜旋風!!」

黒い魔力の風が魔物達を一瞬で倒す。

「続けて、破邪竜の鉄拳!」

黒い炎を纏った拳で殴る。

俺の戦いを見ていた3人は驚いていた。

「破邪竜……だと!?!」

「こいつ、まさか!」

「ナツと同じ、滅竜魔導士か!」
ドラゴンスレイヤー

まあ、普通にわかるよな。竜って技名につけているから。

「合わされ!左腕、雷!右腕、光!二つの属性を合わせて……破邪竜の雷光!」

バシユウウウウン!!!

雷と光の属性の黒い塊を魔物達目掛けて投げると、爆発を起こす。

この一撃で魔物の大半を殲滅した。

「な、なんて威力なんだ……」

「す、すげえな……ナツの滅竜魔法とは桁違いだぜ」

「もしかして、破邪竜っていろんな属性と一緒に使えるのかよ!？」

ミラ……正解だ。俺がヴリトラから教わったのは普通の滅竜魔法だった。破邪竜は相手の魔法を喰うことができる。属性なんか関係ない。魔力の籠ったものであれば何でもいいが、魔力のないものは一つしか食

えない。それは……? 闇”。そう、夜は俺のテリトリー。俺は夜を支配するもの。昼間は他の魔導師の魔法を食らうことで魔力を回復できたりする。夜は闇を食らうって感じだ。

んでもって、俺はヴリトラと別れて1年間で他の属性を滅竜魔法に加えられることを思いつき、実践してみたら見事成功したってわけさ!

さて、話は後にして……残りの魔物達を一掃するかな!

「破邪竜の……咆哮!!!」

口から黒い灼熱のプレスが魔物達を殲滅した。

後には黒い炎が少し残っていた。

『……………っ!』

3人は口を大きく開けて驚愕した瞳で俺を見ていた。

「俺の名は……ラグナ。ラグナ・ギースだ。破邪竜のラグナ……フエアリーテイルに入りに来た。これからよろしく！」

俺は3人に挨拶をした。これが、魔導師ギルドに所属する 그레이・エルザ・ミラの3人とのファーストコンタクトであった。

第1話 破邪竜のラゲナ（後書き）

2話目完成！

次回はそうですね……フェアリーテイルに入ってバトルところまでかな？

次回も楽しみにしてください！

第2話 フェアリーテイル

〔SIDE：ラグナ〕

「いやゝすまんかったのおゝ。よそ者だったお主に魔物を退治させてもつて」

「いや、気にしないでくれ。元々、フェアリーテイルに入るのが目的でここに来たんだ。それに、俺の実力はその3人が証明してくれるだろ？なあ？」

俺は今、マスターマカロフと話をしている。マカロフさんにはお礼を言われ、若干困っている。まあ、ここに入りに来たんだし、別にいいかと思ひ、俺の実力を肌で感じていた3人に目を向ける。

「ああ、わたしは悔しいが、こいつには勝てないって肌で感じたぜ」

「私もだ。私たちと同年ぐらいなのに既にマスターと同じぐらいの魔力を有しているとは……」

「俺もこいつには絶対に勝てねえってことはわかったぜ」

3人の話を聞いたマカロフさんは頷いた。

「そうか。にしても、まさかナツに続いて2人目の滅竜魔導士がうちのギルドに来るとは……何やら縁を感じるのお。それより聞きたいのじゃが、お主はどこでそれほどの力を手にしたんじや？お主ぐらいの年齢には合わない強さだというのは3人の話で分かった」

……ああ、俺が年齢に合わない強さだから疑問を思ったのか。ん、どうするべきか。正直にヴリトラと毎日のようにガチンコバトルしてたとか言っても問題ないよな？

いやいや！しかし、こんな話をしてても信じるわけないよな……だって竜だぜ？竜とガチンコバトルしてたなんて話を信じる……か。フエアリーテイルの人だし……。

よし！言おう！

「実は俺は1年前まで破邪竜のヴリトラと一緒に暮らしていたんだ」

「1年前……ナツと同じじゃな。777年7月7日にナツの元から火竜イグニールが消えたと聞いたが……これは本当のようじやの」

ナツという前例があるので、やはり信じてくれた。よかったぜ。

「話をつづけるぜ。俺は赤ん坊の頃にヴリトラに拾われて、5歳頃からヴリトラに滅竜魔法を習って、6歳頃から実践をしていたんだ」

「……つまり、お主は今は大体12歳じゃから……5、6年も竜と戦闘訓練をしとったんか!？」

物凄く驚くマカロフさん。この話を聞いていたグレイ・エルザ・ミラ、気絶したナツを看病しているリサーナにエルフマンも話が聞こえたのか驚いて口を開けている。

「……ま、まあ、よいかの。さて、お主はうちのギルドに入りたいと言っておったの」

「ああ。そのために態々、この大陸の反対側から来た」

1年間の修行も兼ねてな。

「遠路遙々よく来たの。魔導師ギルドフェアリーテイルはお主を歓迎するぞい!」って言うても、今は大半のメンバーがいないがの」

確かに、まさか俺が来る日にこんなにギルドが静かとは……原作じやあ、毎日が騒がしいギルドだったから、若干寂しく感じていたんだよな。時間が立てば、帰ってくるかな？

「今日は一旦、ここに泊まるがよい。明日には皆が帰ってくるはずじゃし、その後にお主のことを皆に紹介しよう」

「よろしく頼む。マカロフさん」

俺はマカロフさんにお辞儀をし、顔を上げると笑ったマカロフさんがいた。

「ワシのことはマスターやじいさん、じじいでもよいぞ。お主はこれからワシの……ワシらの家族じゃ」

……家族、か。いい響きだな。

「よろしく頼むぜ！マスター！」

改めてお辞儀をし、今日はフェアリーテイルの仮面室に連れられ、そこで休むことにした俺であった。

～次の日～

俺が起きたのはお昼前だった。まさか、こんな時間まで寝てしまうとは。誰も起こそうとしなかったのか？

俺は仮眠室から出て、受付のあるギルドメンバーの集う部屋に出ると、

パン！パンパン！！

「！？」

いきなり、目の前でクラッカーの音が響く。

『ラグナ！フェアリーテイルにようこそ！！俺たち（あなた私たち）はお前を歓迎するぜ（するわ）！これから一緒に頑張ろうぜ（りましょ）！！』

「うわー！」

空中には魔法で書かれた文字に、フェアリーテイルにようこそ！ラグナ！と書かれていた。

テーブルには宴の準備で、飯や飲み物が大量に置かれていた。

驚く俺の前にマスターが現れた。

「ラゲナよ。こっちに来るんじゃない」

「？」

俺はマスターに連れられ、カウンターに座る。

「お主にフェアリーテイルの魔導師の証であるこの……紋章を身体
のどこかに押させてもらうぞい。どこに押してほしい？色は何か希
望はあるか？」

「んゝそうだな……押す場所は左腕、色は黒で」

俺は指でここと左腕を指し、色も言う。

「あいわかった。……では押すぞい」

ペタン

紋章をつけてもらい、俺の左腕にフェアリーテイルの魔導師の証が刻まれた。

「よし！お前たち！今日は新しい仲間……家族を祝う宴じゃ！存分に騒ぐがいい……！」

『おおおおおおおおおお……！！！！！！！！！！』

マスターの言葉と共に、一気に騒ぎだすギルド。

そんな中、

「おい、爺」

マスターの孫、ラクサスが俺とマスターに近づく。

「どうしたんじゃラクサス」

「どうした？じゃ、ねえよ。俺はこいつの実力を知らねえ。納得できねえんだよ。だから……」

第2話 フェアリーテイル（後書き）

終わり方は変ですが、次回はVSラクサスです。楽しみに！

第3話 ラグナVSラクサス

SIDE:マカロフ

「ラ、ラクサス！止さんか！」

ラクサスめ！いきなりラグナに殴りかかりおって、折角の宴が台無しになるじゃろうが！

ワシはラクサスを止めようとするが、ラクサスの拳はラグナを捉えた……かのように見えたんじゃが、

「何だ？この温い拳は？」

あの一瞬で、ラクサスの拳を止めたのか！？やはり、年齢に合わない強さを持っているようじゃの。

「拳って言うのはな……こういふことを言っただよ！」

ブウオン！

「がああっ！」

おお、ラクサスが逆に殴られてギルドの外に吹き飛んだぞい。随分、腕力もあるのお。

「じ、爺さん！止めなくていいのかよ！」

「ん？ 그레이か。これこれ、何で服を脱いでおるんじゃ」

「はっ？ ってああ！ いつの間に！？」

ワシに言われて、自分が服を脱いでいることに気づいた 그레이は、落ちていた自分の服を着おった。全く、その脱ぎ癖を早く治さんか。

「よし！ 爺さん！ ラグナとラクサスの戦いを止めなくていいのかよ！」

「ふむ。止めてもいいのじやがの、ラクサスには自分よりも強いものと戦ってほしいと思っていたところじゃ。

あ奴は少し、調子に乗る癖があるからのお」

ラグナが来てくれたのはいい刺激になりそうじゃわい。

ビシャアアア~~~~ン！

おお！ラクサスめ、本気でレイジングボルトを放ったのお。これはこれからギルドがどう、成長していくのが楽しみじゃわい。

＼SIDE：マカロフ　OUT＼

＼SIDE：ラグナ＼

まったく！いきなり殴りかかるとは……こいつ、頭が脳筋なのか？思わず、殴り返してギルドの外まで吹き飛ばしてしまったじゃないか！

「て、てめえ（怒）」

あーらら。ラクサスの奴、お怒りのご様子。でもよく、どう見ても正当防衛だろ？俺はいきなり殴られたんだから。

「んで？何でいきなり俺を殴ってきたわけ？」

「決まってるだろ。俺がいない間に魔物の大軍を一人で殲滅しただつて？俺は信じねえぞ！てめえみたいなガキが、大軍を相手に無傷だと？ざけんな！」

俺はなあ、このギルドで一番なんだよ！最強は……俺だけでいい！！

そう言いながらラクサスは雷を纏って俺に突っ込んできた。

そんなラクサスを俺は、

ガシッ！

「んな！？」

突っ込んできたラクサスを片手で止め、そのまま、

ドシャアアアン！

「ぐあ！」

地面に叩きつける。続いて、ラクサスの足首を掴み、

「礫岩迫落撃！」

ジャイアントスイングのようにラクサスを振り回して投げる。

「がああ！なめんな！」

ラクサスは空中で体勢を立て直し、上空に手を向ける。

「食らいやがれ！鳴り響くは招雷の轟き・・・天より落ちて灰燼と化せ！レイジングボルト！！」

空中から極太の雷が俺目掛けて降ってきた。

「アーハッハッハッハ！これで終わりだガキ！」

俺の目の前に雷が迫る。

けどな、

「（ニヤリ）いただきます！」

俺は口を開き、雷を喰らう。

ガブガブガブッ！

「アーハッハッハ……なん……だと」

自分の一番強い雷の魔法を喰われたことに驚くラクサス。

「ど、どうなっていやる！？」

慌てているラクサスを見ながら俺は説明する。お、ギルドメンバーの大半が俺とラクサスの戦いを見ているな。説明が省けていいか。

「教えておいてやる。俺は破邪竜の滅竜魔導士だ。ドラゴンスレイヤー 滅竜魔導士が何を食べるかは……知っているよな？」

俺はそういうと、エルザが話す。

「あ、ああ。滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーは自分と同じ属性の魔法を喰うことができ、自分の放った属性の炎は喰うことができない……そう、ナツから聞いているが……」

「そう。通常の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーはその通りだ。だが、俺は……いや、破邪竜は違う。破邪竜は魔力の籠っている魔法なら何でも喰らえる」

『な、なんだってええええええええ！？』

俺の説明に大きく驚き、声を上げるギルドメンバー（マスターを含む）。まあ、驚くよな。何たって俺には放出系・射撃系・幻覚系などと言った魔法のほとんどが無意味なんだからな。

「まあ、魔力のないもので喰えるのは、？闇」……つまり、暗い場所、夜とかは俺の戦闘のテリトリーってわけさ……俺は闇を支配するものだ」

俺は説明をしながら手に先ほど、ラクサスの魔法からいただいた雷の魔力を破邪竜の魔力と混ぜる。

「そして、破邪竜の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーには、もう一つ特典がある。それは……喰らった属性の魔力と破邪竜の魔力を混ぜることで、数倍以上の威力で相手に返す」

ゾクッ！

「（ちょっと待てよ。さっきのレイジングボルトにはかなりの魔力を込めて放ったんだぞ！？もし、それが帰ってきたら……）よ、止せ！」

「お前から売って喧嘩だろ？俺、売られたケンカは倍にして返すのが主義なんだよ」

ゴオオオオオオオ！

俺の両腕にあり得ないほどの黒い雷を纏う。

「終わりだ！ブツ飛べ！破邪竜の……」

「や、やめっ！」

「翼撃！」

両腕を黒雷化させ、2枚の翼のように変化させてラクサスを吹き飛

ばす。

「うぐうう あああああ！！！！がっ はああああ！！」

黒雷で吹き飛ばされたラクサスは吹き飛ばされ、地面に横たわっている。横たわるラクサスの体からは黒い雷がバチバチと音を立てている。

「そこまでじゃな。勝者ラグナ！」

マスターが静かに勝利者宣言をすると同時に、

「すげえ！あのラクサスに勝ちやがった！」

「嘘だろー、あのラクサスが新人に負けるのかよ！？」

「すげーなラグナ、俺と勝負しろー！」

「やめとけナツ、あのラクサスが挑んで負けたんだ。お前が勝てる訳ないだろ」

「んだと！やってみなきゃわかんねーだろーが！」

周りが段々うるさくなってきたな。まあ、これが普段のフェアリーテイルだってことだしな。

そう思っていると、

「はあはあ……」

息を荒くしながら立ちあがるラクサス。

「はあはあ……次、戦うときはぜってえ勝つからな！！覚えておけよ！」

「ツクク！いいぜ？俺はいつでも挑戦を受け付けているからな」

立ちあがるのが大変そうなラクサスに手を差し伸べ、ラクサスはふんっ！といいながらも手を握る。

立ちあがったラクサスはギルドの中へと入っていった。

俺は他のメンバーに背中を押されながら、ギルドの中に入って、宴を楽しんだのであった。

余談であるが、宴の最中、俺は間違ってジュースの樽と酒樽を間違えて飲んでしまい、大暴れをしたというのを次の日に皆聞かされて驚きはしたが、記憶がないことから本当だと思い、ギルドを壊した修理費として前から持っていたお金をマスターに渡した時のマスターの驚いた表情を忘れないことをここに記しておこう。

第3話 ラゲナVSラクサス（後書き）

次回は……少し時間が飛んで3年後。

オリ主設定（前書き）

12歳児のラグナの設定を書き忘れていました（汗）

オリ主設定

名前…ラグナ・ギース

性別…男

年齢…12歳（原作6年前）

容姿…金髪で髪型はロキ（レオVer）と同じで、瞳の色はアクアブルー。身長は150cm、体重は40kg

所属…妖精の尻尾

紋章の位置…左から部分に黒い紋章

好きなもの…ヴリトラ・自然・コーヒー（子どもなのに……）

嫌いなもの…傲慢な奴・人の努力をバカにするやつ・仲間を傷つける奴・命を軽く見る奴

特徴…Fairy tailの世界に転生し、転生したらしたで両

親に捨てられ、森の中で目を覚ます。

その後、破邪竜ヴリトラに拾われ、育てられる。5歳頃、ヴリトラが消えるまでの間にヴリトラとの修行と言う名の死闘を繰り返すうちに仕える魔法が徐々に増えていき、魔力の底上げをし、滅竜魔法を覚える。

自分に対する危機察知能力はもはや、超直感並み。

ちなみに、自分に向けられる好意には鈍感ではなく、気づいていたりしても自分からは何も言わず、相手が言ってくるのを待つというDSな部分を持つ。

能力…まずは、転生時に貰った特典について

？魔力チート級……チートではあるが転生後、修行によってさらに磨きがかかる。完全に使いこなすことができる

？武道の才能…アニメやゲーム、漫画に出てくる体術関係の技を使うことができる。が、修行しなければ意味はない。才能だけでは意味がないのだ。

？物造りの才能…？と同じでアニメやゲーム、漫画に出てくる武器を作ることができる。しかし、材料がなければならぬし、Fairytaleの世界で手に入らないものがある。そこは、この才能でその必要な材料を何故か作ることができたことにはラグナ自身も不思議に思っている。

？魔眼… 大量的な眼関係を言えば、NARUTOからは写輪眼・白眼など。ただし、写輪眼に関しては万華鏡写輪眼を使うことはできない。自分にとって大切な人を殺さなければならぬからだ。しかし、写輪眼の力自体は使える。伝勇伝からは複写眼や殲滅眼である。後は…… 直死の魔眼などである。直死の魔眼はラグナ自身で制御し、普段の眼と他の魔眼、直死の魔眼と言った風に切り替えることができる。

？ネギま！・テイルズ系シリーズ・RAVEの魔法系全般… その名の通りである。修行したので使えます。

ここからは転生後、手にした能力…… と言うよりも魔法。

1・破邪竜の滅竜魔法

その他… 原作知識は7年後まではある。それ以降は知らない。

第4話 ギルドに入って早3年

〔SIDE：ラグナ〕

「グルオーーズ!!」

今、俺は何十、何百という魔物の軍勢が目の前に広がっている。何故、俺がそんな魔物の軍勢の目の前にいるのかという……俺はギルドに入った1年後、S級魔導師になった。

んで、今はそのS級魔導師のみが受けることのできるS級クエストをしている真つ最中だ。

依頼の内容は『ここ最近、街の近くで巨大な魔物とその配下の魔物達が大暴れしているせいで、商人たちが街に来ることも出ていくこともできません!どうか、魔物達を退治してください!』だった。

普通であれば、これはS級クエストではないはずなのだが、親玉がワイバーンで、しかもそのワイバーンが評議会に賞金をかけられていた魔物だった。何で100年以上生きている危険なワイバーンらしい。

そのクエストが評議会からFairytail……俺に回されてきた。評議会からのクエストなのでさすがに断ることができず、今に至る……というわけさ。

「おいおい……報告にあった魔物の数……増えていないか?」

どうやら、俺がここに向かっている間にどんどん数を増やしていった魔物達は、ゆっくりとこちらに向けて近づいてきている。幸い街は非常警戒態勢のため、城壁のように防御魔法壁を展開している。これで、俺が本気を出しても街には被害がないな。

俺は眼……魔眼の一つ、直死の魔眼を展開する。両手には換装で呼び出した剣……テン・コマンドメンツ。

「狩らせて貰うぞ、貴様らの命を！」

そう言い、俺が駆けだす。それと共に魔物達も俺目掛けて駆けだす。

「音速の剣・シルファリオン！！」

ザシュシュシュ！！

高速で攻撃し、正確に？線”を切っていく。それだけで、斬られた魔物達は死に絶える。

「そらそらそらそら！どうしたどうした！！軍勢の癖に突っ込むことしか脳がねえのか！！」

俺は剣の形状を変える。

「爆・速・連携！爆竜の翼！！」

シルファリオンからエクスブロージョンにすることで、爆撃を魔物の軍勢に飛ばす。

「グオオオオオオ！！！！」

爆撃を喰らった魔物達は悲鳴を上げながら消滅していった。

「キシヤアアアア！！」

コウモリみたいな魔物が俺に向かって超音波らしきものを放つが、

「メルフォース！」

コウモリモドキを吹き飛ばし、超音波を消し飛ばす。

「キャオオオオオ！！」

今度はオオカミと爬虫類が合体した魔物が俺の背後から近づいてくるのがわかった。

ザシュン！ザシュン！

「双竜の剣・ブルークリムソン」

それを俺は双剣・炎と氷の剣で斬りさく。生憎、俺には死角はないんだ！

「ブルウウアアアアアア！」

今度はイノッサスモドキかよ……はあ、何なんだよこの魔物達は。よく見たらワイバーンもりオレウスに似ているし。

「ああ、もう！邪魔くせえ！シルファリオン！」

ザシュ！ザシュシュシュ！

突進してくるイノッサスモドキ達の？線”を切り、その命を狩り取

る。

「このまま、一気にぶっ飛ばすか……破邪竜の咆哮!!」

口から黒いブレスを吐きだす。炎や雷だと被害が大きいので、今回は通常のブレスだ。

ドカアアアアン!!

魔物の軍勢をあらかじめ吹き飛ばし、レウスモドキの前に立つ。

「ギャオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!」

ん!?何やら紅いオーラを纏い始めたぞ!?あれ、何か怖いぞ!

「ギャオオオオオオオオ!」

バシユン!

「げっ!火球撃ってきやがった!メルフォース!」

火球を風圧で吹き飛ばそうとしたが、威力が衰えないし、吹き飛ばないだと!?

「ちい!」

その場から離れると、火球は目標を失い、地面に当たると、

ゴオオオオオオオオオオ!!

巨大な火柱が上空へと伸びていった。

ギツギツギツギ……

「ま、マジで?」

俺はゆっくりレウスモドキを見上げる。通常の火球とそんなに変わらなかったのに……強いなこのリオレウスモドキ! ナツじゃないけど、燃えてきたぜ!

俺はテン・コマンドメンツを仕舞う。

「行くぜレウスモドキ！」

俺はレウスモドキへと駆けだした。

＼SIDE：ラグナ＼

＼SIDE：第三者＼

レウスモドキに駆けだしたラグナ。そんなラグナに火球を何発も放つレウスモドキ。火球がラグナに迫るが、

ガプガプッ！

ラグナは自身に飛んでくる火球を走りながら喰い始める。

「クハァー！いい味の炎だな！ナツがいたら喜ぶだろうな。それと……喰ったら力が湧いてきた！」

「ギャオオオオオオ！」

レウスモドキは自分の火球を喰われたことに驚き、ブレスを放つ。

「ハッ！面白い！滅竜魔導士である俺にブレス勝負を持ち込むか……いいだろう！どちらのブレスが強いか、勝負と行こうか！破邪竜の咆哮——！」

ラグナは先ほど、喰らった火球の魔力と一緒に黒い灼熱のブレスを放つ。

レウスモドキとラグナのブレスが激突する。二つのブレスが激突すると上空へ炎の柱が伸びていく。

「ギャオオオオオオオオオオ——！」

「俺は……ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士だああああ——！！！」

叫ぶラグナ。ラグナの感情が高まると共にブレスの威力が増す。そして、

シュドオオオオオン！

「ギャアオオオオオオオオ！？」

よろけるレウスモドキ。

ラグナはその隙を逃さないで追撃をかける。

「破邪竜の鉄拳だ！オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！！！！！！！！」

破邪竜の鉄拳の連撃をレウスモドキに食らわすラグナ。ゆうに100を超える打撃は全てレウスモドキの体にぶつかる。

「グ、グオオオオオオオオオッ！！」

苦しむレウスモドキは翼を広げ、飛翔する。

「ギャオオオオオオ！！！！」

そのまま、飛翔しながら火球を放つ。

火球はラグナの周りに落ち、爆風を起こす。

「ちい！逃がすかあああああ！！」

ラグナは風の魔力を足に溜め、一気に爆発させる。

「うおおおおおお！！破邪竜の剣角！！！」

レウスモドキに突っ込みながら黒い炎を纏ったラグナはそのまま、
レウスモドキの腹に激突し、貫いた。

「ギャオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！」

今までにないほどの痛みを感じ、悲鳴と言う名のの叫び声を上げる
レウスモドキ。

「終わりだ！破邪竜剣・絶刀！！！」

両手首から黒い炎を纏った剣を出し、その剣でレウスモドキの身体
中を高速移動しながら切り刻んでいく。

「これが終焉だ。お前の身体中にあるすべての“線”を切り裂いた」

「ガアアアアアアアアアアアア！！！」

レウスモドキの尻尾が、翼が、足が、鱗が、首がバラバラにされ、上空から地上へと落ちていった。

それを見届けたラグナは、街の方へと向かった。

「街」

街の門前に立つラグナは門の中にいるであろう者たちに声をかける。

「おーい！魔物達は全部倒したぞー！！ここを開けてくれー！」

「っ！？ほ、本当か！あの軍勢を……たった一人で！？」

「ああ。信じられないなら見てくるがいいさ」

「わ、わかった！門を開けろ！！対物理・魔法障壁解除だ！急げ！」

『了解！』

門の中からそんな指示らが聞こえると、少しして門が開く。

「お疲れ様です！さすが、フェアリーテイルの魔導師、フェアリーエンペラー妖精皇帝のラグナ様ですね！」

「止してくれよ。その二つ名をつけられた日にはエルザが顔を赤らめて、ミラ達が怒り狂った目でエルザと喧嘩したんだぜ……俺的には『剣聖のラグナ』か『破邪竜のラグナ』、『極魔神ラグナ』の方が馴染みがあるんだからよ」

ラグナはため息をつきながら門番に言う。そこへ、

「ありがとうございましたラグナ殿」

「おお、会長さんか。気にしないでくれ。これは依頼出来たんだし、当然のことをしたまでだぜ」

涙を流しながらラグナの手を握るこの街の会長。

「これは報酬のお金です。受け取ってください。それとこのカギをどうぞ」

そう会長はラグナにいい、お金の入った封筒と銀色カギ3本を渡した。

「これは星霊魔法……星霊召喚に必要なカギじゃないか。銀色か。この星座の形は……アンドロメダ座・ペガサス座・ペルセウス座だな。これ、もらってよかったのかよ」

「はい。あんなにも多くに魔物の軍勢を退治していただいたのです。これはこの街の住民達すべてのお礼です」

会長にそう言われ、ラグナは頭を掻きながら頷いた。

「わかりました。街の住民達の想いを無碍にはできないしな。ありがたく頂いておきます」

そっつい、ラグナは報酬のお金を懐にしまい、カギをベルトにつけ

た。

「では、俺はこのことを評議会に報告しなければならぬので、失礼させてもらいます」

「はい。もし、また、何かがありましたらその時もよろしく願います」

「ええ。では」

そついい、ラグナはその場から消えた。

＼SIDE：第三者 OUT＼

＼SIDE：ラグナ＼

はあゝまさかカギをもらうとはな。まあ、契約はあとでいいか。

あーあ。評議会にも提出する書類もあるし、めんどいな。エルザ達

に早く会いたいぜ。さっさと書類を提出して、エルザ達に会いに行かないとな。

俺は歩きながら書類を書き始め、評議会へと向かうのであった。

第4話 ギルドに入って早3年（後書き）

今回はラグナだけ、出ました。次回はフェアリーテイルに戻ったら
グナを迎えたのは……。

次回もお楽しみにしてください！

第5話 帰還、そして喰われるラグナ

〔SIDE：ラグナ〕

「では、またのお越しを」

「……………ああ」

俺は今、ようやく評議会に提出する書類を出し終わったところだ。
全く！すぐに終わるものかと思っただらこんなものまで出してきやが
って！

そう思いながら俺は掌で握っているモノ……………？せいてんだいまどつ“聖十大魔道”の証で
あるバツジだった。

何故、俺がこれを持っているかというところ……………それは今から1時間ほ
ど前に遡る。

魔物の軍勢を討伐し終えた俺は書類提出のため、会議室で待っている
魔法評議員二ノ席オーグ・魔法評議員三ノ席ミケロが待っている

らしいのでそこに向かっている。そこで、俺は2人の人物にあった。

「あら？妖精皇帝フェアリーエンペラーじゃない」

「ウルティアか。久しいな」

会議室前で会ったのはウルティアだった。その横には、

「久しぶりじゃないかラグナ」

「……ジークレイン」

そのもう一人は聖十大魔道せいとんだいまどうの称号を持つジークレインだった。

「何だ？あつて早々嫌そうな表情をして？」

「お前の笑顔は胡散臭いんだよ。作り笑いしやがって」

俺が嫌味を言っているとジークレインは笑う。

「クツクツク。こうでもしないと爺共とは一緒に仕事何ぞできないんでな」

「それは言えていますね。クスクス……」

笑い始めるジークレインに釣られてウルティアまでも笑い始める。全く……何なんだこの2人は？

「それより何でお前たちがここにいるんだ？誰かを待っていたのか？」

「ああ。お前を待っていたんだよ」

ジークレインが俺を指差す。

「俺？」

俺は首を傾げる。何でこいつらが俺のことを待っているんだ？何かしたっけ？うゝん……思い当たる節がないな。

「まあ、話は中に入ってからだ。お前のギルドのマスターもいるぞ？それにジユラも来ている」

ジュラさんも？それにマスターまで……何でだ？

「ほらほら、さっさと入ってください」

そう言いながらウルティアが俺の腕に抱きつきながら俺を引っ張る。
……ウルティア、俺を引っ張るのはいいが、胸が当たっているんだが。まあ、得と言えば得だが……一瞬、背筋が寒く感じたのは俺だけなのか？

そう思う俺を会議室に連れ込むウルティア。俺が会議室に入るとドアを閉めるジークレイン。

中には魔法評議員二ノ席オーグ・魔法評議員三ノ席ミケロ、以下数名の評議員、うちのギルドのマスターに、蛇姫の鱗ラミアスケイルのジュラさんま
でいた。一体、何なんだ？

「ラグナ」

「マスター。どうも」

俺に近づてきたマスターは俺を見る。

「怪我はないようじゃの。安心したわい」

「ええ、まあ。あの程度の魔物の軍勢なんて俺の敵じゃないですよ。それにワイバーンも」

レウスモドキは結構楽しめたけどな。

「……ふう、ワシが何故ここにいるのかが不思議なのじゃろ？これから始まる話を聞くのじゃ」

「？はあ……」

そう、マスターが言うと、会議室の明かりが消え、薄い光が発し始める。

「ラグナ・ギース！我ら、評議会の依頼を達成したのだな」

「オーグさん、はい。これがその書類です」

名を呼ばれ、オーグさんに書類を提出する。それを見て、驚くオー

グさんとその書類を隣から見るミケロさん。が、何やら納得した表情をする。

「ラグナ・ギース！お主には魔法評議員二ノ席オーグ」

「及び、魔法評議員三ノ席ミケロの名の元に」

「「そなたに聖^{せい}十大魔道^{たいまどう}の称号を与える」」

2人にいわれ、俺は……

「……………」

あまりにも突然な出来事に驚き、固まってしまった。

「これ、何か反応を見せんか」

オーグさんに言われて再起動する。

「すみません！ですが、聖十大魔道の意味が分からないんですけど」

うちのマスターがそれらしいけど、あまり話さないし何も言わないから良く知らない。

「確かに普通の魔導師では知るはずもなかったな、説明してやろう。聖十大魔道とはな、大陸で特に優れた10人の魔導士に与えられる称号のこと言うのだ。最近では、ジークレインや蛇姫の鱗リミアスケイルのジユラ・ネエキスが成っており。前から言えば、お主の所属するマカロフ・ドレアーがいるな」

「しかし、今は既に10人埋まってしまっている。のだが、聖十大魔道の1人で幽鬼の支配者ファントムロードのマスターであるジョゼ・ポーラは、最
近良からぬ噂が立っており。そのため、評議会はジョゼの聖十大魔道の称号を剥奪し、お主を新たな聖十大魔道の一人のすることが決定した」

オーグさんとミケロさんにそう言われた俺は驚きすぎて、開いた口がふさがらなくなった。おいおい、これじゃあ、ジョゼが原作開始してから、俺のことを目の敵にするんじゃないか？

まあ、結局貰ったんだがな。一番受け取った理由がミケロさんが受け取らないとギルドを解散させる宣言されて、マスターが口をはさんだが、ギルドのメンバーが起こした器物損害など、その他もろもろを突かれ、黙らされてしまった。

別にいいか。俺が聖十大魔道の一人になるだけでギルドに被害がないんならな。

まあ、そんなわけで俺の掌に？聖十大魔道”のバッジがあるわけなんだよ。やれやれ、先が思いやられるぜ。

「これ、ラグナ。何を黄昏れておる。早くこんか」

「おっと、いけねえ。すまんマスター」

マスターに声を掛けられて現実に戻る俺。今、俺とマスターは魔力で飛んで、ギルドに帰っている最中だ。

「しっかし、さっきから背筋が寒いんだよな……ギルドに帰ったら嫌なことがありそうな……」

「何じゃ、そんなこといつものことじゃろつて。お主が他の街で女性と仲よくした日にギルドに帰ると必ずと言っていいほど、エルザ達に迫られているじゃろが。全く、男としてお主が羨ましいぞ。あのエルザやミラ、カナにモフモフさせてもらえて」

顔を赤らめながら言うマスターに俺は言う。

「マスター。あれは確かに天国と言ってもいい具合の心地よさだな、それと同時に地獄に近くに逝けるんだぞ？3人に胸で顔に押しつけられたら息ができず、窒息死することが何度もあったんだぜ？」

「それもまた、男のロマンじゃ」

「小さいロマンだな」

「喧しいわ！」

ふん！といい、スピードを上げるマスター。それに続いて俺もスピードを上げる。

「それより、ラグナよ。あの件は考えてくれたかの？」

あの件……ああ、あれね。

「俺を次のギルドマスターにするって言うやつですか？」

「そうじゃ。お主なら人望もある。知名度もある。実力もワシ以上。」

「これほど、マスターになることができる人物はお主以外におらん」

「……俺がギルドマスター……ねえ。」

「けどよ、ラクサスはどうなんだよ?」

「あ奴はダメじゃ。力に執着しすぎておる。今のあ奴をギルドマスターの候補にするわけにはいかん」

「だよなあ。……どうするかね。」

「まだ、時間をくれ。俺にはまだ、ギルドメンバーの命を背負うほどの器はないんだ」

「……そうか。わかった。じゃがの、ワシはお主ほどの逸材、今後100年以上は現れないと思っておる。そのことを心に刻んでおいてくれ」

「……はい」

「……俺はこの、マスターの件にどういった答えを出すのか、まだわかんないな。」

それから数分後、

「おお、見えてきたぞ」

「おお、帰ってきたんだな俺。一週間ぶりだぜ」

一週間ぶりのギルドに感激する俺。

「皆のもの！今帰ったぞ！！」

マスターが先に入って大声で言う。

「マスター、お帰り〜！」

「爺さん！お疲れ様だな！！」

「じっちゃん！お疲れ〜」

ギルドの中からは元気なりサーナ・グレイ・ナツの声が外にまで聞こえてきた。さて、俺も中に入るかな。

俺がギルドに入ると、

「おお！ラグナ！帰ってきたのか！！」

「ラグナ！俺と勝負しろ！！」

「ラグナ、お帰り！！」

ダキッ！

りサーナが俺に抱きついてきた。おお、ミラに似て、スタイルが近づいてきたな。14歳なのに結構あるな。

俺はりサーナの頭を撫でていると、

「ラゝグゝナゝ」

「帰ってきたのね」

「リサーナにまで手を出しているのか？」

ゾクッ

背筋が凍る。ギツギツギツと音を立てながら後ろを向くと、そこにいたのはエルザ・カナ・ミラの3人だった。

「や、やあ、3人とも。今帰ったぜ」

汗をダラダラ流しながら3人に帰ってきたことを言つと、3人はにこやかな笑みを浮かべる。

「ああ、お帰りラグナ」

「会いたかったわ」

「だけどな、その前に聞きたいことがあるんだよ……」

ズシン……ズシン……

何故か3人が歩きたびにそんな音が聞こえ、いつの間にかリサーナが俺から離れ、テーブルに座っていた。

ガシッ！

「ヒッ！」

3人同時に方を掴まれ、

くんくん……くんくん……

3人同時に俺の匂いを嗅いだ。

そして、

ギロリ！

3人同時に俺を睨む。

「ラグナ。お前から私達やギルドメンバー以外の女の匂いがするんだが……」

「どういつことが、説明してくれるわよね？」

「事と次第じゃ……」

エルザが天輪の鎧で剣をいくつも浮かせ、カナは指と指の間に何枚ものカードを挟み、ミラはサタンソウルして、俺を見る。

「ま、待て！落ち着け！話を聞け！」

「『『問答……無用！！』』」

剣が、カードが、黒い波動が俺を襲う。

「ぎゃあああああああああ！！！！」

そのまま俺はギルドの仮眠室のある場所まで吹き飛ばされた。ギルドに穴を開けながら。

ピクピク……

か、身体中が痙攣する……ぜ。

ギリッ

顔を上げるとそこには、武装解除したエルザ達がいた。

「ま、まあ……他の女の匂いのことは見逃してやろう」

「だ・け・ど……」

「わたしたちの相手はしてもらわよ。カナ！」

ミラはカナに何かを指示している。

「わかつているわよ！」

そういい、カナはカードを何枚も仮眠室の入り口、窓に『封』と『防』と書かれた書かれた、俺特性カードを貼り付ける。

「ま、さか……」

俺の脳裏にあることが過ぎった。

「そのまさかだ／＼」

「一週間分、タツプリ絞らせてもらっわよ／＼」

「覚悟しろよ、このヤロー／＼」

顔を赤らめる3人は来ている服を脱ぎ捨て、俺に迫る。

「ま、待て！早まるな！？」

俺はとにかくこの場から脱出しようとするが、

バシユン！カチャ！

「んな！？」

第5話 帰還、そして喰われるラゲナ（後書き）

次回もお楽しみに

第6話 彼女になった理由。ギルダーツ登場し、100年クエストへ

〔SIDE：ラグナ〕

うう……窓から差し込む太陽の光が黄色を通り越して黄金に見えるぜ……。

あの後、俺はエルザ達に途中まで喰われていたが、途中から俺が喰う側になり、先ほどまで3人を喰っていたところだ。

その3人は全身を俺の汁で真っ白になってベットに横たわっている。お腹は不自然なほど出っ張っている。この出っ張っている理由は俺の出し汁が原因であることをここに述べよう。

「ま、まだラグナの感触が残ってるぞ。オマケに腹の中からタップタプ音がするし／＼／」

「わたしもだぞ。まあ、二十回も中に出されればそうなるだろうな。ちなみに、私は十七回出された」

「結局、最後まで意識を保っていたのってエルザだけよね。私は十四回辺りで意識がぶつつり切れてるわ。改めてエルザが化け物だなんて感じたわ。これ、もし危険日だったら絶対に妊娠しているわよ」

『うんうん……』

3人は同時に頷いた。ちなみに、上からエルザ・ミラ・カナである。3人はベットの上でお腹を触っている。その3人を見ながら俺は風の魔法を使い、部屋に溜まったイカ臭い、生臭い匂いを浄化していく。

全く、クエストから帰ってきてすぐにするんだからこの3人は。本来の半分しかでなかったじゃないか。

それにしても、本当に信じられないよな。この3人が俺の彼女になるなんて。フェアリーテイルに来た当初は考えもなかったよ。

そもそも、何で3人と俺が彼氏彼女の関係なのかというと……そう、あれは1年前、俺の14歳の誕生日の日起こった。

〈1年前〉

1年前には、既にS級魔導師だった俺は当時、同じ時期にS級になったエルザとミラ、S級魔導師が3人いるのでカナが来て、計4人でS級クエストに挑んでいた。

そのクエストの内容は『村はずれにある洞窟に住みついていた
グランドゴーレムを退治してほしい』というものだった。

グランドゴーレムとは、昔魔導科学者だった男が実験中に偶然にも
出来てしまった自立型ゴーレムだ。

強さは通常のゴーレムのおよそ数十倍。大きさは通常のゴーレムと
同じだが、パワー・耐久力・スピードは通常のゴーレムの比ではな
い。

そのため、フェアリーテイルにS級クエストとして、依頼を出され
ていたのを俺が見つke、行くことになったのだが、その日は偶然に
も俺の誕生日で俺が帰ってくるのが遅れるとかいう理由でエルザ・
ミラ・カナが俺に着いてきたんだ。

んで、その洞窟にいるであろうグランドゴーレムを見つけ、戦闘を
開始したのは良かったんだが……このグランドゴーレムの強さがマ
ジで異常だった。

エルザの放つ剣を全部弾き、ミラのサタンソウルの技も効かず、カ
ナのカード魔法も効かなかった。

そこで、滅竜魔導士である俺の出番だった。なのだが……グランド
ゴーレムを破壊したら、突如、グランドゴーレムが爆発と共に黄色
いガスのようなものを噴出した。

そのガスを吸い込んでしまった俺は突如、身体に痺れが起こり、倒れてしまったんだ。

俺はいつたいこのガスは何なのかと思い、俺の持つ魔物図鑑、魔法生命体一覧の中からグランドゴーレムのことに書かれた蘭を力ナに読んでもらった。

黄色いガスの正体は……超強力な痺れガスだった。しかもただの痺れガスでなく……遅効性の……興奮剤のようなものだったのだ。

その説明を聞いたエルザとミラ、読んだ力ナは顔を真っ赤にしていた。そして、視線は俺に向く。
3人は同時に頷き、俺に近づいてきた。無論、嫌な予感がした俺は動こうとしたが動けなかった。

くっ！いくら滅竜魔導士である俺でも毒ではなく、しかも魔力の籠ドラゴンスレイヤーっていないものなど、食べることができない。故に、自分で解毒することができなかった。

魔法を使って解毒することもできたが、麻痺のせいで思ったように魔力を使うことができず、今、エルザ達が俺に迫る。

「ラグナ……お、大人しくしていれば……ま、麻痺も早く取れるぞ

／／／

「そ、そうだぜ？お、大人しくしていた方が早く治るぞ／／／」

「あ、あんたは抵抗しないで私たちに委ねて／／／」

エルザは鎧を消し、服のボタンを外していく。ミラは上着を脱いで服のボタンを外していく。カナはジャケットを脱いで、水着のような格好のヒモを取り外していく。

さすがの俺もこんな光景を黙って見ているわけにはいかなかった。

「ま、待て待て待て！？いくらなんでもこ、こんなことでお前たちの初めてを奪う気はないぞ！？早まるな！！俺だったら自然治癒能力が高いから時間が立てば治るはずだ！」

俺の説明も虚しく、3人には効かなかった。それどころか俺の身体はだんだん、熱くなっていく。ぐっ！これが遅効性の痺れガスの効力か……。

うつ……身体が熱い／／／

「ラグナ……私たちはお前だから、こんなことをするのだ／＼」

「そうだぞ。いくら、私たちだって好きでもない奴とこんなことをしようとは思わない／＼」

「私たちを惚れさせたこと、後悔してね／＼」

そう言いながら服を脱ぐ、エルザ達。

「ま、待て——！！あ、アッ——」

そして、俺は3人に喰われたのであった。

（回想終了）

というわけなんだよな。

あれからなんだかんだで俺は3人をちゃんと愛している。ってか、ギルドにいた時、そんな好意を抱かっていたら俺、気づいているんだけどな……。

心の底でそういった感情を出さないようにしていたのかもしれないなあときは。

んで、あのO・K事件（俺が喰われた事件）の時に今までいかなかった自分の気持ちを言ってしまったってことかな？ しかし、14歳の誕生日は衝撃的で未だに鮮明に覚えているぜ。

さて、話はこんなところかな？ 3人のために飯でも持ってくるかな。そう思い、俺は部屋を出て、カウンターのところに行くと、そこには、

「おお！ ギルダーツじゃねえか」

黒いマントを着ているおっさん……ギルダーツがマスターと話していた。

「ん？ おお、ラグナじゃねえか」

「何してんの？」

俺はギルダーツの手にしている紙を見る。そこには、

「100年クエスト!？」

そう、原作で3年前にギルダーツは10年クエストのさらに上の100年クエストを受け、黒竜と遭遇し、大怪我をした。そうか。もうそんな時期か。

「そ。俺はS級魔導師になって結構長いからな。俺にこれが回ってきたんだよ。お前でもいいが、まだ若い。若者をこんな危険なクエストに行かせるわけにもいかないしな」

よっこいせつと言いながら席を立つギルダーツ。

「んじゃ、マスター。行ってくるぜ」

「気をつけるのじゃぞ」

「ギルダーツ!早く帰ってきて、俺と勝負しろよなこの野郎!」

ナツは勝負の約束をした。それを聞いたギルダーツは言う。

「あーはっはっは！俺と勝負？いいぜ？けど、だったら今よりもっと強くなっておいた方がいいぜナツ」

キリッとナツを見るギルダーツ。ナツは金縛りにでもあったかのようにな動けなくなった。

「じゃあな」

「ギルダーツ！これを持って行け！」

背を向けるギルダーツに俺は小瓶を渡す。

ガシッ！

「ん？何だこれ」

「それはどんな重症な怪我でも治す、俺特性秘薬だ！持っていて損はないぜ？」

「……おう！ありがたくもらっておくぜ」

そついい、今度こそギルダーツはギルドを出て、100年クエストに向かったのであった。

ギルダーツ。3年後、あなたは驚く事実を知ることになるんだ。元気な姿をあなたの娘に……カナに見せてやれよ。元

俺はギルダーツの無事を祈った。

第6話 彼女になった理由。ギルダーツ登場し、100年クエストへ（後書き）

はい。今回はエルザ達と恋人になった時の話しとギルダーツ、100年クエストへの話でした。

次回は……1年後、エルフマンがあのだを制御できなかった時の話です。

何でこんな話を書くかって？リサーナを救うためさ！

次回もお楽しみに！

第7話 原作の一つ、破壊完了

〔SIDE：ラグナ〕

ギルダーツが100年クエストに旅立って1年が経過した。俺はいつものようにS級クエストを終え、ギルドに帰ってきた。

すると、

「ラグナ！俺をS級クエストに連れて行けコンニャロー！！」

火を噴きながら俺に近づくナツ。俺は頭上に？を出す。何でいきなりS級クエストに連れて行けだあ？意味わかんねえ。

「ナツ。何で連れてって欲しいんだ？」

「ああん？ああ、リサーナがな、ミラとエルフマンと一緒にミラのS級クエストに連れて行ってもらったのが羨ましいんだよ！！」

？！何だと！？！？今日、今日なのか！？エルフマンが接収ビーストソウルを手に入れた代償として、制御できず、リサーナを傷つけ、リサーナがアニマを通してエドラスに行く日は！？
テイクオーバー

何か胸の中でのざわめきを感じているかと思えば……くそっ!!

俺は荷物を降ろし、身軽になる。それを見て不思議に思うナツ。

「どうしたんだ？」

「嫌な胸騒ぎがする。ちょっと行ってくる。お前は待っているろ」

突き離すように言うとナツは俺に突っかかる。

「行くのか？俺も……」駄目だ。S級になっていない奴を連れていくわけにはいかない。ミラがエルフマンとリサーナを連れていったのは2人の魔法の助けになるものがあるからだ。とにかく、俺は行く「ちくしょおおお!!俺も連れて行けてんだああああああ」

叫ぶナツを無視して、俺はギルドを飛びだしてミラ達のいるところへ向かった。

〈SIDE：ラグナ OUT〉

〔SIDE：第三者〕

ラグナがミラ達がいる谷へ向かっている頃、ミラとリサーナは窮地に立たされていた。原作通り、エルフマンはテイクオーバー接続したビーストソウルを制御できず、暴走していた。

「グオオオオオオオオオオ！！！！」

エルフマン（暴走モード）は木々を倒し、谷の岩を破壊しながら歩いている。その先には、傷ついたミラとそのミラを支えるリサーナがいた。

「ミラ姉、大丈夫！？」

「あ、ああ。けど、あのバカ！テイクオーバー接続に失敗しやがって！」

ミラは傷ついた身体を押えながらエルフマン（暴走モード）を見る。

「だ、大丈夫だよ。私に任せて！」

そう、ミラにいいエルフマン（暴走モード）の前に立つリサーナ。

「エルフお兄ちゃん。落ち着いて？一緒に帰ろう？フェアリーティルに……」

両手を広げていうリサーナであったが、

「ウガアアアアアアア！！！」

エルフマン（暴走モード）はその大きな腕で、リサーナを吹き飛ばそうとした。

その時である！

ガシッ！

「えっ！？」

「ラグナ！？」

リサーナの危機にラグナが駆けつけたのだった。

〈SIDE：第三者 OUT〉

〈SIDE：ラグナ〉

ふう……あぶねえ。間一髪じゃねえか。普段のスピードじゃ、間に合いそうになかったから腕時計型の重力装置をOFFにして、『呪霊錠』を解いてよかったぜ。

「うおりゃああああああ！」

俺はビーストソウル状態のエルフマンの腕を掴み、持ち上げて投げ飛ばした。

ドスウウン！

「グオオオオオオオオオ！」

痛みで悲鳴を上げるエルフマン。

「おい、大丈夫か！ミラ！リサーナ！」

俺はすぐ、2人に近づく。リサーナはほぼ無傷だ。ミラは結構重傷だな。とにかく治療するか。

俺は両手を横たわるミラにかざし、回復魔法を使う。滅多に使わないが、しっかりこちらでも修行していたので巧く治療できるんだよな。

「ラグナ……なんでお前がここに？」

治療を受けているミラが痛みに耐えながら俺に聞く。

「クエスト終わらして、帰ってきたらいきなりナツに「俺をS級クエストに連れて行けコンニャロー！」って言われてな。訳を聞いたらミラのS級クエストにエルフマンとリサーナが付いていたからって聞いたんだよ。それで、何か胸騒ぎがして、急いでここまで来た」

「そうだったのか……その胸騒ぎ、的中だな」

ドスン……ドスン……

「の、ようだな」

俺は治療の手を止め、音のする方を見ると、血迷った目で俺を見るエルフマンがいた。どうやら……一度、気絶させた方がいいな。

俺は2人を守るように前に立つ。

「2人はそこで大人しくしていな。ミラの傷は完全には癒えていない。リサーナ、ミラのこと頼むぞ」

「う、うん！（やっぱり、ラグナってかっこいい／＼こんな時になんだけど）」

ん？リサーナの顔が赤い？まさかとは思うが——じゃないよな？まあ、いいけど。さて、と。

俺の目の前にはお怒りのエルフマン（暴走モード）がいる。どうやって、気絶させるかね。頭を狙ったら危ないし……当身でもいいけど、力加減を間違えたら危ないしな……仕方ない。氷結して意識を奪うか。

「グガアアアアアアアアアア!!!!」

ドンドンドン!

俺に迫るエルフマン（暴走モード）

「はああああ!!」

俺の足元に青い魔法陣が展開される。

「凍てつく氷枢!!」

ピキイイイイイイイン!

「グウガアアアア……ガアアア……ガア……」

巨大な氷の塊の中で動かなくなるエルフマン（暴走モード）

そして、

ピキィ……ピキキキキ！パライイイイン！

氷が割れると共に元の姿に戻るエルフマン。完全に意識を失っているようだ。

「ふう……これで一安心だな」

俺はエルフマンに近づき、その巨体を肩に担ぐ。

「リサーナ。ミラに肩を貸してやれ。このまま、ギルドに連れて行くぞ」

「えっ？う、うん」

俺に言われ、ミラに肩を貸すリサーナ。

「よし、近づいて俺の肩に置くんのだ」

「い、いっしょっ」

リサーナが俺の肩に置いてあるのを確認し、俺は魔力を溜め、頭にギルドの位置を思い浮かべる。

「行くぞ。転移！」

シュン！

俺たちの姿は谷から消え、次に現れたのは……

シュタ！

ギルドの前だった。

「よし、着いた」

「ええっ！？ここ、ギルドだよね！？何で！？！？」

リサーナは驚き、声を上げる。が、今はそんな暇はない。

「それよりもミラの傷の手当てをするぞ」

「あっ！う、うん！ミラ姉」

「あ、ああ……」

俺たちはギルドに入ると……

「おお！ラグナもど……ミラ！？どうしたんだよその傷は！？」

ナツが出迎えたが、ミラの状態を見て驚き、声を上げる。その声にギルドにいた皆が気づき、慌てている。

ガヤガヤ……

……五月蠅い……怪我人があるんだぞ……

スウウウウ——

「——黙れ。静かにしろ——」

ピクッ……ガタガタブルブル！

一同、静まりかえると全員は身体をガタガタ震え始める。

「行くぞリサーナ、ミラ」

俺はリサーナにいい、救護室へ連れて行く。

（救護室）

気絶しているエルフマンをベットに寝かせ、ベットに横たわっているミラに治療を再開する。

数分後、大体の傷は塞がったが、失った血液や体力、魔力は回復することはできないな。後はミラの自然回復を待つしかないな。血液

は俺が作った増血薬を食べさせれば問題ないな。

そう、思っていると、

「うう……ここは……ギルドの救護室か？」

エルフマンが目を覚ました。

「起きたかエルフマン」

「ラグナ！？何でお前が……それに俺は確か……姉ちゃんとリサーナと一緒にS級クエストに……あ、あああ、あああああああ！」

エルフマンは何かあったかを思い出し、叫びを上げる。

「お、俺は何てことを……姉ちゃんに怪我を……リサーナにまで手を出そうとしたのか……ちくしょおおおおお！！」

泣きながら叫ぶエルフマンに近づき、胸倉を掴む。

「漢おつこがそんな情けない泣き方をするな！お前がするべきことはお前

の中にあるそのビーストソウルをしっかりと制御できるにすることだ！漢おとこなら家族を……仲間を守るために自分の力を制御できるようになれ！自分の家族を守るためにだ！」

「漢（男）……俺が姉ちゃんとリサーナを……ギルドの仲間を守る……」

涙を流すのを止め、真剣な表情をするエルフマン。

「ラグナ。ありがとうな。俺は……この力を絶対に制御してみせる！」

「その生きだぜエルフマン。それとミラ」

復活したエルフマンを見て、次はミラを見る。

「……ああ。わかっているよラグナ」

ミラは俺を見つめる。

「ミラ。しばらく魔導師業を休業しろ」

『なっ！?』

驚くエルフマンとリサーナ。そして、やっぱりか……と言った風な表情をするミラ。

「ミラの魔力の流れがおかしい。おそらく目の前で家族が家族に殺されそうになったことが原因だろうな。ミラは俺が知る限りでも5年前から2人のことを大事にしていた。そのことが原因だな。精神的な理由で魔力の流れがおかしくなる魔導師は稀にいと聞く」

俺が説明するとエルフマンとリサーナは申し訳ない表情をする。

「ごめん、姉ちゃん……俺のせいで」

「ごめん、ミラ姉。あたしが無茶なことをしたから」

元氣のない2人を見たミラはにっこりと笑う。

「あはは。気にするなよ、2人とも。これは私の精神が弱かったってことだし。それに……少しの間、魔導師業を休業してギルドで料理とか作ったりするのもいいかもな」

フッフ……と笑うミラ。だが、俺には悲しい気持ちを笑ってごまかしているように見える。

「2人とも……少し、外に出ていな」

『わかった』

2人は救護室を出ていった。

そして、救護室は俺とミラだけになった。

「ミラ。俺の前では我慢するな」

ビクッ

一瞬、ミラの肩が上がった。

「な、何のことだよ……」

「誤魔化すな。お前は本当は魔導師業を休業したくないんだろ？だ

けど、今の自分がクエストに行ったら明らかに足を引っ張る、失敗するかもしれないからああ言ったんだろ？」

「……ラグナ……」

泣きそうな表情をするミラを抱き寄せる。

「泣け。俺が胸を貸してやる」

「……うん。うつく……うっう、うっうっうっ！ うわぁっ、
うわぁぁぁぁぁん！！」

魔人と言つ二つ名のあるミラでもまだ、17歳と言つ女の子だ。いくら強くてもつらいことだってあるはずだ。

俺はミラの胸の中に溜めていたつらい気持ちを涙として流し終わるまで、胸を貸し続けた。

～SIDE：ラグナ OUT～

そして、エルフマンは見事、ビーストソウルを使いこなせるようになったが、大勢で戦う場合は仲間を巻き込む危険があると自身で思ったのか、集団で戦う場合は使うのを控えたとか。

ミラはその後、原作のようにカウンターで皆のクエストの受け付けや料理を振う姿、写真集などに乗るようになったのであった。

そして、舞台は……原作の時間へと進むのであった。

第7話 原作の一つ、破壊完了（後書き）

次回から原作突入です！
お楽しみに〜

オリ主設定2（前書き）

原作開始時の設定です。

新しくなったところには*と先頭にあります。*が先頭でないものは前の設定と同じです。

11月19日に増加。内容はラグナの滅竜魔法についてです。書き忘れていたのを付けました。

オリ主設定2

名前…ラグナ・ギース

性別…男

年齢…＊18歳

容姿…金髪で髪型はロキ（レオVer）と同じで、瞳の色はアクアブルー。＊身長は178cm、体重は60kg

所属…妖精の尻尾

紋章の位置…左から部分に黒い紋章

好きなもの（人・生き物）…ヴリトラ・自然・＊コーヒー、＊エルザ・ミラ・カナ・リサーナ、ギルドの仲間達

嫌いなもの（人・生き物・団体）…傲慢な奴・人の努力をバカにするやつ・仲間を傷つける奴・命を軽く見る奴、＊闇ギルド

特徴：Fairy tailの世界に転生し、転生したらしたで両親に捨てられ、森の中で目を覚ます。

その後、破邪竜ヴリトラに拾われ、育てられる。5歳頃、ヴリトラが消えるまでの間にヴリトラとの修行と言う名の死闘を繰り返すうちに仕える魔法が徐々に増えていき、魔力の底上げをし、滅竜魔法を覚える。

自分に対する危機察知能力はもはや、超直感並み。

ちなみに、自分に向けられる好意には鈍感ではなく、気づいていたりしても自分からは何も言わず、相手が言ってくるのを待つというDSな部分を持つ。

*魔導師ギルド、フェアリーテイルに入ってから仲間のためになら無茶をするようになり、特に自分の女たちが傷つくようなことがあれば敵を廃人にまで追い込むこともある。

それによつて、付いた新しい二つ名は「破壊神」。相手の精神から何まで崩壊させることから名付けられた。

普段は修行の一環で重力制御装置をONにし、呪霊錠はしたままにいる。強敵や倒すべき相手の時にのみ、OFFにし、開アンデをする。

能力：まずは、転生時に貰った特典について

？魔力チート級……チートではあるが転生後、修行によってさらに磨きがかかる。完全に使いこなすことができる

？武道の才能：アニメやゲーム、漫画に出てくる体術関係の技を使うことができる。が、修行しなければ意味はない。才能だけでは意

味がないのだ。

？物造りの才能：？と同じでアニメやゲーム、漫画に出てくる武器を作ることができる。しかし、材料がなければならぬし、Fairytailの世界で手に入らないものがある。そこは、この才能でその必要な材料を何故か作ることができたことにはラグナ自身も不思議に思っている。

？魔眼：大量的な眼関係を言えば、NARUTOからは写輪眼・白眼など。ただし、写輪眼に関しては万華鏡写輪眼を使うことはできない。自分にとって大切な人を殺さなければならぬからだ。

しかし、写輪眼の力自体は使える。

伝勇伝からは複写眼や殲滅眼である。

後は……直死の魔眼などである。直死の魔眼はラグナ自身で制御し、普段の眼と他の魔眼、直死の魔眼と言った風に切り替えることができる。

？ネギま！・テイルズ系シリーズ・RAVEの魔法系全般：その名の通りである。修行したので使えます。

ここからは転生後、手にした能力……と言っよりも魔法。

1・破邪竜の滅竜魔法

2・Fairy tailの世界の魔法全般。（例を上げるとグレイの造形魔法やエルザの換装、ルーシィーの星霊魔法）

くラグナの二つ名

- ・『妖精皇帝のラグナ』、エルザと一緒にいるときは『フェアリーカップル妖精夫婦』
フェアリーエンペラー
- ・『剣聖のラグナ』、テンコマンドメンツだけで魔物の群れを退治したからつけられた名。

・『極魔神ラグナ』、ネギま！の闇の魔法を使用し、姿が暗いオーラを纏っていたため、魔神を極めたもの……極魔神と名付けられる。

・『破邪竜のラグナ』、言わなくても分かるが、滅竜魔法を使っていたため名付けられる。（名づけられる前から本人が破邪竜のラグナと名乗っていたことも原因である）

く破邪竜の滅竜魔法についてく

・破邪竜の滅竜魔法は属性でいえば『闇』に近いです。破邪竜の特性は『付加』と『吸収』である。

『吸収』は物理系以外の魔法……即ち、放出系・幻覚系などと言った魔法はすべて吸収することができ、その吸収した魔力や魔法属性の属性を使う時に付加することで滅竜魔法の威力を倍以上にすることができるとができる。

破邪竜の属性は『闇』なので食べれるのは『闇』。といっても、『闇』は夜や暗い場所においてある物を食べればいい。例えば深夜に吹く風とか。

魔法は魔力が宿るものはすべて食べれる。これは本当の意味でチートである。

ナツやガジル、ウェンディのように自分の魔力で作ったものは食べれない。

オリ主設定2（後書き）

次回から原作だぜ！

第8話 帰還

〔SIDE：第三者〕

ここはとある森の中になる建物。時間は深夜である。

ドカアアアアアン！！

その深夜という時間帯に、建物は黒いオーラが発するとともに大爆発し、崩壊した。

『グアアアアアア！』

建物が崩壊する中、崩壊していく建物の中にいた人たちが空中に投げだされ、地面に叩きつけられていく。叩きつけられていく人達は次々と気絶していった。

「バ……かな。俺たち闇ギルド『剣達の円舞曲』^{プレイス・ワルツ}が……たった一人の魔導師に……壊滅……だとお！？」

唯一、気絶していなかったのは闇ギルド『剣達の円舞曲』^{プレイス・ワルツ}のマスター、『雷鳴のグル』は、自分のギルドを壊滅させた人物を見つめ

ている。

「てめえ、何者……だ」

震える指でその人物を指差す。

そして、

「俺か？俺の名は――」

深夜は終わり、朝日が人物に光を浴びさせる。

「俺はラグナ。フェアリーテイルのラグナ・ギースだ」

人物……ラグナはグールにそう、答えた。ラグナの名を聞いたグールはガタガタ身体を震え始める。

「ラグナ……だと！？あの、フェアリーテイル最強の男、破邪竜のラグナか！？」

グールに二つ名を呼ばれたラグナはニヤリと笑う。

「おお、その二つ名で呼んでくれるのか！いやゝよかった。ここ最近、破邪竜なのに、破壊神とか呼ばれて、少し元気なくてさゝ、よかったよかった」

うんうん……と頷くラグナ。そんなラグナを見てグールはこう思っている。

「（……確か魔法一発で俺たちのギルドの建物を破壊するんだから、破壊神と呼ばれても不思議じゃない気が……）」

「何かいったか？」

ピクッ！

グールの心の底で考えていたことに気づくラグナ。

「い、いや！？な、なんでもないです！」

「そうか？んで、ちょっと聞きたいんだけど……」

ラグナは倒れているグールの目線と同じぐらいになるように座り込む。

「お前たち『剣達の円舞曲』^{ブレイズ・ワルツ}は、確かバラム同盟の一角である六魔^{オラシオンセイイス}將軍の傘下ギルドだよな？」

「あ、ああ。そうだが……」

グールは爽やかな表情で聞いてくるラグナに少し、恐怖を持ち始めていた。そして、

「六魔將軍^{オラシオンセイイス}の拠点は知っているか？ここ最近、悪魔の心臓^{グリモアハート}・冥府の門^{タルタロオラシオンセイイス}・六魔將軍の傘下ギルドを潰しまくっているんだよ」

「（ひ、ひいいいい！？た、たった一人でバラム同盟の傘下ギルドを潰しているだお！？化け物かこいつは！？）そ、そそそそ、それで、自分に何を聞きたいのでしょうか（汗汗）」

冷や汗を流すグールにラグナは聞く。

「ああ。3つのギルドのどこでもいいから拠点を知っていれば……
教えてくれないかな？」

「そ、そそそ、そんなこと言われまして、じ、自分達は所詮下っ端の傘下ギルドですぜ？知っているわけないですよ！」

グールは嘘偽りなく言っているようだ。そんなグールの目を見ているラグナはグールがウソを言っていないことに気づき、立ちあがる。

「そうか。手間をかけたな」

クルッ

そういい、ラグナはグールに背を向け、歩き出した。

「（チャンス！奴は無防備だ！この雷鳴のグールに背を向けたことを後悔するがいい！）死ねええええ！！ライトング・ボム！！」

グールは手から手榴弾ぐらいの大きさの雷の塊をラグナ目掛けて投げた。

ドカアアアアアン！

「シャア————ハッハッハッハッハ！いい気味だぜ！シャア

「ハッハッハッハ……ハッハ？」

「ふむ。なかなかの威力の雷だったな」

爆発した地点でラグナは何もなかったかのように佇んでいた。

「バカな！？俺の最大火力のライティング・ボムだぞ！？」

「アハハハ。俺には魔力の籠った放出系とか爆発とかは聞かんぜ？それと本当の雷つてのはこういうのを言うんだよ……喰らえよ！ライティング・クラウド！」

「バチイイイイイイン！！！」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア……（なんという……威力。俺とは天と地の差も……あるのかよ……これが……フェアリィテイルのラグナ・ギース……なのか）」

「バタン！」

黒焦げになったグールを余所にラグナは遠くを見渡す。

「そう言えば、原作開始しているよな。そろそろ、ギルドに帰るか」

そついい、ラグナは人差し指と中指を額に当て、その場から消えた。

数分後、その場に近くの街の兵士たちがやってきて倒れている『剣
ブレイズ・ワルツ
達の円舞曲』のメンバーとマスターである雷鳴のグールを捕縛した。

近くには『こいつらのことはよろしく頼んだぜ？ B Yラグナ・ギ
ース』と書かれたお気手紙のような者があつたとか。

＼SIDE：第三者 OUT＼

＼SIDE：ラグナ＼

シユタ！

俺は闇ギルド『剣達の円舞曲』^{フレイズ・ワルツ}を壊滅させた後、マグノリアに帰ってきた。ギルドの前でなく、マグノリアの門から入っていく。

「ラグナだ！みんなラグナが帰ってきたぞー！！！」

ここ、フィオーレ王国、東方、マグノリアの街は人口6万人が住んでおり、古くから魔法も盛んな商業都市だ。この街で顔が広い俺を見た、街の住民達が俺に声を駆けてきた。

「おかえりラグナちゃん。今回はどうだった？」

「まあ、ぼちぼちな。それにおばちゃん、いい加減“ちゃん”はやめてくれよ、俺もガキじゃないんだから……」

「おう、ラグナ！おめえ今回の仕事はどうだったんだ？」

「ん、まあ割と簡単だったよ。おっちゃんの商売の方は？」

「うっ！？おめえ…それは聞いちゃいけないぜ」

『アハハハハハハハ！』

おっちゃんの返答に周りのみんなが笑う。

改めて自己紹介をしよう。俺の名はラグナ・ギース。この世界に転生した転生者だ。まあ、原作の細かいことはあまり覚えていないが、大きな出来事は覚えているつもりだぜ？

俺が生まれて早18年。内11年は破邪竜ヴリトラに育てられ、今から7年前……777年7月7日にヴリトラは俺の目の前でどこかへと飛び立っていった。

その後、俺は魔導師ギルド『フェアリーテイル』に入り、今年で6年目だ。今ではギルドの仲間たちとバカ騒ぎをしたりして、第2の人生の青春を謳歌している最中だ。

そして、前世ではいなかった彼女が今現在、4人いる。

4人とはエルザ・ミラ・カナ・リサーナだ。リサーナは1年前に告白され、OKを出したその日に初めてを奪ってしまったぜ

早く、4人に会いたいぜ♪

マグノリアの街の中心にそびえたつ教会カルディア大聖堂を抜けるとそこにはこの街唯一の魔導士ギルド妖精の尻尾がある。

其処こそが俺の帰る場所であり仲間かぞくがいるところだ。

「帰ってくるのは一カ月ぶりかね？みんなは変わらず元気のようだな」

ギルドの前に立つと中から騒がしい声が聞こえてくる。まあ、いいか。中に入るかね。

「みんな、ただいま〜。ラグナ・ギース、今帰還したぜ！」

パンパンパン

そこで一斉にクラッカーが鳴らされた。

「おお、すげえお迎えだな」

予想以上の出迎えに驚いたぞ。

「ラグナ〜お帰りなさ〜い♪」

「お帰り〜ラグナ〜♪」

ギュッ

ミラとリサーナが俺に抱きついてきた。おお、左右から心地いい感触が……堪りませんなw

「2人とも、ただいま〜。元気にしていたか？それと、あまり皆の前で抱きつくのはやめてくれ（嬉しいけど）」

「いいの！〜これが私の出迎え方なんだもの！」

「いやいや！？みんなの視線が痛いんだよ俺が」

「気にしない方がいいと思うな♪」

くっ！この姉妹に何を言っても無駄なのか！？俺はギルドのみんな

（男女問わず）からすごい目で見られているんだぞ！？

「とにかく、一度離れてくれ。俺は今からマスターに報告しないと
いけないんだからな」

「ええー」

「そんな殺生な〜」

ぶう〜と頬を膨らませるミラトリサーナ。全く、変なところも似て
いるなこの姉妹は。

2人が離れると俺はマスターの所に向かう。

「マスター。今帰りました」

マスターはいつもどおり机の上に座っていた。見た目は小さな爺さ
んなんだが、彼は最高ランクの魔導士のみが選ばれる？聖十大魔導
”に選ばれるほどの魔力を持っている。まあ、俺も？聖十大魔導”
に選ばれているんだけどな。

「うむ。おかえり。どうじゃった、今回のクエストは？それに何故

こんなに遅くなったのじゃ？」

「クエストの方は簡単だったよ。遅くなった理由はクエストの帰りにバラム同盟の傘下ギルドの噂を聞いたんで、帰る前に色々と情報を集めていたらしいの間に一カ月経ってて……」

「なに？ 闇ギルドを潰しまわっていたのか？」

「ええ。合計で2、30ぐらいは潰しましたね」

マスターはそれを聞くと頭を抱えている。

「実はな……お主名義で評議会から報酬金が来ておる」

「評議会から？」

何で評議会から報酬金が？

「お主が潰しまわっていた傘下ギルドの中には評議会が危険視しておったのもあったらしいのじゃ。じゃが、評議会の兵達がいざ、ギルドの拠点に向かったところ、拠点は崩壊されており、ギルドメンバーすべては捕縛されていたとのことじゃ。お主、壊滅させたギル

ドに書置きみたいなものを残しておったじゃろ？」

……おお、そう言えば置いていった記憶があるな。

「その顔、本当らしいの。評議会はうちのギルドメンバーであるお主に借りを作りたいくないということで報酬金をよこしたんじゃよ」

「なるほど、これでチャラにしろ……ってことが」

「そついうことじゃの」

はあ……小さい奴らだね。

「さて、こんな話は終わりじゃ！今日はお前の帰還を祝っての宴じゃ。充分に疲れを癒せ」

そう言ってマスターはにっこりと笑った。

「おつともさ！」

そつして俺は振り返ってこう叫んだ。

「みんな、今日は宴だ〜!! 存分に騒げ! この野郎!!」

『おおおー!!!!』

こうして俺の帰還を祝う宴が始まった。

俺はミラとリサーナが作ってくれた料理を2人と話しながら食べたり、飲んでいると、

「ラグナ〜!! 俺と勝負しろ〜」

ナツがいきなりなぐりかかってきた

パシッ!! ブーン

それを俺は片手受け止めてナツを軽く投げた

「うわあああゝ、ぶふっ!!」

そのままナツは壁に突き刺さった。

「ナツ。俺は食事中だぞ。それにもう少し落ち着きをもてよ」

全く……俺はそう思いながら飲み物の入ったグラスを持っていると、

「すっごゝい、あのナツを片手でさばくなんて……」

1人の女の子が俺に話し掛けてき。そして、顔を見て俺は驚いた。
もう、ギルドに来ているとは思っていなかったからな。

俺が知っていてもあちらは俺を知らないかもしれないし、名前を聞いた方がいいかな。

「君は誰？新人さんか？」

「あ、はい！はじめまして！私はルーシィ、この前フェアリーティ
ルに入ったばかりなの……よろしくね」

ルーシイはにっこり笑いながら右手を差し出した

「そうか。もう知ってると思うけど俺はラグナだ。ラグナ・ギースよろしくな、ルーシイ」

そう言っただけ俺も右手を差し出し握手しニッコリ笑った。

「……／／／」

その笑顔を見たルーシイは顔を赤くした

「ん？ルーシイ、顔が赤いけどどおした？（笑）」

ルーシイは多分、俺の笑顔を見て顔を赤くしているのかな、

「い、いや！なんでもないです……／／／」

「そうか？ならいいけど」

俺とルーシイが話しているのが面白くないと思う2人が俺たちに話しかける。

「2人はいつまで私たちを無視して、いちゃいちゃしてるのかなあかなあ……（笑）」

「ね〜。ラグナも女の子に手を出すのは早いね〜（笑）」

ミラトリサーナは黒いオーラをまといながら口だけで笑っていた

「い、いちゃいちゃなんてしてないですよ／＼／」

ルーシィはミラトリサーナの様子に焦りながらも反論した

「……じゃあ、その手はなに??（笑）」

「ねえ〜いちゃいちゃしていなかったらその手はなんなのかな〜」（笑）」

ミラトリサーナはいまだに繋がれている俺とルーシィの手を指差しながら言った。

「あつ!すみません!／＼／」

ルーシィはあわてて手を離れた。

彼女の顔はさらに赤くなっていた。

「ククク……気にしないでいいぜ」

「もう、ラグナ、ルーシィが恥ずかしがっているの面白がっているでしょ？」

「相変わらず、女の子をからかうの好きだね。（私の気持ちに気づいていたはずなのに私が何も言わない限り何も言わないなんて鬼畜だったよ。全く／＼）」

俺はその後ルーシィを入れた4人で楽しむ話をしながら宴を楽しんだのであった。

宴も終わり、みんなが付かれて寝てしまっている中俺はテラスの椅子に腰掛け、満月を見ながら1人でまだ飲んでいた。

俺に近づく気配が二つ。

「ミラにリサーナか」

「相変わらずすごい気配探知ね」

「もう探知ってレベルの話じゃないよミラ姉」

2人は俺の左右の椅子に座る。

「どうだった？久しぶりのギルドは？」

「ラグナが帰ってきて余計にうるさかったけど……どうだった？」

俺に顔を近づける2人。

「ふ、何を今さら……最高だぜこのギルドは」

俺は2人に笑いかけながら言う。

「そっか……よかったわ！あーあ、私も飲みたくなっちゃった」

「私も！」

2人がグラスを出すのを見て、俺は仕方ないな……と思い、持っていた酒を2人のグラスに注ぐ。

「飲むのはいいけど、飲み過ぎるなよ」

「「ラグナに言われたくないわ」」

2人同時に言われちゃったよ。

コチン

そして俺たちはグラスを合わせた。

その後、酔いつぶれて寝てしまったミラとリサーナを背中とお姫様抱っこしながら俺の部屋に運んだことを述べておこう。ちなみに、リサーナが背中でミラがお姫様抱っこな。

第8話 帰還（後書き）

次回、鎧の魔導師ことエルザ帰還！

第9話 エルザの帰還

〔SIDE：ラグナ〕

俺がフェアリーテイルに帰ってきた次の日、俺がギルドに入ると、

「うゝん……」

ルーシーが仕事の依頼が張り出された掲示板の前で、どのクエストをうけるか悩んでいた。

「？魔法の腕輪探し”に……？呪われた杖の魔法解除”……？占星術で恋占い希望”！？……？火山の悪魔退治”！？」

ルーシーは掲示板に張られている依頼を読んで驚き、声を上げる。

「どうしたんだルーシー？驚いた声を出して」

「あ、ラグナ。いや、依頼っているんなのがあるんだなゝって」

「気に入ったのがあったら私に言ってね、今はマスターいないから

……」

俺たちの会話が聞こえていたミラは言った

「ああ、そう言えば今日は定例会だったな」

俺はミラに言われたことで思い出した。確かに今日は定例会のある日だったな。

「定例会？」

ルーシイは定例会がなんなのか俺に聞いてきた。

「定例会ってのは地方のギルドマスター達が集って定期報告する会だ評議会とは違い……あーなんて言えはいいかな〜ミラ後よろしく」

俺は大雑把に説明して細かいところはミラにまかせることにした。

「OK……定例会っていうのは地方のギルドマスターたちが集って定期報告をする会よ。評議会とは違うんだけど……うん……ちよつとわかりづらいかなあ……リーダーズ、ヒカリペン貸してくれる？」

「ウイ」

リーダーから借りたヒカリペンを使ってミラは空中に文字を書き始めた。

「魔法界で一番偉いのは政府とのつながりもある評議員の10人。魔法界におけるすべての秩序を守るために存在するの。犯罪を犯した魔導士をこの機関で裁くこともできるのよ。その下にいるのがギルドマスター。評議会での決定事項などを通達したり、各地方のギルド同士の意思伝達を円滑にしたり私達をまとめたりするの、まあ大変な仕事ね」

ミラの説明を聞いてルーシイはへえ〜っと言っている、

「知らなかったなあ〜ギルド同士のつながりがあったなんて……」

そのことに感心するルーシイ。

「ギルド同士の連携は大切なよ。それをお粗末にしていると……ね？」

「????」

ルーシィはミラが話を急にやめたので不思議に思った

「黒い奴等が来るぞオオオオ」

「ひひひひひ！！！！」

ナツが声にドスを効かせてルーシィの耳元で言ったので、ルーシィは体を震わせて驚いた。

「うひゃひゃひゃ！！！！？ひひひ”だつてよ！！なに、びびってんだよ！！”」

「もオ！！おどかさないでよオ！！！！（ラグナの前で恥ずかしい想いをしちゃったじゃない！！）」

「ビビりルーシィ、略してビリィだね」

「変な略称つけんなっ！！」

ナツとハーピィはルーシィのビビり方がつぼにはいったらしく、思

いきり笑っている。

「だが黒い奴らは本当にいるんだよ。連盟に属さないギルドを闇ギルドと言つは……ルーシイも少しは聞いたことがあるだろ？」

俺はルーシイに問いかけた。

「えっ？ うん。法律も無視して人殺しの依頼でも受ける奴らの事だよな」

「そうその通り。特に正規ギルドに所属する奴を殺しに来たりするからな。暗殺とか毒殺など……まったくもって不愉快な奴らだ」

俺は少し、黒いオーラを纏う。それを見たルーシイは「ひいひい！？」と悲鳴を上げる。

「おっと、悪い。どうも闇ギルドって聞くとな」

「ラグナはね？数年前に闇ギルドの人たちに命を狙われたことがあったのよ。それからよね？ラグナがクエストに行く度に闇ギルドの拠点を潰しているのって」

「ああ。今回は2、30近い闇ギルドを潰したぜ」

「す、すごいね……（一人でそんな怖いギルドを2、30も潰すラグナもすごいけど……さすが、週刊ソーサラーのいろんなランキングで一位になるだけあるな）。カッコいいし／＼／」

ん？ルーシイが顔を赤くしている。……まあ、気にしないでおう。

そんなルーシイに近づくロキ。

「ああ、ビビってるルーシイもキレイだけど、顔を赤くしているのもいい……サングラスを通しててもこの美しさだ……肉眼で見たらきつと眼がつぶれちゃうな……ははっ」

爽やかに笑いながら言った。

「……………つぶせば」

ルーシイはロキのくさいセリフが釈に触ったらしく青筋をうかべながら言った。

俺はロキがルーシイにナンパしているので耳元で呟く。

「けどよ、ロキ。ルーシイは星霊魔導士だぜ……」

「っ!？」

それを聞いた瞬間、ロキの表情が変わった。

「な…なんたる運命のいたずらだ……ゴメン!!僕たちここまでにしよう!!!!」

そう言ってロキはルーシイから逃げるように去っていった。それを見たルーシイはキョトンとしている。

「何あれえ!？」

「ロキは星霊魔導士が苦手なんだ…昔、いろいろあつたらしい…」

俺はロキについて知っているので、ルーシイが嘆きに答えた。

「どうせ女だ!!」

「そっだー!!」

「真似すんなクソ炎！」

「それは俺のセリフだツリ目野郎」

ナツはいつの間にか 그레이 と殴り合いをしており、殴り合いながら
ナツと 그레이 は言った。

タッタッタッタッ！

「ナツ！！ 그레이！！ まずいぞー!!」

するとさっき出ていったばかりのロキが慌てた様子で戻ってきた。

「「「あアー!?」」」

2人は邪魔された事にイライラしていた。しかし、この後のロキの
一言によって2人のイライラは吹き飛んだ。

「エルザが……エルザが帰ってきた!!」

「……………ええええエ!!」

その一言によってナツやグレイだけでなくギルド内全体に緊張が走る。

「おお、久しぶりにエルザに会えるんだな」

「本当ね、ラグナは一カ月ぶりだもんね」

俺は嬉しそうにしているとミラは俺に笑顔で言う。

「やべ!ナツ!今からは一時ケンカは中断だ!いいな!」

グレイが慌ててナツに言う

「お!おう!今だけだから今だけ……」

あのナツが素直にグレイと協定を組んだ。

ズシン ズシン ズシン ズシン

相変わらず随分物騒な足音だなエルザは。

「エルザだ…」

「エルザの足音だ…」

「エルザが戻ってきやがった…」

「このリアクション、やっぱりエルザさんで、やっぱりすごい魔導士なんだ！」

ルーシィだけはある意味当たっているけど、ある意味ですごいんだよなエルザは。

パタン

ロキが戻ってきてしばらくすると、大きな角を片手で担いで鎧をつけた女が入って来た。彼女がエルザだ。

「今戻った。マスターはおられるか？」

ズドッ！

エルザは馬鹿でかい角を床におきながら言った。

「お帰り！マスターは定例会よ！」

「そうか」

エルザの姿を見てギルド内はものすごく静かになった。

エルザを初めて見るルーシィはエルザの感想を一言でいう。

「綺麗ですね」

「でしょ？エルザはものすごく強いんだから」

「へ、へえ。確かに…強そうですね…」

「みんなエルザが怖いよ。ナツは昔、エルザに喧嘩を挑んでボコボコにされちゃったの」

「え？まさかあ！」

ミラが懐かしそうに笑った。

「グレイは裸で歩いている所を見つけてボコボコに……ロキは口説こうとして半殺し。唯一、ラグナだけはエルザになにもされていないのよね」

ルーシイにミラはエルザのことを話している最中、俺はエルザに近づいていう。

「お帰りエルザ」

エルザは俺の顔を見て驚き、声を上げる。

「ラグナじゃないか！！帰ってきていたのか！」

「ああ。昨日の朝にな」

俺はでかい角を見ながらエルザに聞く。

「このでかい角はどうしたんだ？」

「これは……討伐した魔物の角に地元のものが装飾を施してくれてな……綺麗だったので、みやげにと思ってな……迷惑だったか？」

エルザは少し落ち込んだような表情をし。

そんなエルザを見て、愛おしく思い、俺はエルザに抱きつく。

ダキッ

「そんなことはないぜ？お疲れエルザ」

そして、唇をエルザの唇に押し付けた。

「……なっ！」「」

その行為にギルドにいた全員が驚いた。

「……………んむっ!？」

俺にいきなりキスをされたエルザは目を見開いている。

軽いキスなので唇を離す。

「……………/……………/……………/……………/……………」

エルザは顔を赤くしている。俺がキスした唇を指でなぞっている。

「いいなあ……………」

ルーシィは羨ましそうに見ている。他の女性陣もそう思っていた。

「……………ウフフフフ（笑）」

「……………アハハハハ（笑）」

ミラとりサーナは黒い笑いを浮かべている。

「ひいひいひい！！」

それを見て、近くにいたナツとグレイは本気でビビっていた。

「
♪」

俺は久しぶりにエルザとキスしたので上機嫌である。

「
..... / / /」

エルザは自分の席へと戻る俺を物足りなさそうに見つめていた。何で俺がわかるかというところ……それは愛の力だ！

エルザは頭をブルブルと振り、キリツとギルドを見渡す。

「お前達！」

エルザの一言で皆がドキーン！としてしまった。

「旅の途中で噂を聞いた。フェアリーテイルが、また問題ばかり起こしているとな！マスターが許しても、私は許さんぞ！」

ここでいつもの、エルザの説教が始まった。

大タルに入った酒をがぶ飲みしながら呑んでいるカナに

「カナ！「ぶっ！？」なんという格好で呑んでいる」

踊っているビジターに

「ビジター、「はいっ！？」踊りなら外でやれ！」

タバコを吸っているワカバに

「ワカバ！「ギクッ！？」吸がらが落ちてるぞ」

リクエストボードの近くをいつもうつろっているナブに

「ナブ！「うつ！？」相変わらずリクエストボードの前をうつろ」

しているだけか？いい加減仕事をしろ！」

テーブルに座って汗をかいているマカオに

「マカオ、「んおっ!？」……ふう「何か言えよ!？」」

相変わらずバツサリと言うな、エルザは。

「まったく世話が焼けるな。今日の所は何も言わずにおいてやろう」

むちゃくちゃ言ってたんだけどなあ。

「ナツとグレイはいるか？」

「あいー」

するとハッピーがまるで執事のような動きでナツとグレイがいるところを指を差した方向には、ナツとグレイが肩を組んでいた。

「や、やあ……エルザ……お……俺たち……今日も仲良し……よく……
や……やってるぜ……」

「あゝいゝ」

「ナツがハッピーみたいになった!？」

「そうか。親友なら時にはケンカもするだろうが、しかし私はそうやって仲良くしている所を見るのが好きだぞ」

「いや、親友って訳じゃ…（小声で言っている）」

「あゝいゝ」

「こんなナツ見た事無いわ!？」

「ルーシイってツツコミ上手いよね。ある意味芸人の才能あるんじゃないか？」

「実は二人に頼みたいことがある。それにラグナも居てくれてよかった。仕事先で厄介な話を耳にしまった。本来ならマスターの判断をおおぐとこなんだが、早期解決が望ましいと判断した。3人の力を貸して欲しい」

「えっ!？」

「はい!？」

「いいぜ」

皆がザワザワと騒ぎ始めた。

「ど……どういう事!？」

「あのエルザがラグナ以外の誰かを誘うなんて滅多にないぜ!」

「こんなでさえ怪物倒す女だぞ……」

とみんなが口々に騒ぎ出す。

何故かナツとグレイは睨み合ってた。全く、エルザが見ていないからって……はあ。

そんな時、ルーシイの隣にいたミラが呟く。

「エルザとラグナとナツとグレイ、今まで想像した事無かったけど……」

「えっ？」

「これって…フェアリーテイル、最強のチームかも…」

ミラがそう呟いてたのを聞いた。

「……！」

ルーシィもそれを聞いて驚く。

「出発は明日だ準備をしておけ「ちょ！まてよエルザ！ラグナはいがナツや俺を誘うなんてどういう内容なんだ！？」」

「詳しくは明日列車の中で話す」

そう言ってエルザは出たいった。

今ここにフェアリーテイル最強チームが結成された瞬間であった。

第9話 エルザの帰還（後書き）

コメントにありましたが、ラグナにもナツやウェンディ、ガジルのようにエクシードはいます。

今はあるところにいるのですよ。

第10話 鉄の森（アイゼンヴァルト）（前書き）

はラグナによる念話です。

第10話 鉄の森（アイゼンヴァルト）

（SIDE：ラグナ）

俺は今、マグノリアの駅に来ている。駅はざわざわ、がやがやとにぎわっている。そんな中、俺の耳に聞きなれた2人の声が届いてきた。

「なんでエルザみてゝなバケモノが俺たちの力を借りてえんだよ！
！」

「知らねえよ。つゝか助けなら俺とラグナで十分なんだよ！！」

「じゃあ、お前とラグナの2人で行けよ！！俺は行きたくねえ！！」

「じゃあ来んなよ！！あとでエルザに殺されちまえ！！」

やれやれ……相変わらず、水と油な関係だな2人は。火と氷の魔導師だからか？

「もう！2人とも、迷惑だからやめなさいっ！！！！何でアンタたち、そんなに仲悪いのよお……」

「「……………」」

ナツとグレイはルーシイを見ているな。大方、何でこいつがここに
いるんだ？とも思っているんだろうな。現に、

「「……………」な、なによ？？」

ルーシイは言い争いをやめてジツと見てくる2人に聞いた。

「「何でルーシイがいるんだ？」」

「ミラさんに頼まれたのよ！！アンタたちをよろしくって！！ミラ
さんの頼みだから、仕方なくついて行ってあげるのよ……………」（ま、ま
あ、本当はラグナがいるからなんだけどね／＼／＼）」

ルーシイは半分呆れるようにして言った。

「本当はラグナがいるからだよね」

そこへハッピーがつっこんだ

「そ、そんなわけじゃない！！／＼／」

顔を赤くするルーシィ。

……そうだ！いいこと思いついたぜ。

「ルーシィ。聞こえるか？聞こえたら頭の中で言葉を発してくれ」

「えっ！？ラグナの声が聞こえるんですけど！？」

よし、ルーシィには初めてやったけど成功したな。

「落ち着け。これは俺の念話魔法だ。相手の頭に直接語りかける魔法だ。今、俺も駅にいる。んで、ナツとグレイの面白い反応を見せてやるから俺の指示に従ってくれ」

「あっ！何か面白そうだね！うん！……うん……わかったわ！」

「じゃあ、手はず通りにな」

そついい、俺は念話を切る。そして、

「ナツ！グレイ！何をしている！仲よくするよつに言ったはずだぞ！」

「あー！！エルザさん！！！！」

「エルザ」……この言葉を聞き、声を聞いた瞬間ナツとグレイは肩を組み合った。

「今日も仲良くいってみよー」

「あいさー」

「これ面白いかも」

俺が念話でいった通り、面白いことになったその威力の大きさにルーシイは声をあげて笑う。

「アハハハハ！ナイスリアクション！」

「騙したなテメラア！！！！」

「あんたら本当は仲良いんじゃないの？」

「冗談じゃねえ！！何でこんな面子で出かけなきゃならねえ！！胃が痛くなってきた……」

「魚食べる？」

「いるかつ！！！！」

「ルーシイ、何でおまえがいるんだ？」

「何も聞いてなかったんですかつ！！！！」

ナツに真顔で訊かれ、怒ったルーシイがそう叫んだ時、

「すまない……………待たせたか？？」

すると、やっとエルザが到着した。

「荷物、多ー！」

大量の荷物を引っ張りながら……な。

「ん？……君は昨日、フェアリーテイルにいたな」

ルーシイの事を知らないエルザは聞いた。

「新人のルーシイといいます。ミラさんに頼まれて同行することになりました。よろしくお願いします」

そう言つてルーシイは深く頭を下げた。

「私はエルザだ、よろしくな。そうか……ギルドの連中が騒いでいた娘とは君の事が……」

傭兵ゴリラを1人で倒したとかなんとか……頼もしいな」

「……それ……ナツですから（汗）それに事実と少し違ってます」

ルーシーは呆れるように言った。

「今回は少々、危険な橋を渡るが大丈夫そうだな」

「危険！！！？？？」

エルザの危険という言葉に過剰に反応するルーシー。

「フン、何の用事が知らねえが、今回はついて行ってやる。……ただし、条件つきだ！！」

「条件？」

「バ、バカ……！！！！オ……オレはエルザの為なら無償で働くぜ！！！！」

エルザはナツの言葉を聞き返し、グレイはナツと違い、無償で働くとアピールしているな。アハハ、相変わらず面白いなこいつらは。

「言ってみろ」

エルザはナツの条件を聞いている。

「帰ってきたらオレと勝負しろ。あの時とは違っんだ！」

「！！！！」

「オ、オイ！！！！はやるな！！死にてえのか！？」

「確かにおまえは成長した。私はいささか自信がないが……いいだろう。受けて立つ」

その言葉にエルザは微笑みながら髪を後ろへやり、承諾の言葉を口にする。

「自信がねえって何だよ！！！！本気で来いよな！！！！それとラグナ！！！！」

ん？今度は俺を指差しているな。

「お前も俺と勝負しろ！！今度は負けねえ！！今度は……俺が勝つ！！」

……ほお？俺にも挑戦状を叩きつけるのか。

「なっ！？お、おま、ラグナにまで勝負を吹っ掛けるのか？！やめとけ！本当に死ぬぞ！？」

「いや、別にいいぞ。ナツ、お前が俺がいない一カ月の間にどれほど成長したか見せてみる。グレイ。お前もついでに俺とバトルか？」

「いや、俺はいい。まだエルザとラグナに勝てる気が全然しねえからな……」

さすがにグレイは遠慮したみたいだ。

「おしっ！！！！燃えてきたあ！！！！やってやるうじゃねーか！！！！」

目標ができたナツは文字通り燃えていた。マジで燃えているせいか天井に向けて火を吹くナツ。

数分後、列車が来て俺たちは乗り込んだ。

〈列車内〉

「あつ……あつ……あつ……」

「なっさけねえなあ、ナツはよオ……」

列車に揺られ、早速ダウンしているナツを見ながら呆れたように言っただのはグレイ。

俺はギルドの図書館から持ってきた古代の魔法書を読んでいる。

ちなみに今の座席順はこうだ。

グレイ ルーシィ+ブルー

俺

ナツ+ハッピー エルザ

「うつとおしいから別の席行けよ……。つーか列車乗るな!! 走れ!!」

「う……」

「毎度のことだけど……つらそうね……」

「まったく……しょうがないな。私の隣に來い」

「あい……」

そんなナツの様子に見兼ねたらしいエルザは言いながら自分とルーシイの間を軽く叩いた。ナツが横になれば座る場所がなくなるルーシイは「どけてことかしら……」とぼやきながらナツが座っていた席に移動する。

一方でハッピーのように返事をしたナツは辛そうな顔でエルザの隣に座り、

ボスッ!!

……エルザはナツの鳩尾をなぐった。

「ウツー！………ガクッ」

ナツはその衝撃によって白目をむいて気絶した。

「やれやれ……」

「少しは楽になるだろう」

「「「……」」」

鳩尾に躊躇なくパンチを入れて気絶させたエルザの行動に三人は言葉を失くしている。

けどよお……

「エルザ。いくらナツの具合が悪いからって俺の許可なく他の男を膝枕するんだ。この仕事が終わったら覚悟しておけよ……性的な意味で」

「んな?! / / ふ、ふふ……い、いいだろう! 今度こそ、ラグナを先にイかせてやる! / / /」

「クッククク……楽しみにしておくぜ」

そういい、俺は念話を切る。

あ! ちなみに今の座席順はこうなるぜ!

グレイ+ハッピー ナツ(気絶中)

俺

ルーシイ+プルー エルザ

ナツが気絶するのを見ていたグレイはエルザに話しかける。

「つーかそろそろ本題に入ろうぜ、エルザ。一体何事なんだ。おまえほどの奴が人の力に借りたいなんて、よほどだぜ」

「そうだな……。話しておこう。先の仕事の帰りだ。オニバスで魔導士が集まる酒場へ寄った時、少々気になる連中がいてな……」

くエルザの回想く

「コラア！！！！酒遅エぞ！！！！」

「！！」

「まったくよオ、なにモタモタしてんだよ！！！！」

「す……すみません」

「ビアード、そうカツカすんな」

「これがイラつかずにいられるかってんだ！！！！せえっかく【ララバイ】の隠し場所を見つけたってのにあの封印だ！！！！何なんだよアレはよオ！！！！まったく解けやしねえ！！！！」

「バカ！！！！声がでけえよ」

「うん。うるせ」

「くそおっ！！！」

「あの魔法の封印は人数がいれば解けるなんてものじゃないよ。後は僕がやるからみんなはギルドに戻つてるといいよ。エリゴールさんに伝えといて。必ず三日以内に【ララバイ】を持って帰るって」

「エルザの回想終わり」

「不覚だった、あの時エリゴールの名に気付いていれば、全員血祭りにして、何をするか白状させたものを！」

「ひいつ」

「だな……。その場にいた連中だけならエルザ一人で何とかなつたかもしれねえ。だがギルド一つまるまる相手となると……」

グレイの言葉にエルザはコクツ、と頷き。

「奴等は【ララバイ】なる魔法を入手し、何かを企んでいる。私はこの事実を看過することはできないと判断した。鉄の森に乗り込むぞ」

「なるほどな……闇ギルドを潰すなら……俺も力を貸そう」

「すまないなラグナ」

「気にするな」

俺とエルザは見つめ合う。

その後、一度止まった駅で弁当を買い、食べ、俺たちは目的地の駅までの間話をしている。

「そっいや……あたし……妖精の尻尾でナツ以外の魔法見た事ないかも。エルザさんとラグナはどんな魔法使うんですか？」

「エルザでいい」

「エルザの魔法はキレイだよ。血がいっぱいいるんだ」

相手の。と後付けで言った言葉にそれはキレイなのかとルーシィは苦い顔を見せる。

「たいしたことはない……。私は 그레이 の魔法のほうが綺麗だと思うぞ」

「そうか？」

エルザの言葉に 그레이 はそう言った後、左手を地盤の様に、グーをした右手をその上に合わせ——次の瞬間、その手には氷で出来た妖精の尻尾の紋章が出来ていた。

「わあっ！！！」

「氷の魔法さ」

「氷ってアンタ似合わないわね！」

「ほっとけっての」

するとルーシィは一瞬黙りこみ、 그레이 と気絶したナツを見比べ、そして

「氷！火！！あ！！！！」

何かに気がついた顔をする。

「だからアンタたち仲悪いのね！！！」

「そうだったのか？」

「どうでもいいだろ！？そんなこたア」

単純すぎてかわいい！。と言いながらにやにやと笑っていたルーシイは、俺を見る。

「ラグナの魔法はどういうものなの？」

「あい！ラグナの魔法はギルドの中で規格外なんです！」

ハッピーは俺の頭に乗りながら言う。

「き、規格外って……」

「確かに。ラグナが本気で蹴りを放てば建物は崩壊させられるし……」

「剣を使った魔法を使えば数キロ離れている山を削ることもできるしな」

「あい！それに人のことを真つ二つにできるよね！」

「一体どんな魔法なの！？」

「まあ、俺はギルドで一番多くの魔法を使うから色々あるんだよルーシィ」

「……何か納得する自分が悔しいんですけど……」

ルーシィは何故か納得していた。

そして、列車はオニバス駅に到着し、俺たちは降り、再び列車は発車していった。

「アイゼンヴァルトの奴らは、まだこの町にいるのか？」

「わからない…それをこれから調べる」

「雲を掴むような話だけど…」

「あれ、ナツは？」

「『あつ！？』」

ハッピーが気付いた様だ。しかも列車は、もう遠くなってた。

グレイとルーシィは啞然としていた。俺もすっかり忘れていたことを後悔するぜ。

「SIDE：ラグナ OUT」

「その頃、列車内では」

「うううー」

「あらら……つらそうだね、大丈夫？フェアリーテイル、正規ギルド
かぁ……つらやましいなぁ」

ナツは列車酔いに耐えながら鉄の森の力ゲヤマに出会っていた。
アイゼンヴァルト

第11話 呪歌【ララバイ】

〈SIDE：ラグナ〉

「何ということだっ!!」

オニバスの駅に、エルザの声が響く。

「話に夢中になるあまりナツを列車に置いてきたっ! あいつは乗り物に弱いというのにつ!! 私の過失だっ! とりあえず私を殴ってくれないかっ!」

「まあまあまあ」

「取りえず落ち着こうよ、エルザ……」

「そっいうわけだっ! 列車を止める!」

エルザは近くにいた駅員に言った。

「ど……どっという訳?」

しかし、当然のことながら駅員には伝わっていない。

ルーシイはまだ慣れてないから何か恥かしい……みたいだ。が、宿めようとするとエルザは駅員さんに向かって話の続きをしている。

「妖精の尻尾の人はやっぱみんなこーゆー感じなんだあ……」

「オイ！ オレはまともだぞ」

「露出魔のどこが！？ はあ…… まともな人はラグナしかないの？」

「（おお、俺はまともな枠に入っているのか）」

これは嬉しいな。何しろ、ギルドじゃ、人外扱いだからな。

「仲間のためだ。わかってほしい」

「無茶言わんでくださいよっ！ 降りそこなった客一人のために列車を止めるなんて！」

エルザの要求を否定する駅員。その駅員を見てため息をつきながらエルザはハッピーを見ていう。

「やれハッピー」

「あいさー!!」

「ちょ……ちょっとオ!!」

ガゴン……

ハッピーはエルザに呼ばれ何をすればいいかわかっているように、羽でエルザと駅員の上をとんで緊急停止レバーのところまでいき、駅員の制止も聞かずレバーを下ろした。

ジリジリリリリッ……!!

するとベルが鳴り始めた。

「ナツを追っぞ! すまない、荷物を『ホテルチリ』まで頼む」

エルザは近くにいた一般人の2人組の男女に言った。

「誰……アンタ……」

いきなりエルザに声をかけられ何が何だかわからない2人組の男女。

「もう……めちゃくちゃ……」

「だな」

ルーシイの嘆きに同意するグレイ。

「……おい、グレイ。服を着ろ」

「……………あ」

「はあ……」

大きなため息を吐く俺であった。

そして、俺たちはエルザが街でレンタルした魔動四輪車に乗ってナツを追う。

「その頃のナツはと言つと」

「さっきのお返しだ！！！」

ゴツッ！！

「ぐもっ」

列車内で降り遅れたナツはカゲヤマに喧嘩を売られていたが乗り物酔いで反撃できずにいたが、列車が急停止したので思いっきり殴った。

「ん??」

ナツは足元にドクロの笛が転がっているのを見つけた。

「み、見たな！！！」

カゲヤマはナツに笛を見られた事に焦っていたが、ナツは興味が無かったので無視することにした。

「先ほどの急停車は誤報によるものと確認できました。間もなく発車します。大変、ご迷惑をおかけしました」

そこへ列車内にアナウンスが流れた。

「マズ……………」

そのことに本気で焦るナツ。

「……………逃げよ！！！」

ナツは冷や汗をかきながら棚に載せた自分の荷物をおろした。

「逃がすかあつ！！！！鉄の森に手アイゼンヴァルト出したんだ、ただで済むとは思
うなよ、ハエがああつ！！！！」

カゲヤマは悔しいのかナツに食い下がる。

それを聞いたナツは

「こっちもてめエのツラおぼえたぞっ！……さんざんフェアリーテイルをバカにしゃがって……」

すると列車が動き始めた…

「今度は外で勝負してやばる………うぶ」

ガシャン！！

最後は吐きそうになりながらカゲヤマにそう言ったナツは窓に体当たりをして割って外にとびだした。

「うああああああ」

しかし予想以上に列車はスピードがでており、ナツは後ろに吹き飛ばされたのであった。

「戻ってSIDE：ラグナ」

俺たちは街を出て線路をそってナツの乗っている列車を追っていた。

エルザが運転して、俺とルーシイが中に座り、グレイは屋根上に座っていた。

すると、エルザの魔力に乱れを感じ、俺は運転しているエルザに声をかけた。

「エルザ、飛ばしすぎじゃない？」

「大丈夫だ」

いや、大丈夫そうだったら魔力が乱れるはずないぞ？

「疲れたら交代してやるのか？」

「まだ大丈夫だ」

……これはある意味意地を張っているな。はあゝまあ、これがエルザってわけだからいいか。

「そっか」

「おい、列車が見えて来たぞ！」

俺たちはグレイにいわれ、列車を見る。

「ナツー！」

ルーシイが叫んだ直後に、窓からナツが飛び出して来た。

「ギャアアア！！！」

俺たちは悲鳴を上げながら飛んでくるナツに驚き、グレイはなんとかナツを受け止めようと両手を広げナツを助ける体勢をとったが

「うおあっ！！！」

「なっ!!」

ゴチーン!!

「ぎゃああああ!!!!」

とても大きな音を立てて2人の頭がぶつかり、激痛の叫びをあげながら2人はそのまま地面に落ちた。

「痛そ〜……………」

その音を聞いたルーシイは、音を聞いただけで頭がいたくなつたのか、頭に手を添えていた。

「ナツ!無事だったか!?!」

魔動四輪車を停止させ、エルザは声をかけた。

ナツとグレイは、

「痛――っ！！何しやがる、ナツてめえっ！！！」

「今のショックで記憶喪失になっちまった！！誰だ、オメエ……………」
くせえ」

「何い！？」

起き上がり、早速言い争いを始めた

「ナツ、ごめんね」

そこへハッピーを先頭にして俺たち3人が近寄る。

「ハッピー、ラグナ、エルザ、ルーシィ、ひでえぞ！！俺をおいて
いくなよっ！！！！」

「すまん」

「すまない」

「ごめん」

ナツは俺たちにおいて行かれたことを怒り、俺・エルザ・ルーシイはナツに謝った。

「おい……随分、都合のいい記憶喪失だな………」

ナツの都合のいい記憶喪失に青筋を浮かべるグレイだった。魔法を放とうとするのを俺が止める。

「とにかく無事でよかった」

エルザは胸にナツの顔を押し付けた。

「堅っ」

しかしエルザは鉄の鎧を装着しているのでナツにとってはダメージにしかならなかった。

「無事なモンかっ！！列車で変な奴に絡まれたんだっ！！」

「????」

ナツはキレイながら言った。

「どんなやつだったんだ？（確かカゲヤマって言う奴だったよな？
いかな。記憶が遠のいているせいか思い出せん）」

俺はナツに聞いた。

「何だったかな？アイ…ゼン………バルト??？」

「……なっ!?!」

その言葉を聞いてナツ以外のみんなは驚いた顔をしている。

「バカモノおっ!?!」

「ぶふっ!?!」

そしてエルザはナツの顔を思い切りビンタした。エルザにビンタされたナツは後ろに吹っ飛んだ。

「な、何しやがる!!」

いきなりビンタされてナツは驚きながら聞いた

「アイゼンヴァルトは私たちの追っている者だ!!なぜ、ちゃんと私の話をきいていないっ!!!!」

「????」

まったく聞き覚えがないのかナツはポカンとしている。

そんな怒るエルザに俺は近づき、

「アホ。お前がナツを殴って気絶させたからだろうが!」

ゴッソ!

「きゃう!?!」

可愛い声を上げるエルザに一瞬、萌えたのは秘密だぜ。

「そ、そうだったな……すまんナツ」

「ておい、俺殴られ損じゃねーか！ちくしょー！ラグナが頭をぶつてなかったら俺がぶつているところだぞー！」

全く、この2人は本当に。

「てか、あたし。よくエルザにラグナはツツコミを入れられるわよね。拳骨したり」

「ああ。あんなことできんのはラグナしかないないぜ」

「あい！それがラグナです」

何か、すげえ、言われようだな。

「さて、話を元に戻そうか」

俺は話の流れを元に戻すことにした。

「そうだなナツ、そいつはどんな特徴をしていた？」

エルザはナツに聞いた。

「あんまり特徴なかったなあ。なんか、ドクロっぽい笛持ってた。三つ目があるドクロだ」

ナツは列車の中で見た笛のことを話した。

「三つ目のドクロの笛……………」

「どこかで聞いたことのある物だな」

ナツからその話を聞いて、ルーシイの表情は驚愕にそまった。

「どうしたのルーシイ」

その様子に気づいたハッピーがルーシイに声をかけた

「もしも、その笛が呪歌だとしたら……………子守歌……………眠り……………死……………」

「！！！！」

どうやらルーシイは何かに気がついたようだ

「その笛がララバイだ！！呪歌……………？死”の魔法！！！！」

「何！？」

「呪歌？」

「????」

「そうか。思い出したぞ！」

俺以外の3人は聞いたことがないのかまだイマイチわかっていないような表情をしていたが、俺もルーシイのおかげで消えかかっている原作の一部を思い出した。

「あたしも本で読んだ事しかないんだけど……………禁止されてる魔法の一つに呪殺ってあるでしょ?？」

「ああ……その名の通り、対象者を呪い？死”を与える魔法だ……」

ルーシイの問いかけにエルザは答えた。

「ララバイはもっと恐ろしいの……」

「何だ？」

その続きはルーシイの変わりに俺が話した。

「笛の音を聴いた者全てを呪殺する………？集団呪殺魔法”ララバイ。それがその笛の正体だ」

「集団……」

「呪殺魔法……」

「おい、それが町の中で吹いちゃったなら……」

「確実に聞いた者が死ぬだろうな」

「冗談ではない！鉄の森の奴等アイゼンヴァルトそんなモノ持ち出したら、何をするか解らん！直ぐに乗れ、追いかけるぞ！」

エルザは再び、運転しようとするのを俺が止める。

「待てエルザ。これ以上、魔動四輪車に魔力を使つな」

「だ、だが！」

「俺が運転する」

「いや。私が運転する。ラグナは魔力の消費をしないでくれ」

「……仕事終わった後の色々なこと、追加な（ボソツ）」

「んなつ！？／／／」

顔を真っ赤に染めるエルザ。

「ええい！もう、何でもいい！掛かってくるがいい！！／／／」

もう、自棄になっ
アイゼンヴァルト
ているエルザは魔動四輪車を再び、運転し始め、
鉄の森の後を追っていったのであった。

第12話 妖精たちは風の中

〔SIDE：ラグナ〕

俺たちはララバイの正体がわかり、魔動四輪車に乗って再び鉄の森を追っていた。

「エルザ！！飛ばしすぎだ！！SEプラグが膨張してる！！」

俺はエルザの事を心配して言った。

「あの笛が吹かれれば、大勢の人が死ぬ……音色を聴いただけで人の命が消えてしまうんだ」

「それは、わかってるけど……これから鉄の森と一戦交えるんだ。そんなにスピード出したらいざって時に、エルザの魔力が枯渇するぞ！！」

俺は先に先の事を見越してエルザに言った。

「構わん、いよいよとなれば棒きれでも持って戦うさそれに、？もしもの時」は、おまえがやってくれるんだろう？」

エルザは言った。

「……………わかった、もう何も言わないよ。ただし、本当にヤバくなったら、殴ってでも止めるからな。それでも従わなかったら……………帰ったら色々するからな」

「ああ」

エルザにそこまで言われては止めることを諦めるしかねえな。

そのまま、俺たちは進んでいった。

くオシバナ駅く

俺たちがオシバナ駅に着くと人であふれかえっていた。

「駅内の様子は？」

ようやく到着してすぐにエルザは、近くにいた駅員に聞いた。

「な、なんだね君！」

駅員は突然の質問に驚く、すると…

ゴツッ！…！

「わお」

「なっ！…！」

いきなりエルザは駅員に頭突きをした。ルーシィはそんなエルザの行動に驚いている。

「駅内の様子は？」

「は？」

ゴツッ！…！

「駅内の様子は？」

「ひっ」

それからも次々とエルザは自分の質問に即答できなかった駅員には頭突きをくらわして気絶させていた。

「……………即答出来る人しかいないってことなのね」

「だんだん、わかってきたろ？エルザのこと」

その様子を見て、グレイとナツをおぶったルーシィは震えながら言った。

「っていつかコレ、あたしの役？」

ナツを背負わされていることに不平を言うルーシィ。そこへ、別の人から情報を集めた俺がルーシィ、ハッピー、グレイにいう。

「状況はわかった、とにかく中に入るぞ」

「おっ」

「あいさ」

ルーシイの不平は普通にスルーしてしまっただけ……まあ、いいか。

「シカト……………」

落ちこむルーシイも俺たちに続いて中へと入っていく。

くオシバナ駅内く

「軍の一個小隊が突入したが、まだ戻っていないらしい。おそらく、アイゼンヴァルトとの戦闘が行われているんだろっ」

「でも一個小隊だけじゃ、闇ギルドにはきついんじゃないか？」

エルザの後ろについて走っている俺が問いかけた。

「ええっ！？軍の小隊でもやばいってとんだけなのよ」

「普通の軍隊じゃまず無理だと思うな。評議員直属の部隊とかなら話は別なんだろうけど」

しばらく走ってたら、たくさんの兵達が倒れていた。

「あっ！？」

「全滅してるよ！」

「ひどい、重症だ」

「相手はギルド丸ごと一つ、つまり全員魔導士だ。軍隊の小隊じゃ話にならないか…」

エルザの視線の先をみると全滅している小隊達が倒れていた。そして、

「ふふふ、やはり来たな。フェアリーテイル」

アイゼンヴァルト
鉄の森が待ち受けていた。

「な…なに…この数…」

その人数の多さにルーシィはビビっていた。

「待つてたぜえ」

「貴様がエリゴールだな」

エルザが問いた。

「ナツ起きてっ！ 仕事よ！」

敵の目の前にして、ルーシィは車酔いの今だ起きないナツを起こそうとするが起きない。

「無理だよっ！ 列車↓魔動四輪車↓ルーシィ、3コンボだ」

「あたしは乗り物なのっ！？」

ハッピーの言葉に軽くショックを受けながらルーシィはナツを揺す
ってるけど結構ダメージが大きいらしい。

「貴様等の目的は何だ？返答次第ではただでは済まさんぞ」

エルザは声に凄みをきかせて言った。

「遊びてえんだよ、仕事も無えし、ヒマなもんでよオ」

エリゴールはおどけるようにして答えた。

「「「ぎゃはははは」「」「」

それを聞いて大笑いする鉄の森のメンバーたち。
アイゼンヴァルト

すっ

するとエリゴールは宙に浮かんだ。

「飛んだ!？」

「風の魔法だっ!！」

その事に驚いたルーシィと説明をするハッピー。

「まだわかんねえのか、駅には何がある?？」

そのまま駅のスピーカーまで行き、スピーカーの上に立つエリゴール。

「ララバイを放送するつもりか!？」

「ええ!？」

「何だと!？」

「ふははははっ!!!！」

大きく口を開けて笑うエリゴール。

「この駅の周辺には何百、何千の野次馬どもが集まっている。いや……音量をあげれば街中に響くかな……死のメロディーが」

エリゴールは楽しそうに続けた。

「大量無差別殺人だ！？」

あまりの規模の大きさに冷や汗をかくエルザだった。

「これは粛清なのだ。権利を奪われた者の存在を知らずに、権利を掲げ生活を保全している、愚か者どもへのな」

エリゴールは空中を自由に飛びながら続ける。

「この不公平な世界を知らずにいきるのは罪だ！！よって死神が罰を与えに来た？死」という名の罰をな！！」

スタッ

そう言うとエリゴールは壁のふちに降り立った。

「そんな事したって権利は戻って来ないのよっ！！てゆうか、元々、自分たちが悪いっていうのに……………あきれた人たちね」

それを聞いてルーシイはエリゴールに言い返した。

「ここまで来たら欲しいのは？権利”じゃない？権力”だ権力があれば全ての過去を流し未来を支配する事だって出来る」

エリゴールは権利ではなく権力が欲しいという。

「アンタ、バツカじゃないのっ！！」

ルーシイがエリゴールに向かってそう言った時

「残念だったな、ハエども」

カゲヤマが影をつかってルーシイを襲う。

「闇の時代を見る事なく死んでしまふとは！！」

「きゃあっ!!」

「しまった!!」

エルザとグレイが気づいた時にはすでに遅く、影は2人の間を抜け、今にも襲わんとしていた。

「てめえらは……俺がいるのを忘れているな？」

俺の影が伸び、ルーシィを襲おうとしていた影を切り裂いた。

『なっ!!?』

「バ、バカな!? 僕の影の魔法が!?!」

鉄の森の連中は驚き、声を上げる。俺はルーシィを見る。

アイゼンヴァルト

「大丈夫か？」

「へっ!? あ、う、うん／＼（か、かっこいい! ラグナってやっぱ、めっちゃカッコイイ!）」

俺はギロリとエリゴール達を見る。

「てめえらは……俺の前で言うてはならないことを言った。それは……」

俺は小さな声で『^{アムデ}開』といい、『呪霊錠』を解除し、重力装置をOFFにした。

「俺の仲間のいるギルドをハエ呼ばわりしたことだああああああああああ……」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

俺から解放された魔力により、大気が震え、地震が起きているかのような錯覚を起こさせる。

「な、なななな?！」

「そして、なにより俺の前で女を攻撃するとはいい度胸しているな……ええ?鉄の森の影使い?」
アイゼンヴァルト

「くっ！」

俺が睨んでいると奴らはおとなしくなっている。まあ、これだけ高い魔力を見れば当たり前か。

「さて、エリゴール。俺から一つ、質問しよう」

「な、なんだ……」

俺はエリゴールを見ていう。

「お前たちはこの駅にあるスピーカーでララバイを放送すると言った……そうだな？」

「そ、そうだが、何だ？（こいつ、まさか俺たちの本当の目的に！？）」

焦っているのが丸わかりだな。

「おかしいよな？ここには俺たち・街の住民・駅にいる人たちの他にも……お前たち鉄の森アイゼンヴァルトがいるんだぜ？このままじゃ、仲間をも道

連れにすることになるだろ？おかしいよね？」

「「「「「あっ！」「」「」」

エルザ達も気付いたようだ。

「（ま、まずい！？こうなったら……）ストームシユレット 暴風閃！！！」

ドカアアアアン！

風の魔法が俺に直撃する。

「ラグナ！？」

「お前たち！俺はあそこに行く！足止めは任せたぞ！」

『了解です！エリゴールさん！』

そっつい、エリゴールは駅から出ていった。

「ちょ、ラグナさん大丈夫なの!？」

ルーシィは俺のことを知らないんだっとな。まあ、心配してくれるのはありがたいが……。

「あの程度の魔法ではラグナには傷一つ、負わすことなどできん」

「傷つけることができていたら今頃、俺やエルザはラグナに勝っているさ」

「あい！来る時にもいったけどラグナは人外です！大丈夫だよ！」

んで？俺のことを知っているメンバーは心配しないと……悲しいねえ。

「ああ。俺にはあの程度の魔法は効かん」

俺はそのまま、煙の中から出る。

「おい、ナツ、起きろ。お前の大好きな戦いだぞっ！」

いい加減、起こさないといけなのでナツを起こした。

「む……、今度は地上戦だな!!」

俺にそう言われたナツは跳ね起きの要領で起き上がって言った。

ナツが起きたことを確認したエルザがナツと 그레이 に言う。

「ナツ、 그레이 ……二人で奴を追うんだ!」

ナツと 그레이 は嫌そうだ。

そこで俺が言う。

「行かないと…… OSHIOKI だぞ?」

ビクッ!

「「行つてきまーす!」」

2人はビューンと音を立てながらその場を離れていった。

「あ、逃げた」

「エリゴールさんを追う気だ」

「任せろ！このレイユール様が仕留めてくれる！」

「俺も行く！あの野郎だけは許せねえ！」

アイゼンヴァルト
鉄の森の幹部、カゲヤマとレイユールは、ナツとグレイを追いかけた。

「こいつ等を片付けたら、私達もすぐに追っぞ！」

「さっさと片付けるぞ」

「ちょっと、あの数を三人で！？」

「さて、野郎はとっと片付けて、小娘達と遊ぼうかね」

「妖精^{ハエ}共め、羽根をむしり取ってやるぜ！へへへ」

「それにしても二人ともいい女だなア」

「殺すにはおしいぜ」

「とっつかまえ売っちまおう」

「待て待て、妖精の脱衣ショー見てからだっ」

「下劣な」

口々に勝手な話を話す鉄の森の男達にエルザは冷めた眼で呟きその後ろでは「かわいすぎるのも困りものね」「ルーシイかえってきてー」等と言つ言葉が出ている。

俺もさすがにねえ？エルザを殺す？売る？脱衣ショー？ふざけんなよ？

「これ以上妖精の尻尾を侮辱してみろ。貴様等の明日は約束できんぞ」

「剣が出てきた！！魔法剣！！！」

「めずらしくもねえ！！」

「こっちにも魔法剣士はぞろぞろいるぜえ」

「その鎧ひんむいてやるわあ！！！！」

数でいけばこちらは圧倒的に不利なのだが、エルザは単身で鉄の森アイゼンヴァルトに向かって突っ込んでいき、次々と彼らを斬り捨てていく。

「チイツ、遠距離魔法でもくらえ」

「！！！！」

「なっ、おごっ」

「槍！！！！」

その速いスピードに接近戦では無理だと悟った一人が魔法を発動させようとするが、それよりも早くエルザは剣から槍へと武器の形状を変え、その男を潰す。

と、次の瞬間、その手にあつたのは槍ではなく、

「今度は双剣!!?」

そして次に武器を振るった時、形状は再び変わっており。

「斧!!!!?」

「こ……この女…なんて速さで【換装】するんだ!!?」

「換装?」

「魔法剣はルーシイの星霊と似てて別空間にストックされてる武器を呼び出すっていう原理なんだ。その武器を持ち換える事を換装っていうんだよ」

「へえ…すごいなあ」

次々と敵を退けていくエルザの姿に俺はほほ笑む。

「エルザのすごいところはここからだよ」

「え？」

微かに笑みを浮かべるハッピーにルーシィは聞き返す。

「まだこんなにいるのか…面倒だ。一掃する」

するとエルザは着ていた鎧をも換装する。

「魔法剣士は通常【武器】を換装しながら戦う。だけどエルザは自分の能力を高める【魔法の鎧】にも換装しながら戦う事ができるんだ」

「それがエルザの魔法——
ザ・ナイト 騎士だ!!」

エルザの姿を隠すようにあがっていた煙はやがて晴れていき——鎧の形状は、全く違う形状へと換装されていた。

「うわぁ」

「エルザ…！？こいつまさか…」

ハッピーの言葉を聞いていたカラツカがエルザを見つめながら呟く
中、

「舞え、剣たちよ。――『循環の剣』」
サークルソード

エルザの周りに浮かんでいた無数の剣はその声と共に鉄の森の人間
達を一掃していく。
アイゼンヴァルト

「こんのヤロオ…！！オレ様が相手じゃあ…！！」

「ま、間違いないえっ…！！コイツぁ妖精の尻尾最強の女、
妖精女王
のエルザだっ…！！」
デイトーニア

そうしている間にビードはエルザにやられ、気絶した。

「ふ…っ…」

「ビードが一撃かよっ……！ウソだろ……！？」

すると、奥から他の鉄の森のメンバーが出てきた。
アイゼンヴァルト

「くそっ！妖精女王のエルザは無理でもその男なら……！」
ティターニア

そういつて現れた鉄の森のメンバーは俺に迫る。
アイゼンヴァルト

「ラグナ！」

「あい、大丈夫だよ。何たってラグナは……」

「煩い奴らだ。消えろ！破邪竜の……」

俺は魔力を溜め、

「破邪竜！？まさか、あの金髪に、あの顔。まさか……まさか！？
あの男の正体は……！」

カラツカは言う。

「咆哮！！！！！！」

俺は口から黒い魔力の塊のブレスを放った。

ドカアアアアアン！

「ドラゴンスレイヤー滅竜魔導師……破邪竜のラグナ！？」

「ええっ！？ナツ以外のドラゴンスレイヤー滅竜魔導師がいたの！？」

俺の正体を知ったルーシイが驚き、声を上げた。

「あい！ラグナはナツよりも強いドラゴンスレイヤー滅竜魔導師です！フェアリーテイル最強候補の男だよ！」

「くそっ！エルザにラグナ……フェアリーテイル最強コンビじゃないか！くそおおお！」

俺とエルザを交互に見たカラツカは足早に逃げていく。

「あ！」

「エリゴールの所に向かうかもしれん。ルーシイ、追うんだ！」

「え——っ！！？あたしがっ！！？」

「頼む！！！」

「はいいつ！！！」

渋っていたルーシイにエルザはギロツ、と睨みながら頼み（？）。
鎧を元の形状に戻すと疲れた様に息を吐き出す。どうやら魔動四輪をとばしすぎたのが堪えたらしい。

全く……あれほど、気をつけるように言ったのにな。

俺はエルザの背中に手を置き、魔力をエルザに送る。

「大丈夫かエルザ？」

「あ、ああ、何とかな」

「ったくよお。魔動四輪車で魔力の使い過ぎだ。少しは俺を頼れ。俺はお前の彼氏だぞ？いや、旦那のほうがいいのか？」

「そ、そんなことをここで言うな／＼恥ずかしいではないか／＼」

俺はエルザに肩を貸しながら歩き出し、ルーシィの向かった先へと向かった。

少し歩くと外に出て見ると魔風壁が出来ていた。その前にはルーシィとハッピーもいた。

それに触ろうとするエルザの引っ張る。

「なんだラグナ？」

「触るな。これは外からの一方通行の魔風壁だ。こちら側から出ようとすると身体をズタズタにされるぞ」

そう、俺たちが話をしていると、ナツとグレイ、それにカゲヤマが来た。カゲヤマは怪我をしていて気を失っている。

何でも仲間に刺されたらしい。

「くそっ！こんなことをしている間にもじいさん達に危機が迫っている！何とかこの魔風壁を消さねえと！」

グレイは悔しがって両手を合わせている。ここは俺の順番だな。

「これほどのものを喰ったことはないがやってみるか」

「「「そうか！その手があったか！」「」「」

俺がそう呟くとエルザとグレイは俺を見る。唯一ルーシィだけはわからない。

「え？え？何？」

「あのねルーシィ。ナツは火の滅竜魔導師ドラゴンスレイヤーなのは知っているよね？」

「へっ？うん、知っているけど？」

「ナツは炎や火を食べることができるのも知っているよね？」

「うん」

「ラグナの場合は魔力が籠っているものなら何でも食うことができるんだよ！」

「な、なんですって！？」

驚くルーシィを尻目に、俺は魔風壁の魔力を喰い始める。

ガブガブガブガブ！ ゴックン！

「くはぁ！喰ったら力が湧いてきた！」

「俺の真似するなー！」

ナツが煩いな。よし、ここは……。

「ナツ！今からお前とハッピーに風の魔法をかける。普段のハッピーのMAXスピードの数倍にすることができる、な。お前は先に行つてエリゴールを足止めしてくれ」

「……ハハ！足止め？ブツ倒してもいいだろ？」

ニヤリと笑うナツに俺は笑う。

「ああ、やつてもいいぜ？」

「よっしゃあああ！行くぞハッピー！」

「あいさー！」

ハッピーがナツを掴むのを確認した俺は風の魔法をかけ、2人は空へと上昇し、エリゴールの後を追った。

「さて、俺たちも行くぞ」

俺たちは魔動四輪車に乗り、今度は俺が運転する。全員が乗り込んだのを確認し、俺たちはナツの後を追っていった。

第13話 黒魔導師ゼレフが作りし生きた魔法…… ララバイ

〔SIDE：ラグナ〕

魔動四輪車に乗って俺たちはエリゴールを追っていったナツを追っている。

そこで、魔動四輪車の中に座っているエルザが俺に聞いてきた。

「しかし、ラグナ。エリゴールはどこへ向かっているのだ？」

「ああ？ああ、エルザ、グレイ。オシバナ駅の先には何がある？」

俺の問いに考え込む2人。そして、グレイが声を上げる。

「確かクローバー……まさか！？」

「奴の狙いは確かクローバーの定例会場にいるマスター達か！？」

その瞬間、エルザとグレイから怒りのオーラが滲みだす。

「ああ。全く、胸糞悪い。飛ばすぞ！しっかり捕まってるな！」

魔力全開にして魔動四輪車をとばしていくと、遠くの方から巨大な炎の柱が見えた。

「おお、あの炎は！」

「ナツか！」

「近いな！あいつならエリゴールには負けねえし、問題ないか！」

炎が見えた場所まで飛ばしていくと、

「ナツ——！！！！」

「お！遅かったじゃねえか。もう終わったぞ」

「あい」

やはり、勝負はすでになっていた。

「さすがだな」

「ケッ」

「そ……そんな……！エリゴールさんが負けたのか……！？」

それにエルザは笑みを浮かべ、グレイは面白くないとでもいうような顔で悪態をつく。その一方で倒れるエリゴールを見たカゲヤマは、信じられないという風に声をあげていた。

「ふう、よかったぜ。さて、ララバイの笛は……あつた」

少し前にララバイの笛が落ちているのを拾おうとしたら、

ドゴオオオ！！

「……！！」

「カゲ……！？」

「危ねーなア。動かすならそう言えよ!!」

「油断したな妖精ども。笛は…呪歌はここだ——!!!ざまあみろ——!!!」

エリゴールの近くに転がっていた呪歌を拾おうと思い、近づいていたらカゲヤマは俺の目の前で奪い、魔動四輪車でクローバーに向かって行く。

「あんのヤロオオオ!!!!」

「何なのよ!!!助けてあげたのに——!!!!」

「どうしよう!!このままじゃマスター達が……!!」

「取りあえず早く行くぞ!!!クローバーはすぐそこなんだ!!」

くクローバーの町・定例会会場SIDE:第三者く

「一曲聴いていきませんか？……病院では楽器の演奏が禁止されているもので……」

カゲヤマはどこか怪しい笑顔でマカロフに向かって言った。そう、ララバイの一人目の犠牲者として、カゲヤマはマカロフを選んだのだった。

マカロフはじつとカゲヤマを見た後、

「……急いどるんじゃ、一曲だけじゃぞ」

そう言ったマカロフは聴く体勢をとった。

もらった……

カゲヤマは内心、そう思った。そして笛をかまえる。

その時、カゲヤマの脳裏に今までのことがよみがえる

——正規のギルドはどこもくだらねえな！！

——能力が低いくせにイキがるんじゃないっての!!

アイゼンヴァルト
同じ鉄の森のメンバーの声

——これはオレたちを暗い闇へと閉じ込め……生活を奪いやがった魔法界への復讐なのだ!! 手始めに、この辺りのギルドマスターどもを皆殺しにする

リーダーであるエリゴールの声。

——そんな事したって権利は戻ってこないのよ!!

——カゲ!!! おまえの力が必要なんだ!!!

——同じギルドの仲間じゃねえのかよ!!

敵であるにもかかわらず、自分達の事を真剣に考えてくれた妖精の尻尾の3人の言葉

頭の中では? 吹けばいい”とわかっているのに、どうしても3人の

言葉が邪魔をして吹けずにいたカゲヤマだった。

「いたっ!!」

「じっちゃん!!」

「マスター!!」

「おお、今にも吹きそうじゃん。ギリギリセーフか？」

そしてようやくラグナたちも会場にたどり着いた

「とにかくあいつを止めるぞ!!」

カゲヤマが今にも笛を吹きそうだったので、止めに入ろうとしたラグナたちだったが、

「しっ、今、イトコなんだから見てなさい　ていうか、あんたたちかわいいわね、ウフッ」

「な……何、この人!？」

「……青い天馬ブルーベガサスのマスターのボブ殿だ」

「あらエルザちゃん、ラグナちゃん、大きくなったわね」

ラグナたちが話している間にも、カゲヤマはゆっくりと笛に口を近づけている。

「いけない!!」

その様子を見たエルザは焦って止めに入ろうとしたが、

「黙ってなって、面白エトコなんだからよ」

こんどは、四つ首の獵犬クワトロケロベロスのマスターのゴールドマインがそれを止めた。

「まっ、あいつはもう行っちゃったけどな」

「ウッフ　そうみたいね」相変わらず、いい子よねえ」

「「「???」」」

二人のマスターが言った意味がわからないナツたちだった。

「どうした!? 早くせんか……さあ」

「……………!!」

カゲヤマは未だに戸惑っていた。

吹けば……吹けばいいだけだ。

思い出すのは今までの虐げられてきた日々。

それで……すべてが変わる!!

カゲヤマがそう思った時、

「こんなことしても何も変わんねえよ」

「えっ!？」

突然、カゲヤマの後ろから声がした。カゲヤマが後ろを振り向くと

「……………ラグナ・ギース……………」

そこには木に背をあずけて立っているラグナがいた。

「……………来ておったのか、ラグナ」

「まあな。あっちにナツたちも来てるよ」

マカロフにそう言ったラグナから再びカゲヤマの目をまっすぐ見て言う。

「弱い人間はいつまでたっても弱いまま。しかし弱さの全てが悪ではない。もともと人間なんて弱い生き物じゃ。一人じゃ不安だからギルドがある。仲間がいる。強く生きる為に寄り添いあつて歩いていく。不器用な者は人より多くの壁にぶつかるし遠回りをするかもしれない。しかし明日を信じて踏み出せばおのずと力は湧いてくる。強く生きようと笑っていける。そんな笛に頼らなくても、な」

マスターの言葉を聞いたその瞬間、カゲヤマの手から呪歌が滑り落ち。

「参りました」

土下座したカゲヤマにもう大丈夫だろうとラグナ達はマスターに駆け寄って行く。

「マスター！ラグナ！」

「じっちゃん！……！」

「じーさん！……！」

「さすがです！……今の言葉、目頭が熱くなりました！……！」

「痛っ！」

エルザは、よほど感動したのか、マカロフを抱きしめた。ただし鎧を着たまま……

「じっちゃんスゲーなア」

「そう思っならペシペシせんでくれい」

「一件落着だな」

「ああ」

「ホラ……アンタ医者行くわよ」

「よくわからないけどアンタもかわいいわ〜」

ひとまず落ち着いた（と思う）騒動に一息ついた、——その時。

「カカカ……。どいつもこいつも根性のねエ魔導士どもだ」

『……！』

その時、突然どこからか誰のものでもない、かすれた低い声がした。その事に驚く全員。

「もうガマンできん……ワシ自ら喰ってやるっ」

すると、笛のドクロの口からモコモコと黒い煙が出てきた。どうやら、声も笛のものようだ。

「笛がしゃべったわよっ!!ハッピー!!!!」

「あの煙……形になってく!!!!」

笛から出る煙は、どんどんとある形をつくっていく……そして、最後に現れたのは……

「貴様等の魂をな……」

「……………ほお」

『なっ!怪物……!!?!?!?』

胸の所々に穴のあいた巨大な怪物であった……。

怪物のあまりの大きさに驚きを隠せない一同。

「な…何だ！？こんなのは知らないぞ！」

「あらら……大変」

「こいつア、ゼレフ書の悪魔だ！！」

どうやら、ギルドマスターたちもこれには驚いているようだ。

「腹が減ってたらん、貴様等の魂を喰わせてもらっぞ」

「なに……っ！……魂って食えるのか！？うめえのか？？」

「「知るかつ！！」」

あまりの場違いなナツの発言にルーシィだけでなくグレイまで突っ込んだ。

「ナツ……驚く所が違っだろ……」

ナツの発言に苦笑いするラグナだった。

「でも一体……どうなってるの？何で笛から怪物が……」

怪物を見上げ、冷や汗を流しながらルーシイは言った。その体は恐怖からだろうか少し震えていた

「あの怪物がララバイそのもののなさ。つまり？生きた魔法”……それがゼレフの魔法だ」

「生きた魔法……」

「ゼレフ！？ゼレフって、あの昔の！？」

ゴールドマインの説明に再び驚くエルザとグレイ。

「黒魔導士ゼレフ……魔法界の歴史上、最も凶悪だった魔導士……何百年も前の負の遺産が、こんな時代に姿を現すなんてね……」

「さあて………どいつの魂から頂こうかな」

みんなが話している間にも、悪魔はどの魂から喰らうか考えていた。
そして不気味な笑みを浮かべて

「決めたぞ……全員まとめてだ」

悪魔はそう言うと、大きく口を開いた開くと同時に怪しく光だす悪魔の口……

「いかん！！ララバイじゃ！！」

「いくぞ！！ナツ、グレイ、ラグナ！」

「「おう！！」」

ララバイを阻止するべく、エルザはナツとグレイを呼んで攻撃を仕掛けようとしたが、

ドカーンっ！！！！

「ギャアアアアア！」

『なっ！！！！』

三人が攻撃を仕掛けるよりも先に、いきなり悪魔に黒い塊が飛んでいき、悪魔にぶつかり爆発した。

この場にいた全員は黒い塊の飛んできた方を見ると、

「……………（ゴゴゴゴゴゴ）」

怒りのオーラを纏ったラグナがいた。

（SIDE：第三者 OUT）

（SIDE：ラグナ）

俺はこいつの言ったことにキレた。

「ぎ、ぎざまああああ！」

ララバイが俺を睨む。

「全員下がっている。俺がやる」

『なっ！？』

俺を除いた全員が驚き、声を上げた。

「どういう事だ！？いくらラグナでもあいつの相手は無理だ！！」

「そうよ！！ここはみんなで力を合わせた方がいいわ！！」

「そうだぞ、ラグナ！独り占めはずりいゾ！！俺にもやらせろや！！」

「てめえは黙ってる！！！！」

俺の発言に大反対する四人、ナツに突っ込みを入れたグレイも反対

のようだ。

「奴は俺の前で言っではならないことを言った。マスター達とエルザ達の魂を喰うだと？」

バキィィィ！

俺の足元の地面に亀裂が走る。

「調子に乗るなよ笛ごときが！」

ドゴオオオン！

「七つの星に裁かれよ。七星剣グランシャリオ！」

天から七つの巨大な光の玉が降り注ぐ。

「グギヤアアアアアアアアアア！」

悲鳴を上げるララバイ。

「オラアアアア！」

グチャ！

蹴りで左手を吹き飛ばす。

「グアアアアア！貴様あああああ！！！」

口から黒い玉をはいて俺に攻撃した。

「ふん！」

シュン！！

「消えた！？」

俺に攻撃が当たる前に、その場から消えた。

ドカーン！！

「グアアアア」

消えたのとほぼ同時に、爆発が起きて悪魔の右足を吹き飛ばした。

「ゼレフ書の悪魔って言うから、どんな強さなんだろうと思ったが……」

ザシュ！

「ギャアアアア！」

俺は剣を取り出して左足を切り落とした。

「弱いじゃねえか」

バチイイイイイン！

ドカーン！！

次は右肩を雷の魔法で吹き飛ばす。

「キ、キサマアアアアアア！！！」

俺の姿をとらえたララバイは口から黒い玉をはいて俺に攻撃した。

それを俺は、

「ウザいんだよ」

バシュン！

蹴りで黒い玉を蹴り返した。

ドカーン！

「グハアアア！」

ララバイは転び、足と手ががないたため立つことができない。

「消える屑が！破邪竜の咆哮！」

口から黒い魔力の塊のブレスを放つ。

「オ、オノレエエエエ！　グアアアアアア！」

ドカアアアアン！

ララバイは跡形もなく消え去った。

「見事！」

「すてき！」

「ゼレフの悪魔をこつもあつさり」と

「わあ！」

「す、すごい！これが…これが、フェアリーテイルの魔導士か！？」

「さすがラグナだ！」

「ああ！さすがフェアリーテイル最強候補！」

「俺と勝負しろラグナー！」

「か、かつこいいんですけど！」

「あい！」

俺を見て、全員が言葉を発する。

「いやあ、驚いた。力は落ちてねエみてエだな、ラグナ」

「むしろ、強くなっちゃってるわね」

「ゴールドマインさんにボブさん……改めてお久しぶりです」

俺は軽く頭を下げた。

「あああん そんな律儀に頭を下げる所がス・テ・キだねえ、ラグ

ナちゃん。フェアリーテイルなんて辞めてウチに来ない？アナタが来るなら私なんでもしちゃう」

体をクネクネしながら俺を勧誘するボブさん。

「コイツん所が嫌ならウチでもいいぞ。ラグナなら大歓迎だ」

それに乗っかるゴールドマインさん。

「お二人のお誘いは嬉しいですけど、遠慮します。俺、結構フェアリーテイル気に入ってるんで……それとボブさん、いい加減？ちゃん”付けは止めて下さい」

「そうじゃ！！こんな所で引き抜きなんぞするんじゃない。それにラグナはどこにも渡さん！」

三人の会話を聞いてマスターが入ってきた。

「いやん、もう、マカロフちゃんったら……冗談に決まってるじゃない」

「そうだぞ、マカロフ……冗談に決まってるじゃネえか」

「……………その微妙な？間”は何じゃ」

二人に対してジト目を向けるマスターだった。

そしてだんだん爆発による土煙が晴れてきた。そんな様子を見ながら

「いやあ、いきさつはよくわからんが、フェアリーテイルには借りができまっただなァ」

「うむ」

「なんの、なんのー！！ふひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃー！！」

そして、どんどん視界が良くなってゆく……

「うひゃ…ひゃ……………！！！！」

そしてマスターは何かに気がついてプルプルと震えだした。

『ん？』

そんなマカロフの様子を不思議に思ったみんなはマスターの視線の先をおった。その隙を見て、その場を離れようとするマスター。

『な！？』

『ぬあああつ！！定例会の会場があああ！！！！』

そう、そこは悪魔だけでなく定例会の会場も？跡形も無く”吹き飛ばされていた。

「や、やべえ……力抑えずに咆哮使ったからか（汗）」

そう言えば、魔力最大で咆哮使えばこうなるな（汗）

「ははっ！！見事に無くなっちまったア」

ナツは高らかに笑っている。ナツ、笑っている場合じゃねえぞ。

「捕まえろ～～～ッ！！！！」

ほら、思った通り俺たちを捕まるために追いかけるじゃねえかマスターたちが。

「おし、まかせとけ!!」

そして……なぜかナツ、なんでお前はそっち側にいた。

「おまえは捕まる側だ!!」

その場から逃げる俺たち。

「すまないマスター……やり過ぎてしまって……」

俺はマスターに謝る。

「いゝの、いゝの。どうせもう呼ばれないでしょ?」

そのマスターの顔はどう見ても青ざめていた。

俺たちはそのまま、他のマスターたちに追われながら帰る事になったのであった。

第14話 ラグナVSナツ！

〔SIDE：第三者〕

ここは、フィオーレ。この場所には、評議院支部があり、そこでは先日の鉄の森の事件^{アイゼンヴァルト}について、評議会のメンバーによる会議が開かれている最中だった。

「鉄の森^{アイゼンヴァルト}が潰れたところで根本的な問題は何も解決しないのだよ」

「闇ギルドはまだ星の数ほどある」

「では一掃作戦を実行すべきだ」

その言葉に「どうやって？」と疑問が持ち上がる中で議員の一人であるオーグは、封じられた呪歌【ララバイ】が入ったケースを見せつけるように持ち上げた。

「今回のようにまたゼレフの魔法を持ち出されたらたまらんどぞ」

「そもそもこれほどの魔法がなぜこつも簡単に持ち出されたのじゃ？」

「責任問題は管理側にまで及びそうじゃな」

「それにしてもあれだけけむたがつてた妖精の尻尾に今回だけは助けられたみてーだな」

「たった5ゝ6人でギルド一つを潰しちゃうんだもん。すごいわね」

それに声をあげたのは二人の若手議員……ジークレインとウルティアが言った。それに反論出来ず、他の議員達はざわつ、と騒ぎつつも言葉を詰まらせていた。

「認めたくないのもわかるがこれは事実さ。もしも呪歌でギルドマスターたちが殺されていたら事態は最悪だった。ここにいるオレたちの中の何人かは確実に首がとんでいた」

ジークレインはそう告げた。

「バカな……責任問題をここまで引き上げるつもりかっ……!?」

「話にならん……奴等のハデな暴れっぷりには今回も頭を抱えておるんじゃ……!」

「素直にねぎらいの言葉でもかけてやるんだな」

憤る彼らに対し気にした様子もなくジークレインはそう言って笑っていた。

一方で、ウルティアはと言うと、

「（フッフ、それにしても報告ではゼレフの魔法……ララバイを一人で倒したと聞いたけど……いいわね。彼……ラグナ・ギースは。是非、フェアリーテイルより————に入って欲しいわね／＼あんなかつこいい男は他にはいないわ）」

他の議員たちに気づかれないうちに顔を赤くしていた。

＼SIDE：第三者 OUT＼

＼SIDE：フェアリーテイル＼

ラグナとナツは今、向かいあっている。何故って2人が？それは鉄
アイゼンヴァルト
の森の仕事を手伝う代わりにラグナとエルザと戦うという条件でナ
ツは付いていったからである。そのため、今日はラグナと戦いたい
ということなので相手をする事になっている。

「ちょ……ちょっと！！！！本気なの！？二人とも！！」

「あらルーシィ」

ギルドの前で集まるギャラリーを飛び越えやって来たルーシィにミ
ラが声をかけている。

「本気も本気。本気でやらねば漢では無い！！！！」

「エルザは女の子よ」

「怪物のメスさ」

「だって……最強チームの二人が激突したら……」

「何だそりゃ」

ルーシイの言葉にグレイは何を言っただとでもいう風に聞き返す。

「あんたとナツとエルザ、ラグナじゃないっ！！妖精の尻尾トツプ4でしょ」

「はあ？ くだんねエ！！誰がそんな事言っただよ」

バツサリと切り捨てたグレイにその後ろで笑っていたミラは次の瞬間、手で顔を覆い、なく。

「あ……。ミラちゃんだったんだ……」

それにグレイがしまったとでもいう様な顔をする中、「泣かしたつと、ルーシイは半眼になってグレイを見る。

そして、

バシユン！

パサッ！

グレイの前髪に見えない何かが通過し、前髪を切り裂いた。

ギツギツギ……

グレイはゆっくりその何かが飛んできた方向を見ると、

「グレエエエイイイイイ？何、ミラを泣かしているんだあゝ
」

ニツコリ笑っているのにグレイから見たら悪魔の頬笑み。グレイはミラに向かって土下座している。

謝り終わったグレイは立ち上がり、ルーシィを見る。そこへエルフマンがやってきて言う。

「確かにナツやグレイ、ラグナの漢気は認めるが…【最強】と言われると黙っておけねえな。妖精の尻尾にはまだまだ強者が大勢いるんだ」

オレとか。と言ったのはエルフマン。

「最強の女はエルザで間違いないと思うけどね」

「最強の？男」となるとミストガンやラクサス、ラグナもいるし」

「？あのオヤジ」も外す訳にはいかなえな」

そう言ったのはレビイ、ジェット、ドロイの三人。

「私はただナツと 그레이 とエルザ、ラグナが一番相性がいいと思ったのよ」

涙を見せながら言ったミラにルーシィは仲が悪いのが心配って言うてなかったかと彼女を見つめる。

「なににせよ、面白い戦いにはなりそうだな」

「そうか？オレの予想じゃラグナの圧勝だが」

그레이 とエルフマンがそう話す中、ギャラリーの中心で睨み合っ
ラ グナ とナツ。ふとラグナは笑みを見せ、口を開く。

「ナツ。お前とこつやつて魔法をぶつけ合うのは久しぶりだな」

「あの時はガキだった！！今は違うぞ！！今日こそおまえに勝つ！！！」

「俺に勝ちたいならまずは俺を本気にさせることを考えるよな」

ラグナが黒い風を手に纏い、ナツは炎を手に纏う。それを見ていたハッピーはというと……。

「やっぱりラグナにかけていい？」

ピラ、とその手に持った1000Jを賭けの管理をしていたカナに渡す。それにルーシイが「何て愛のないネコなの！！！」と、叫ぶ。

「あたしこーゆーのダメ！！どっちも負けてほしくないもん！！」

その一方でルーシイの言葉にグレイは意外と純情なのな。と言葉を零していた。

ドラゴンスレイヤー
「同じ滅竜魔導師同士だ！今度こそどっちが強いかな勝負だあ！」

「始めいつ！！！」

マカロフが何とも軽い調子で開始を告げたのと同時に妖精の尻尾の面々は喚声をあげ始める。

「だりやつ！！！！」

先ず始めに動いたのはナツ。

ナツは炎を纏った拳でラグナに殴りかかるが、

ガシッ！

簡単にラグナに掴まれ、投げ飛ばされる。が、地面に手を置き、足を振り上げ蹴りを決めようとするが今度は足をラグナに掴まれ、投げられた。

「ガハッ！まだまだ！」

ナツは負けじと咆哮^{プレス}を吐き出し。これに対し、ラグナも咆哮^{プレス}で対抗する。

「すごい！……！」

「な？いい勝負してるだろ」

「どこが」

瞬きする隙さえない勝負にルーシィは声をあげ。エルフマンの言葉に認めたくないらしいグレイが言った。

ラグナとナツは楽しそうに戦っている。そして2人が再び交えようと同時に動き出した時、

パァァン！！

何ものかの手を叩く音が響いた。

ピタッ

それにより立ち止まるナツとラグナ。

「そこまでだ!!」

一同は声のした方を向いた。

「全員、その場を動くな。私は評議員の使者である」

すると、自らを評議員の使者と名乗るカエルが現れた。

「評議員!？」

「使者だつて!？」

「何でこんな所に!？」

「あのビジュアルについてはスルーなのね……………」

律儀に3人にツッコむルーシィ。使者は無視して書状を前に突き出して、読み上げる

「先日の鉄の森テロ事件において、器物損壊罪他11件の罪の容疑

で……………ラグナ・ギース及びエルザ・スカーレットを逮捕する
「……………」

「え?？」

「ああ、やっぱり来たか（汗）」

突然の逮捕宣告に驚くエルザと、予想していたのかそれほど驚かないラグナであるが、汗をかいている様子。

「何だとおおおお!!!!!!」

ナツの叫び声が辺りに響き渡った。

第14話 ラグナVSナツ！（後書き）

ウルティアにまでフラグを立てているラグナである。

ウルティアはラグナをあのギルドに入れたがつている様子。

でも、ラグナが入るわけないしねw

第15話 最強の座

〔SIDE：第三者〕

ラグナとエルザが評議員・フィオーレ支部へ連れて行かれた後のフエアリーテイルでは……さっきまでのお祭り騒ぎが嘘のようにギルド内は静まり返っていた。評議院が下した判断にみんな納得がいかない顔をしていた。

「出せっ！！！！オレをここから出せえっ！！！！」

「ナツ……うるさいわよ」

「出せ——っ！！！！」

その中で大きな声で騒ぐナツは、トカゲの姿にされコップの中に閉じ込められていた。評議院へ殴り込みに行かないようにする為の処置である。

「出したら暴れるでしょ？」

「暴れねえよ！！！！っーか元に戻せよっ！！！！」

「そうしたらナツは『助けに行く!!』って言うでしょ?」

「言わねえよ!! 誰がラグナとエルザなんかっ!!」

ことごとく否定してるけど出したら絶対にラグナとエルザの元に向かであるう。それが分かってるからミラも元に戻そうとしないしコップの中から出そうとはしないのである。

「今回ばかりは相手が評議院じゃ手の打ちようがねえ……」

「出せ——っ!!!! オレは一言言ってるんだ——っ!!!! 評議員だかなんだか知らねえが、間違ってるのはあっちだろ!!!!」

「白いモンでも評議員が黒って言えば黒になるんだ」

「しっかしなア……今まで散々やってきた事が何で今回にかぎって

「ああ……理解に苦しむね」

「絶対……絶対なにか裏があるんだわ」

そうは言っても判決が下るのを待つ事しか出来ず、もどかしい気持ちになっているフェアリーテイルの皆である。

「やっぱり放っておけないっ……証言をしに行きましょう……！」

そう言ってもう我慢ならないという風にイスから立ち上がったのはルーシィだが、

「まあ……待て」

マスターマカロフはそれを宥めるように止める。

「何言ってるの……！これは不当逮捕よ……！判決が出てからじゃ間に合わない……！」

「今からではどれだけ急いでも判決には間に合わん」

「でも……！」

「出せ……！オレを出せ……！」

「本当に出してもよいのか？」

「？」

マスターが言った言葉にさっきまでの威勢はどこかに吹き飛んだみたいになつて大人しくなる。ポリポリと多分頬の辺りだと思つ場所を掻いて汗が流れている。

「どうしたナツ。急に元気がなくなつたな。——かつ」

「ぎゃっ！」

そう言つたマスターがコップの中にいるナツに向かって魔法を放つた時、トカゲから元の姿に戻つたのはナツではなく。

「マカオ……!!？」

「え——っ……!!！」

「す……すまねえ……。ナツには借りがあつてよオ」

ぽかんとするギルドメンバー達にマカオは自分でトカゲに変身したのだと言う。

ということは……。

「本物のナツは……」

「まさかラグナとエルザを追って……！！！！」

「ああ、たぶん」

「シャレになんねえぞ！！！！アイツなら評議員すら殴りそうだ！！！！」

「全員黙っておれ。静かに結果を待てばよい」

ただマスターマカロフは一步も動く気配もなくそう言ってギルドメンバー達を静めたのだった。

「場所は変わって評議員」

この時、ラグナとエルザは手枷をはめられて、裁判室への廊下を歩いていた。

「ん？」

「！！！！」

すると2人は、柱に寄りかかる影を見た。

「よう」

「ジークレイン」

「えっ！？」

ラグナがジークレインの名前を読んだことに驚くエルザはラグナを見る。

「久しぶりだな……………ラグナ、エルザ」

驚きは隠せてないが、エルザは名前を呼ばれて身構えた。そのような様子を見て、ジークレインは言う。

「そう身構えるな、これは思念体だ。オレの？体”はE R Aにある」

そういうジークレインの体は不自然に揺れていた。どうやらジークレインの言うとおりのようだ。

「あの扉の向こうにいるじじいどもも全員、思念体さ。こんな小せえ案件で、わざわざ出向く訳ないだろう」

ジークレインは奥の扉を指差して言った。

「そうか……………これは貴様の仕業だったのか。くだらん茶番だ」

エルザは吐き捨てるように言った。

「心外だな……………オレはフェアリーテイルを弁護したんだぞ。だが、じじいどもは責任問題が自分たちに及ぶのを恐れ、すべての責任を

押しつける対象をつくらざるをえなかった」

「……はあ、つまり俺たちはスケープゴートって事か……メンドクサイな」

「そうだ……もつとも、オレが裁判前にオマエら……いや、エルザに会いに来たのは他の理由だ……」

すると、ジークレインはエルザとゆっくりと近き、

「？あの事」はじじいどもには言っな………お互いの為にな」

と、使者には聞こえないよう小声でエルザに言った。

「……………」

エルザはそれに対して無言だった。その無言を承諾ととったジークレインは、下がりながら

「では、扉の向こうで待っている……………評議員の1人としてな」

そう言って消えた。

その後、ラグナとエルザは裁判室へと入り、裁判が始まるうとしていた。裁判室は三段構造になっており、まず一番低い所にラグナとエルザ、一段目には書記、二段目には9人の評議員、そして一番上が裁判長である。その中にはジークレインとウルティアもいる、

「これより、魔導裁判を開廷する」

裁判長が低い声で、裁判の始まりを告げる。

「被告人…エルザ・スカーレットよ、証言台へ」

どうやら、エルザから裁かれるようだ。エルザは椅子から立ち上がり、証言台に立った

「エルザ・スカーレットよ、先日の鉄の森によるテロ事件において、お前はオシバナ駅一部損壊、リュシカ峡谷鉄橋破壊……これら破壊行為の容疑にかけられている。間違いないか？」

「はい」

エルザは弁明などせず、ただ頷いただけだった。

「……では次にラグナ・ギースよ、証言台へ」

次は、ラグナ。ラグナはエルザと入れ替わり、証言台に立った。

「ラグナ・ギースよ、お前は同事件において、クローバーの洋館の全壊、及び」

ドゴオオオン！！！！

『！！！！？？？？』

急に2人の後ろの扉が破壊され、裁判長の言葉を遮った。辺りには、白煙が舞い上がる。

「何事だ！？」

「（おいおい、この魔力の感じは……もしかして………）」

突然の襲撃に驚く一同。ラグナにはこの魔力の波長に覚えがあり、頭を抱えている。

そして、白煙の中から現れたのは……

「オレがエルザだア！！！！グラアアア！！！！！」

………鎧を付け、エルザの髪の色とおんなじ色のヅラをかぶったナツであった。

その後、ナツの乱入のせいでラグナ達3人は一日、牢屋の中で過こ

すことになってしまった。ナツは暴れる場合があるということでラグナとエルザとは別の牢屋に入っている。

〔SIDE：第三者 OUT〕

〔SIDE：ラグナ〕

あーあ……ナツが来なければ今日中に帰れたのに。現にエルザなんて牢屋に入れられる前にナツのことをボコボコにして今も顔が腫れているよナツは。

「これは、ただの？儀式”だったのだ”」

「儀式！？」

イマイチ理解できないのか、ナツは聞き返した。

「形だけの逮捕だったんだ。魔法界全体の秩序をまもる為、評議員

としても取り締まる姿勢を見せておかないといけないからな」

俺は説明した。

「なんだよ、そりゃ……………意味わかんねえ……………」

だがナツはそれでもわかってないようだった。

「つまり、有罪にはされるが？罪”は受けない。今日中には、帰れたのだ…………ナツが暴れなければな」

エルザは青筋を浮かべて言った。

「えええ……………！？」

ナツは自分がやった事が無駄だった事に驚く。

「まったく……………」

「うう……………スマネエ……………」

ナツはいたたまれなさから、縮こまってしまった。それを見かねた俺は、

「けど、エルザは嬉しかったんだよな？ナツが来てくれて」

エルザの頭を撫でながら言った。

「なっ！？／＼わ、私は別に！……！」

「ふん、俺は嬉しかったけどなあ……ナツが来てくれて」

俺はエルザの頭を撫でながらエルザの顔を覗きこんでニコニコと笑いながら言った。

「ううう／＼／＼私も……う、嬉しかった、ぞ／＼ナ、ナツが来てくれて／＼」

エルザは照れくささと俺に撫でられていることから、顔を赤くして目をそらしながら言った。

「そ……そうか！……へへへ、良かった／＼」

ナツも照れくさそうに人差し指で鼻をこすりながら言った。

そして、夜になりナツはそのまま眠りについた。それを見計らっていたのかエルザが俺に聞いてきた。

「なあ、ラグナ」

「ん？どうした？」

「なんでお前が、ジークレインの事を知っていたんだ？」

やっぱ、そのことが……

「俺が3年前に聖十大魔道せいとんだいまどうの称号をもらったのは知っているだろ？」

「ああ。それとどう関係あるんだ？」

「ジークレインとはその前からの知り合いだよ。俺がS級魔導師になつてしばらくしてから評議員からの依頼でここに来た時に会ったんだよ。んで、聖十大魔道せいとんだいまどうの称号をもらった時が2回目、今回で3

回目の会合だな」

「……そうだったのか」

ん？やっぱり、ジークレインがジェラルルに似ているから気にしているのか？仕方ないな。

ギユッ

「ラ、ラグナ／／？い、いきなり何を／／／／／」

俺がいきなり抱きしめたことに驚き、顔を赤く染めるエルザ。

「エルザ。お前に悲しい表情は似合わない。お前の過去に何があったのかは俺は知らない。けど、苦しいこと・悲しいことがあったら俺に言え。お前は俺の女。俺はお前の男だぞ？少しは俺を頼れ」

ギユウウウウウ

すると、エルザの方からも俺のことを強く抱きしめてきた。

「ああ……ありがとう……ラグナ」

「どういたしまして」

そのまま、俺とエルザは抱き合いながら眠りについたのであった。

（翌日）

俺たちは翌日の朝に、解放されギルドに戻ってきた。

「やっぱりシャバの空気はうめえ……！！最高にうめえっ……！！」

帰ってきて早々、ナツはそう言って自由って素晴らしいやらフリーダムやら叫んで走りまわっている。

「もう少し入ってればよかったのに……、けっきょく？形だけの逮捕だったなんてね……。心配して損しちゃった」

「そうか！！カエルの使いだけにすぐに『帰る』」

「さ……さすが氷の魔導士。ハンパなくさみイ………で、ラグナとの漢の勝負はどうなったんだよ、ナツ」

「そうだ……忘れてたっ……！ラグナー……！この前の続きだ……っ……！」

エルフマンの言葉に走り回っていたナツはそう言い俺の方に向く。

「まあ、待て。さすがに昨日の今日だとどうも調子が……」「行くぞゴラアアア……！」聞けよ」

カウンターでミラに出してもらった酒を飲んでいるのにナツが俺に突っ込んでくる、仕方ないな。

「アクアゲイザー」

「グポオオオオオオ！？」

貫通性に優れた水属性の魔法でナツを吹き飛ばす。

「終——了——！！！！」

「ぎゃはははっ！！！！だせーぞナツ！！！！」

「やっぱりラグナは強え！！！！」

「おい、この間の賭けは有効なのか？」

「あゝあ…。またお店壊しちゃってえ」

わいわいがやがやと騒がしさが戻ってきた中でみんなの言葉にミラがくすつ、と笑っていた時、

「ふぬ…」

「どうしました？マスター」

「いや…眠い…」

「？」

「奴じゃ」

「ああ。あいつだな」

とろーん、とした眼でマスター、俺がそう言ったその瞬間、

「あ…」

「あれ…？」

「これは…！」

「くっ」

「眠っ」

俺とマスター以外が急な眠気で倒れ始めた。

「おっと」

倒れかけたミラトリサーナの後ろに移動し、素早く受け止めた。

どつ……………どつ……………

そこへ、ギルドに誰かが入って来た。

「ミストガン」

マントを着、顔を隠した男の人——ミストガンは、つかつかと依頼板に向かうとその一枚を取る。

「……………久しぶりだなラグナ」

「ああ。お前も元気で安心したぜ」

握手し、互いの安否を確認する。

ミストガンはウトウトしているマスターに依頼書を渡し、確認させる。

「行ってくる」

「これっ！！眠りの魔法を解かんかつ！！！」

マスターに依頼書を渡した後、ミストガンは踵を返し。

「伍、四、参、弐、壹、」

スウ…、とミストガンの声が聞こえなくなり姿が消えたのと同時にみんな（ナツ以外）は一斉に目を覚ます。

「こ……………この感じはミストガンか！？」

「あんにやるお！！！！」

「相変わらず、スゲエ強力な眠りの魔法だ！！」

みんなは騒ぎ出した。

「ミストガン？」

「フェアリーテイル最強の男候補だよ……………っ！！！」

「！？」

ルーシィと目があってそそそつと離れるロキ。それを不思議そうに見るルーシィ。

「どういう訳か、誰にも姿を見られたくないらしくて……仕事をとする時はいつも、こつやつて全員を眠らせちゃうのさ。だから、マスターとラグナ以外、誰もミストガンの顔を知らねんだ」

とグレイは立ち上がり、埃を落としながらロキの話を付け加えた。

「いんや……………オレは知ってんぞ」

すると二階から普段はあまり聞かない声があがった。

「ラクサス！！」

「いたのか」

「めずらしいなっ！！！」

「パチッ」

ラクサスと言う言葉が聞こえたのか、ナツは目覚めた。

「ミストガンはシャイなんだ。あんまり詮索してやるな」

ラクサスは手すりに肘をついてタバコを吸いながら、下を見下ろすようにして言った。

「ラクサス……！！！！俺と勝負しろ……っ！！！！」

完全に覚醒したナツはラクサスに勝負を挑んだ。

「さっきラグナにやられたばっかじゃねえか（汗）」

「そうそう。それに？エルザごとき」にすら勝てねえようじゃ、オレには勝てねえよ」

「それはどういう意味だ」

「エルザ落ち着け」

“ごとき”と言われた事に食いかかるエルザを俺はなだめた。

「オレが最強って事さ」

ラクサスは両手を広げて話す。

「降りてこい！！！！コノヤロウ！！！！」

「おまえが上がってこい」

「上等だ！！！！」

ラクサスの挑発に乗ったナツが2階に上がろうとした時、

ドシン！！！！

マスターの腕が伸び、体以上に大きくなった手は、ナツを2階に上がらせない様にした。

「2階には上がってはならん。まだな」

マスターはナツを諭すような声で言った。

そう、まだナツにS級は早すぎる。S級に出るには圧倒的に経験値が足りない。

「ははっ！！怒られてやんの」

「ふぬう……」

ラクサスは馬鹿にするようにナツを見下ろして言った。ナツもラクサスに馬鹿にされ、なんとかマスターの巨大化した手から抜け出そうともがいている

「ラクサスもよさんか」

「そうだぞ。ラクサス。ナツを煽るな」

そう言ってマスターと俺は2階にいるラクサスを見上げながら咎める。

「はっ！さすがラゲナってか？お前も甘ちゃんになっちまったなあ？」

ガタンッ！

音がした方を見ると、黒いオーラを纏ったエルザ・ミラ・リサーナ・カナがいた。

近くにいたメンバーが4人を押えこむ。

「甘くて結構。お前のような協調性のないやつよりかはマシだ」

「……………ああ？」

ドスンッ！

二階から飛び降り、俺の目の前に立つラクサス。

「てめえ、なんていった？ああん？」

「もう一度言つてやんないとわかんねえのか？協調性のないやつに言われても痛くも痒くもないって言つたんだよ。それに自分が最強とか言つておきながら去年、俺にボコボコにされたじゃねえか。皆の前だよ」

バチイイイ！

「てめえ……ここで決着をつけるか？」

ゴオオオオ！

「面白い。やれるものならやってみろ」

ラクサスは雷を、俺は黒い魔力を纏う。

「止めんかああああああ！！！！この糞ガキどもがあああああああ
ああ！！！！！！」

「ぐぶえ!!」

堪忍袋の緒が切れたマスターが巨大化させた拳で俺とラクサスを叩き潰した。

「ちっ！フェアリーテイル最強の座は誰にも渡さねえよ。エルザにもミストガンにもミラにもラグナにも、あのオヤジにもな。オレが最強だ!!!」

そいつってラクサスは再び二階に上がって、奥へと行き消えていった。

「なんなのアイツ!! ちょム力つく」

ラクサスが居なくなっただけからしばらくすると、ギルドはいつものような騒がしさを取り戻してきた。

俺はルーシィとミラの3人で、カウンターで話をしていた。エルザも誘ったのだが、今回は遠慮しておくと言ってエルザはあのまま帰ってしまった。

まあ、帰り際にエルザの耳元で「俺の家で待っていな」と言ったら顔を真っ赤に染めて帰っていったよ。

「もうその話はいって、ルーシィ」

俺はなんとかラクサスの話題を終わらそうと言った。

「でもラグナ、あんな事言われて悔しくないの!？」

「言わせておきたいやつには言わせておけて。それに……」

パリィィン!

持っていたグラスが俺の魔力で砕けた。

「本気で俺と戦ったら生命の危機になるのはあいつだしな」

「ヒィ!？」

俺が黒い笑みを浮かべているせいかルーシィが俺から距離を取った。

「前に……去年、ラクサスがラグナに勝負を挑んだんだけど……見事に返り討ちにあったのよ。しかも手加減された状態でよ」

「……ああ！だから、あいつとラグナは！」

「そいつことよ」

ガタガタ震えるルーシィ。

「そ、そうだ！さっきマスターが言ってた2階には上がったやいけないうて、どういう意味ですか？」

またしばらく3人で飲んでいるとルーシィがそう切り出した。

「まだルーシィには早い話だけだね。2階のリクエストボードには1階とは比べものにならないくらい難しい仕事がついてあるの」

「S級のクエストだな」

「S級！？」

ルーシィはS級という言葉に過剰に反応した。

そんなに驚く話じゃないんじゃないぜ？簡単だし。

「一瞬の判断ミスが死を招くような危険な仕事よ。その分、報酬もいいんだけどね」

「うわ……（汗）」

「S級の仕事はマスターに認められた魔導師しか受けられないの。資格があるのはエルザ、ラクサス、ミストガン、わたしにラグナ。この5人を含めて6人しかいないのよ」

ミラは自分の名前をあえて出さなかった。

「そうなんだ〜……………ん!？」

ルーシィは固まってしまった。

「どうした、ルーシィ？」

俺が声をかけると、ルーシイはゆっくりとこっちを向いて俺とミラを指差しながら言う。

「……………ラグナってS級魔導士だったの！？それにミラさんも！？」

「あれっ？言ってなかったっけ？そうだよ、俺もS級魔導師。ルーシイと初めて会った日もS級からの帰りだったし」

「へ、へえ〜（やっぱり、ラグナってすごく強いんだ……………まあ、そうよね……………妖精皇帝の通り名は誰でも知ってるし、この前の悪魔との戦いでも一撃で倒しちゃったんだし……………私、実はすごい人と知り合いなんじゃあ……………それに、こんなすごい人にノノノ）」

それからルーシイはまた固まってしまった

「（何なんだ???）」

なんで固まってしまったのかまったく理解できない。

「まあ、S級なんて目指すものじゃないわよ。本当に命がいくつつあっても足りない仕事ばかりだから」(もしかして、ラグナの凄さに驚いてる?)」

「み、みたいですねぇ」

ミラの言葉で元に戻ったルーシィは、苦笑いしながら答えた。

「(本当に何なんだ?)」

なんでルーシィは固まっただんだ。

「あれ?そう言えば、何でミラさんはS級魔導師なのに、クエストに行かないんですか?」

それを聞き、俺の隣で酒を飲んでいたりサーナは意識を覚醒させた。やっぱり、責任感があるのか。気にすることないのに……。

「ちょっと、昔ある出来事があってね……精神的に不安定で、わたしが使う魔法はそんな状態で使うと危ないから少しの間は休養してらってラグナに言われたのよ」

「えっ？ そうなの？」

ルーシイが俺を見て聞く。

「ああ。あの時のミラの状態は悪かったし、魔力に乱れもあったかな。そんな状態でS級や他のクエストに行かせるわけにいかなかったからな。おっと、これ以上の詮索はダメだぞ？」

「う、うん……（一体何があったのかな？）」

こうして、ルーシイに若干の疑問を残しながらも、この日は何事もなく（？）終わっていった。

そして、

「あ、待てラグナ！そこは……んん……！」

「ここか？ここがいいのか？」

「や、あ、っは……んっ……恥ずかしいぞおっ……！！」

「ハッハッハ！いいぜ啼いても……こんなに硬くしちまってるもんな……？」

「ち、違うつ……ラグナのバカっ……あっ……そんな……ひゃああんっ！！」

エルザは予告通り、ラグナに喰われていた。

第15話 最強の座（後書き）

次回、ラグナのエクシード登場！？今までどこにいたのかわかりますよ！

お楽しみに！

第16話 エルザの怒り（前書き）

今回、無理矢理感があります……………多分。

第16話 エルザの怒り

SIDE：ラグナ

「グウオオオオオオオオ！」

やあ、みんな。ラグナだ。評議会の牢屋から帰った次の日……つまり今日だな。俺はカナとレヴィを連れてクエストに来ている。S級クエストでなく普通のだな。クエストの内容は『壊滅した闇ギルドが残した禁呪魔法によって自然から生み出された魔法生命体の呪いを解除してほしい』という内容だった。

俺は基本、解除魔法とかは使わないのでその辺に詳しいレヴィを連れていくことになった。カナに関しては偶には動かないと体が鈍ってしまうとのことについてきた。それと、今回はもう一人？いる。それは……

「ラグナ！俺を助けて！ヘルプミー！」

ナツのハッピーと同じ種族で、名前はリクだ。毛並みは赤と白。

「リク！大丈夫か！おっと」

リクに話しかける最中に呪われたフォレスト（今命名）が根っこで俺を攻撃してきた。まあ、動きは鈍いから簡単に避けられるけどな。

「ちい！カードマジック・祈り子の噴水！」

カナはカードを使った魔法を使い、戦っている。今回、俺はあまり攻撃しない方がいいのだ。えっ？何故かって？俺が攻撃したらフォレストを壊してしまうからだ。

今回の依頼の内容は解除。俺が攻撃して森に被害を出すわけにはいかないのだ。今、レビイがフォレストの禁呪魔法を解除する術式を持ってきた大量の本から探している。

「カナー！俺が作ってやったカードを使ってみろー！リク！お前はカナを持ち上げてやれー」

「わかったよ！」

「アイアイサーー！」

ガシッ！

カナがリクに持ち上げられ、空中に飛び立つ。

「行くよ！カードマジック・アイストルネード！」

ヒュウウウウウ———！

カチイイイイイイン！

フォレストの足元から氷の竜巻が発生するとフォレストを氷漬けにした。

「すつごー！？何この威力！？」

カナは自分が放ったカードの力に驚いている様子。

「カナー！リクー！降りて来い」

声をかけると2人は地上に立つ。

そして、俺はカナに抱きつく。

「ちょ、ラグナ！？／／／」

いきなり抱きつかれて驚き、顔を赤く染めるカナ。うん、いいねえ、その表情。

「いやゝ頑張ったカナにご褒美と思ってね」

「う、ご褒美／／／」

ご褒美と聞いて余計に顔を赤くするカナ。

いい雰囲気になりかけていると、

「……ふ、2人とも！？／／／何してんの！！」

レビィがやってきた。くっ！このままキスをしようと思ったのに！

「レビィ！解除の方法は見つかったのか？」

「ええ。全くあんなに解除する術式を見つけるのに時間かけたのは久しぶりだったわ」

そういい、レビイは持ってきていた本のページを開き、俺に見せる。
カナも俺から離れ、一緒にその本のページを見る。

「これが見つけた解除の魔法術式よ。今から解除するから周りの警
護よろしくね？」

「ああ、任せな！」

「解除するまでしっかり守るよ！」

「おおー！」

かくしてレビイによる解除は始まり、数分後、解除に成功したので
あった。

解除を確認した俺たちは依頼を受けた村へ戻り、報告するため戻っ
ていった。

「依頼のあった村」

村長に解除は成功したことを教え、と村人たちが喜び声を上げている。その後、報酬のお金と本をもらい、俺たちはギルドに帰るために支度をしている。

なお、本に関しては、

「ええ！？いいの、この本貰っても？」

「ああ。今回、クエストを請け負ったのは俺だが、活躍したのはレヴィとカナだしな。本はレヴィにあげるよ」

「ありがとう！この本、前に見た時に欲しかったけど随分古い本だし在庫なくてがっかりしていたところなの！」

嬉しそうにするレヴィの頭を撫でる。

「ちょ、子ども扱いしないでよ！！」

「おっと、悪い悪い。いい笑顔だったからなっいな」

「もうこれからは気をつけてよね!」

レビィは少しご立腹のご様子。

カナはというと、

「アハハハハハ!」

報酬金を手にして笑っていた。大方、これで酒代に困らないと思っているんだろうな。目がイッてしまっているぞ（汗）

リクはというと、

「ガツガツガツガツ!」

俺が持っている最高級の肉を食べていた。骨付きだぞ。

「くはぁ〜美味しかった!」

手で腹をポンポンと叩いている。はは、元気だな。

「ちょっと、外出てくるな」

「いつてらっしゅい」

「いつてらっしゅい」

「らっしゅい」

3人に見送られ、外に出ていく俺。

村から出て森に来た俺。周りに変わった様子はないかを見ているのだ。特に変わった様子がないので村に帰ろうとすると……

ポタ……ポタ……ザア~~~~~!

いきなり雨が降り出した。

「おかしいな。今日は一日中晴れだと思っただけ……誰だ！」

俺は俺にいる方向に歩いてくる人の気配を感じ、声をかける。すると、

「しんしんと……私は怪しい人物ではない……しんしんと」

傘を差した女性がいた。……ん！？しんしんとって……もしかして？

「私は幽鬼の支配者の魔導師です……名前はジュビア・ロクサーといます」

「あ、ああ。そうだったのか。すまないな怒鳴ってしまった。俺は妖精の尻尾の魔導師、ラグナ・ギースだ。よろしくな」

まさかこんな所でジュビアに会うとわな。

「ラグナ……破邪竜のラグナでしょうか？」

「ああ、そうだけど？」

「私のギルドにも滅竜魔導師^{ドラゴンスレイヤー}で、ガジル君がいますので、彼から話しは聞いています。「あいつは俺が倒してやるぜ……ギヒィ！」と

……これはあいつと戦うフラグなのだろうか？おっと！そんなことをしている暇じゃないな！

「すまないな。仲間が待っているんだ。雨が降ってきているし、風邪を引くなよ？じゃあな！」

そっつい、俺はその場から離れていった。

〈SIDE：ラグナ OUT〉

〈SIDE：ジュビア〉

彼が破邪竜のラグナ。物凄い魔力だったわ。私では絶対に勝てない
と思った。ガジル君でも勝てないわね。

それにしても、彼はこの雨を見て何とも思わなかったのかな？私が
来た瞬間雨が降り始めたのに。今まで付き合った人たちはこの雨が
ウザいとか、色々言っていたし、初めて会った人たちだって私が来
たことで雨が降り始めたことを酷い言い方をしていたのに。

何故？でも、彼と少し話してただけで心が……晴れたような気が
した。彼と一緒にいれば何かあるのか？

ギユウウウウウ

この気持ち、次に会った時に確かめればいいわ！ジュビア、頑張る！

〈SIDE：ジュビア OUT〉

〈SIDE：ラグナ〉

ジュービアと会った後、俺はカナ・レヴィイ・リクと合流し、ギルドに戻ってきて聞いた最初の声が、

「あの……大バカものどもがああああああああ……！」

エルザの怒りに満ちた声だった。

エルザの怒りの声にギルドにいるメンバーはテーブルの下に隠れ、カナ・レヴィイ・リクは俺の後ろに隠れている。

「エルザ。一体どうしたんだ？」

俺はマスターに報告をしながらエルザに聞いた。

「ああ。ナツ・ハッピー・ルーシイがS級クエストに向かったらしい」

バキッ

俺が手を置いていた椅子が壊れた。

「んだとお！？」

俺はマスターとミラ、リサーナを見る。頷く。他のメンバーを見ても頷く。本当のようだ。

「……それで、 그레이 がないのは何でだ？」

「ナツ達を連れ戻しに行ったはずだが、半日立っても帰ってこない。つまり……」

「ナツ達と一緒にそのクエストに行ったと？」

頷くエルザ。俺は頭が痛くなってきた。マジか……今日だったのか。デリオラ編は。

「それで、先ほど私もクエストから帰ってきてマスターに連れ戻すよう言われていたところだ。ラグナも一緒に来てくれないか？」

「いいぜ。カナ・レヴィィ。俺の荷物頼んだ」

俺は背負っていた荷物を2人に預ける。

「よし！エルザ！俺の肩に掴まれ！リク！お前は俺の頭に乗っかっていな！」

外に出てエルザは左手で荷物の縄を持って、右手で俺の肩につかまる。

リクは俺が言ったように頭の上に乗っかっている。

「行くぞ。まずは港だな。転移！」

そして、俺・エルザ・リクは転移魔法で港まで転移していった。

第16話 エルザの怒り（後書き）

ジユビアとの会合。無理矢理になってしまいました。
次回もお楽しみに！

第17話 ガルナ島

〔SIDE：ラグナ〕

俺とエルザ、リクは港町ハルジオンにいる。

「それで？ここまで来たのはいいけど……呪われた島とか言われているガルナ島に船を出してくれる奴はいないだろう」

「心配するな、あれを見る」

そう言ったエルザが指差す先には、

「なるほど、海賊船か」

「ああ、あれなら問題ないだろう」

1隻の海賊船が港に停泊して、近く由市から物質を強奪していた。

「何というタイミングでいるんだあいつらは……けど」

「好都合とはこのことだな」

「飛んで火にいる夏の虫」

俺とエルザは顔を見合い、海賊たちを粛清したのであった。

その後、俺たちは海賊たちの船に乗ってガルナ島へと向かっている。

「あ……あんな島に何しに行くつもりでえ」

俺は震えるような声が下からしたので見た。すると、この船の船長が震えながらエルザに聞いていた。

ちなみに、他の船員たちはデッキで気絶している。なお、これはエルザがやったことである。

「いいから舵をとれ」

「ひっ………か、かんべんしてくれよ！！ガルナ島は呪いの島だ

「……噂じゃあ、人間が悪魔になっちまうって……」

「興味が無い。掟を破った者どもに罰を与えに行く、それだけだ」

エルザはそんな船長の訴えを一蹴した。

エルザ、本気で怒ってるなあ……仕方なねえなあ」

「あらよつと」

俺は下に降りてエルザの近くに行く。

「エルザ」

「なんだ？」

「うわー、すごい不機嫌だなエルザ。」

「少し落ち着け」

ポンポン

俺はエルザの頭に手を置いて、優しく撫でた。

「な！？／＼わ、私は、落ち着いている／＼急に頭を撫でるな
！！」

エルザは顔を赤くして反論する。

「いやいや、俺にはそうは見えないね。ナツたちが心配なのはわかる
それも行き先はガルナ島だ、尚更、心配だろうでも、助けに行く
俺たちが冷静じゃなかったら本末転倒だろ？」

「私は助けに行くのではない！！！罰を与えに行くんだ！！／＼／」

「……………（ジイ——）」

「ほ、本当だぞ！？助けに行こうなどとは微塵も…………」

「……………（ジイ——）」

「微塵も……」

「……………（ジイ——）」

「みじ、ん、も……………／／／」

「……………（ジイ——）」

無言で見る俺に遂にエルザが折れた。

「……………ラグナは卑怯だな／／／」

「ふっ、やっと素直になったな」

俺は更にエルザの頭を撫でた。

「／／／／／」

俺に撫でられ更に顔を赤くしながらも、どこか嬉しそうなエルザだった。一瞬、エルザを喰いたくなかったが、今はナツ達の方が優先だし、我慢だ。

「あ、姉御！兄貴！見えてきましたぜ！」

俺はちなみに海賊たちには兄貴と呼ばれている。

「ん？海岸で誰かが戦っているな」

「何？」

俺は音がした方を見ると誰かが戦っていた。エルザは俺が指さす方を見ると……険しい表情をして船から飛んで行った……えっ！？飛んで行ったと！？

「リク！？……いない」

エルザが飛んでいるのはリクが掴んでいったからか。しゃあねえな。

ヒュウウウウウウ~~~~~

足元に風の魔力を集中し、飛び立ち、海岸の上に来るとエルザがルーシィを捕まえていた。

「ルーシィ……なぜ私がここにいるか分かっているな」

「連れ戻しに……ですよね」

ガタガタ震えながらエルザを見るルーシィ。

「よかった~~~~！！ルーシィ、無事だったあ？」

そこへ、ハッピーが現れた。

そして、

「……………」

「……………（汗）」

「……………（ギロリ）」

「……………」

ビュ~~~~ン!!

エルザとハッピーの視線が重なり、エルザに睨まれハッピーは表情が真っ青になり、ハッピーはその場からものすごいスピードで逃げ出した……………が

「はい、確保」

俺が捕まえた。

「あああいいいい~~~~」

俺の腕の中で暴れていたハッピーに拳骨を食らわすと屍になったかのように静かになっている。

「ナツは何処だ!」

「ちょっと聞いて、勝手に来ちゃった事は謝るけど、今この島は大変な事になってるの、氷漬けの悪魔を復活させようとしてる奴等がいたり、村の人達はそいつらの魔力で苦しめられていたり、とにかく大変なの! あたし達、なんとかこの島救ってあげたいんだ!」

あ、その言い分だと今のエルザじゃ逆効果だぞ。

「興味が無いな！」

「じゃ、じゃあせめて……最後まで仕事を……」

シャキーン

「！……！」

やらせて、そう続けようとしたルーシィだったが、その話を遮り、エルザに喉元に剣を突きつけられて何も言えなくなった。

「仕事？違うぞルーシィ。貴様等はマスターを裏切ったんだ。……」

「……ただで済むと思うなよ」

「（こ、怖い………助けてラグナ）」

ルーシィが涙目で俺に助けを求めている。はあ、仕方ないな。

「エルザ。説教はその辺にして一旦、その村に向かうぞ。ナツとグレイと合流しないといけないからな」

剣を突き付けるエルザに言うと、

シャキン……バツ！

剣を消し、ロープで動かないように拘束したルーシィを担ぐ。

「そうだな。一旦、その村へ行こう」

こうして、俺たちは海岸から村へと向かった。

「村の資材置き場」

俺とエルザが村に着いてみると怪我をしたグレイが治療されていると聞いて俺はグレイが寝ているテントに入り、治療を終え、今はグ

レイが目を覚ますのを待っている。

パサッ

「……！ラグナ！？エルザ！？……！？」

すると、テントの中に目が覚めたのか、今まで気を失っていたグレイが中に入ってきた。

「ギロリッ」

「よう、グレイ。ひどくやられたな。治療はしておいたぜ」

エルザはグレイの方を向いて睨んでいる。

「だいたいこの事情はルーシィから聞いた。お前はナツたちを止める側ではなかったのかグレイ」

「……………」

グレイはエルザから咎められて、何も言えずに顔を逸らした。その

行動にエルザは、

「あきれて物も言えんぞ」

「ナ、ナツは？」

グレイは話題を変えた。

「それは俺たちが聞いてえよ。この島にいるのは分かるが、何かが邪魔して正確な位置が掴めん」

俺はため息を吐きながらグレイの問いに答えた。

「ルーシィ……………ナツはどうした・」

グレイは今度はルーシィに聞いた。

「わ、わかenらi。村で零帝の手下と戦つてたハズなんだけど……………。そいつ等は片付けられてたのに、ナツの姿が見当たaranかつたの。そ、それでね……………とりあえず村に行こうつてなつたんだけど今、村が破壊されたって話したら、グレイの所に連れてけつて言われて……………」

ルーシィはエルザがよほど怖いのか、ビクビクしながらグレイの問いに答える。

「よく、この場所がわかったな……………村の資材置き場だと聞いたぞ」

「オイラが空から探したんだよ……………縛られたまま」

「ククク」

グレイへのハッピーの答えに苦笑いする俺であった。

エルザは出口に向かって歩きながら、

「ラグナ、グレイ。ナツを探しに行くぞ。見つけ次第、ギルドに戻る」

「はいよ」

スクッ

俺は立ち上がる。

「な、何言っつてんだエルザ……………事情を聞いていたなら今、この島で何が起こつてるのか知ってんだろ。それにラグナ、なんでお前は何にも言わないんだよ!？」

ギルドに戻ると聞いて、グレイは反論した。

「それが何か？」

それに対して、エルザは再び冷たく返した。その一言で場の空気が一気に冷える。

「ラグナが何を考えているかわからないが、私はギルドの掟を破つた者を連れ戻しに来た。残るはナツ1人。それ以外の事には一切の興味が無い」

「この島の人たちの姿をまたんじゃねえのかよ……………それを放っておけと言っつか!？」

グレイは両手を広げエルザを説得する。その顔はどこか焦っている

ように見える。

「依頼書は各ギルドに発行されている。正式に受理されたギルドの魔導士に任せるのが筋ではないのか？」

エルザは眉一つ動かすことなく言った。

「……………見損なっただ、エルザ」

それを聞いても納得できないグレイは、歯をくいしばって言い放った。

「何だと？」

その一言にエルザも反応する。

「グレイ！！エルザ様になんて事を！！！」

「？様”……………！？」

「……………」

ハッピーは 그레이의 言葉に対して、ルーシィはハッピーの様付けにそれぞれ反応したが、俺は無言でエルザと 그레이を見ている。

シャキ

「『！……！！』」

今度はエルザは 그레이の喉元に剣を突きつけた。

「お前までギルドの掟を破るつもりか。ただでは済まさんぞ」

エルザは 그레이を脅すように言ったが、

ガシッ

「『！……！！』」

おお、 그레이のやつ、突きつけられたエルザの剣を素手で掴んだぞ。

「勝手にしやがれ！！これは俺が選んだ道だ！！やらなきゃならねえ事なんだ！」

グレイはまっすぐエルザの目を見て言い切った。剣を握るグレイの手からは血が流れている。

パッ

グレイは剣から手を離し、俺たちに背を向け、

「……………最後までやらせてもらう。斬りたきや斬れよ！！」

「ぐっ！」

そう言っただけでグレイはテントから出て行った。

グレイが出ていったのを見ていたエルザはルーシー達の方に向いた。

そしてエルザはルーシー達の方に向いた。

「ちょ、エルザあー。おお、落ちていて……………！！！！」

「そうそう。グレイは昔の友達に負けて気が立ってるんだよね」

ルーシィとハッピーはエルザが完全にキレたと思い、必死になだめる。

「…………ギロリッ」

「ひひひひひ！！！！」

エルザに睨まれ本気でびびる2人。エルザはそんな2人に剣を振るい…………

バサリ

「「！？」」

2人の縄を切った。そしてエルザもグレイを追いかけるように出口に向かう。

「…………行くぞ」

「え？」

「これでは話にならん。まずは”仕事”を片付けてからだ。……
……………それでいいだろう、ラグナ？」

「その通りだな」

どうやらエルザもやる気になってくれたようだった。俺もエルザの
問い掛けに笑顔で了承した。

その事に2人は嬉しそうな顔になる。

「でも、勘違いするなよ。罰は受けてもらっぞ」

「……………あい」

しかし、そんな2人に釘を刺した。

そして俺たちは遺跡へと向かうのであった。

第18話 デリオラの最後。晴れるグレイの闇

〔SIDE：ラグナ〕

俺たちは今、月の遺跡へ向かっている。その途中でグレイが話をしてくれているところだ。

「デリオラを倒す？それがあいつの目的なの！？」

「わざわざ氷漬けになっている奴をか？」

忘れかけている原作知識から思い起こし、一応聞いておく。

「……リオンは昔から、ウルを超える事だけを目標にしてきた。だから、そのウルがいなくなった今、ウルも倒せなかったデリオラを倒す事で、ウルを超えようとしている！」

「そっか……死んだ人を追い越すにはその方法しか……」

「あい」

ルーシイは瞳を伏せながら納得の声をあげ、ハッピーもそれに頷く。

「いや……あいつは知らないんだ」

「え？」

だが、ルーシイの言った言葉に対して返ってきたのは否定の言葉。

「確かにウルはオレたちの前からいなくなった。だけど……」「生きている……か？」！？ラグナ、どうしてそう思う？」

3人と2匹が俺を見る。

「どうしてって……俺も絶対氷結アイスドシエルが使えるからな」

『なに！？（うそー！？）』

走るの（飛ぶの）をやめて俺を見る3人と2匹。

「止まるな。走りながら話してやる」

3人と2匹は再び、走り（飛び）だす。

「絶対氷結アイスドシエルを使った術者は確かにその身を氷にする。が、別に死ぬわけではない。意志……魂は絶対氷結の氷と同化している」

俺が話をしていると遺跡が見えてきた……のだが、

「遺跡が……傾いて……る？」

「どうなってんだー!？」

斜めに傾いた遺跡の前に目を丸くするルーシィとハッピー。そう、これでもかと言わんばかりに遺跡が傾いているのだ。まあ、十中八九

『ナツだな』

昔からナツという俺たちにはこんなことをしでかすのはナツしかないという確信があった。

「大方、月の雫ムーンドロップをデリオラに浴びせないようにと思って遺跡の柱を破壊したんだな……さすが、壊すことに長けているなナツ」

「全くその通りだな。あの壊し魔が、こんな所で役立つとは」

「本当にね」

「あい」

話していると突然弓矢で攻撃をされた。

「あぶねえ！」

俺は隣で走っていたルーシィを抱え、ジャンプして避ける。

シュタ！

「大丈夫か？」

「へえっ！？あ、う、うん／＼／＼（か、顔が近いんですけど／＼／＼）」

「何者だ！！出て来い！」

エルザが剣を構えながらそう言つと、

「見つけたぞ。妖精の尻尾！！」

草村からリオンたちの手下と思われる顔を布で隠した魔導士たちが大量に現れた。

その数は100人を超えている。

バツ

「！？」

そいつらをしとめようと 그레이が動くよりも早く俺とエルザが前に出る。そして俺とエルザは一度、お互いの顔を見て頷いてから……

「行け！！ 그레이」

「ここは私たちに任せろ」

「「リオンとの決着をつけてこい!!!」」

そうグレイに言った。

「ラグナ……………エルザ……………（コクン）」

グレイは俺たちの言葉に頷くと走って行った。

「さて、ゴミ掃除を開始しようかエルザ」

俺は刀を出す。

「そうだな。コイツラを片付けてナツとも合流せねばな」

剣を構えるエルザ。

「あたしもいるわよ!」

「オイラもいるよ!」

「俺もな！」

ルーシィは鞭を構える。

ハッピーとリクも羽を広げ、戦闘態勢を取っている。

そして、戦闘を開始した。

〈戦闘開始数分後〉

グレイを先に行かせた俺、エルザ、ルーシィの3人は魔導士たちを確実に倒していた。ハッピーとリクは敵を翻弄させている。

「ふん!!」

スバツ!!

「グハッ!!!!」

「ウラァー!!!」

ボコッッ!!!

「グエッ!!」

そして最後の1人を俺が倒した。

「今ので最後か？」

「そうみたいだな」

「やっと終わったあゝ……」

3人は周りを見回しながら言った。特に俺とエルザの周りには多くの魔導士が倒れている。

ゴゴゴッ、ズゴゴゴッ!!!

すると突然、遺跡を中心にして大きな地鳴りが響いた。

「何の音だ？」

「そ、そんな……。傾いた遺跡が……。元に戻ってる」

3人が遺跡を見ると、さっきまで傾いていた遺跡が元通り真っ直ぐたっていた。

「これは……。まずいな」

「え？」

「遺跡が傾いていたのが戻ったって事はだ。月の雫の儀式（インドリップ）が再開されるってことだ」

敵はリオンたちだけだと思ってたが、……。そう言えばここに来てから覚えのある匂いがしたな。まさか……。そうか、あいつが直したのか。

俺の脳裏に遺跡を元に戻した人物が思い浮かんだ。

「エルザ、ルーシィ。悪いけど俺は先に行く。遺跡でまた合流する」

「ああ」

「わかったわ」

2人にそう言い残し俺は先を急いで遺跡内へと向かう。もし……俺がいることで生じたイレギュラーな出来事があるとしたら……急がなくては！

↓SIDE：その頃のナツは↓

グレイがリオンとの決着をつけている時、ナツはザルティという？
失われた魔法^{ロストマジック}を使う魔導士を追いかけ、デリオラが閉じ込められた氷の所までやってきた。

ビチャ……………ビチャ……………

「うおおっ！？大変だ！！デリオラの氷が溶けてきた！！」

そしてナツがザルティに追い付き、ふとデリオラを見上げると、徐々にデリオラの氷が溶け始めていた。

「くそっ、しくじった！！頂上にいる奴なんとかしねーと！！！！」

そう言っただけでナツがUターンして頂上に向かおうとすると、

ズボッ

「ぐおおっ！！！！」

ナツの足元に穴が空いて、ナツは穴にハマってこけた。

「おや？逃げる気ですか？しかし、そうはいきませんぞ」

それをやったのはもちろんザルティだ。

「私を追ってきたのはミスでしたね……………？火竜^{サロメンダー}くん。」

ザルティは不敵な笑みを浮かべている。

「クソっ！」

逆にナツは焦る。デリオラの復活まで残された時間は少ない。

「ハッハッハ！俺が来たぜ、ナツ！」

シュタ！

「……………！」

ラグナが到着した。

〈SIDE：戻ってラグナ〉

俺がナツの所に来ると穴にスッポリと嵌っているナツと仮面をつけた男……否ウルティアがいた。

「お前が暴れていたおかげで迷わずここまで来れたぜ」

「ラグナ！」

俺が来たことが嬉しいのか目が輝いているなナツ。

「クツ！ここで妖精皇帝フェアリーエンペラーが来るとは……！（まずいわね。ラグナが来るなんて予想外よ?!）」

「ナツ。コイツは俺が相手してやるから、お前は上に行って儀式を止めてこい」

「……ちええ！俺の獲物だけだよ……今はデリオラが最優先だからな！こいつは頼んだぜ！」

穴から脱出したナツがそういい、俺たちに背を向けて走っていく。

しかし、そんなナツをウルティアが黙って見ているハズもなく、

「行かせるとお思いですか？」

右腕を前に伸ばし、再び己の魔法？時のアーク”を発動しようとしたが、

「やらせると思ってんのか？」

ボコッ……………ドゴン！！！！

「！！きゃあああああゝ！！？」

俺はウルティアに真横に現れ、腹を蹴って吹き飛ばして岩に激突させた。

それによって、砂煙がおこる。

「……………いつまで、その格好でいるつもりだ。蹴った時、女声に戻ってたぞウルティア」

その砂煙の中、先ほどまでザルティと名乗っていた男を俺はそう呼んだ。

「さすがは、ラグナね。やっぱり、この程度じゃあ、気付かれたしまうのね。……でも女の腹を思いつき蹴り飛ばすなんてひどくないかしら？お嫁に行けなくなったら、責任とってくれるの？」

そして俺の視線の先、砂煙が晴れてそこに立っていたのは仮面をかぶった男ではなく、1人の女……ウルティアだった。

「当り前だ。ドラゴンスレイヤー滅竜魔導師の鼻を舐めるなよ？お前がここにいるのはジークレインの命令か？」

「（さ、最後のはスルーなのね……残念）さあ？こんなことをしているとデリオラが……」

ウルティアが何かを言いかけると、

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ！！』

大きな雄たけびが遺跡内に響き渡ってきた。

また聞こえてきやがったか！けど、おかしいな。復活して少ししてデリオラは活動を停止するはず。なのに、何で……停止しない？やっぱり、俺と言うイレギュラーのせいかな？

「急ぐか！」

俺は遺跡の下に向かうため、一々階段を使うのも面倒なので下まで一直線になるように魔力弾を地面に向かって放つ。

ドゴオオオオオオオン！

爆発音と共に下の地面に大穴ができ、そこから下へと向かう。

下が見えてくるとナツ・グレイ・リオンがいた。デリオラは暴れていた。

チツ！やっぱり、俺がいるせいか！

シュタ！

「ラグナ!!」

「何?ラグナ……妖精皇帝のラグナ・ギースか!」
フェアリーエンペラー

俺はデリオラの方を向いて、

「ブツ飛べ!右手の雷と左の炎、二つの属性を合わせて……破邪爆
竜裂拳!」

両手を重ねての破邪竜の滅竜魔法を使い、デリオラを殴る。デリオ
ラも俺に向かって拳を振る。

ズドオオオオオオン!

「うおおおお!!」

「くっ!」

「なんて魔力だ!」

他の3人は魔力の衝撃破に吹き飛ばされないように岩に張り付く。

「うおおおおおおお！」

魔力と魔力の籠った拳がぶつかり合っていると、

バキッ！バキバキバキ！

突如、デリオラの右腕に突然亀裂が走った。その亀裂は、右腕だけじゃなく、体全部に亀裂が走った。

『っ！？』

「（なるほどな、俺がいたとしても少ししか身体が持たなかったのか）」

俺は冷静にデリオラを観察する。最初はてっきり、デリオラが完全に復活したのかと思ったが、そうじゃなかった。

「なるほどな……。こいつは俺とぶつかり合った瞬間、完全に死んだのか」

「ど、どういことだ!？」

リオンが俺を見て聞いてくる。

「つまりだ。グレイとお前の師匠……ウルが絶対氷結^{アイスドシエル}を使い、自身を氷にし、デリオラは氷漬けにされ、今までずっとその氷はデリオラの生命力を奪い続けた」

「!そうか!さっきまでのデリオラはその生命力は僅かしかなかったのにラグナと戦ったせいでその生命力が完全になくなったのか!」

「その通りだ」

俺たちはただ大きな音を立てて崩れるデリオラを見ている。

ガンッ!

リオンは拳を地面に叩きつけた。

「かなわん……。俺には、ウルを越えられない」

そして涙を滲ませてそう言った。

「グレイ……………。お前の師匠はスゲーな」

俺はグレイに笑顔で言った。

「……………」

そして最後のカケラがグレイの足元に転がった時、グレイはゆっくり目を閉じた。

——悲しむ事はない。

私は生きている。——

それは、ウル最後の言葉……………。

——氷となって永遠に生きている。

歩き出せ、未来へ。

お前の？闇”は、私が封じよう——

その声が 그레이 の耳に届いた時、

「ありがとうございます。？師匠」

グレイの中の？闇”が溶け、涙と共に流れていった。

すると、突然俺の頭の中に声が響いてきた。

——グレイを頼んだよ。色男さん♪

「！？（俺にまで聞こえるのか。ウルさんよ。安心しな。グレイは仲間だ。大切な……な）」

——そうか。グレイもいい仲間を……もったね

そう、ウルの声が俺にも聞こえ、聞こえなくなっていた。一体なぜ俺にまで？まあ、考えても意味はないか。

俺は海へと流れていくウルの水のかけらを見ながら、またどこかで

声が聞こえる。そんな気がした。

その後、エルザ達と合流した俺たち。が、ナツはエルザの姿を見るや否やガタガタ震えだし、エルザはナツを睨んでいた。それを見た俺は自業自得だなと思い、無視することにした。

第18話 デリオラの最後。晴れるグレイの闇（後書き）

次回ぐらいでデリオラ編は終わりかな？

募集です

えー読者のみなさんにお問い合わせがあります。作者の書いている小説の主人公ことラグナ・ギース君は破邪竜の滅竜魔導師であるのは読んでいれば知っていますよね？

どうも、作者が書いているオリジナル滅竜魔法のネーミングや組み合わせの名称が悪いので、読者の皆さんに技を考えていただきたい。ただ、滅竜奥義に関しては既に思いついています。読者のみなさんに考えていただきたいのはナツやガジル、ウエンディが使っているの咆哮・の鉄拳と言った原作にある技以外を考えていただきたい。

考えていただき、感想に書かれた技は使います。

書き方はそれぞれ任せます。ラグナは滅竜魔法に他に属性と一緒に使いますので、それをふまえて考えてください。
よろしく願います。

この募集は何時でも受け付けています。

第19話 デリオラ編、終結（前書き）

セツナ様・とうふや様・支配者様・鈴龍様！募集ありがとうございました！

他の読者様達も募集は続いていますのでアイディアをください！

第19話 デリオラ編、終結

SIDE：ラグナ

「いや、終わった終わった！！！！」

「あいさー！！！！」

ゴタゴタは片づけられ、ナツとハッピーは両腕を上にはやし、全身で嬉しさを表現した。

「本当、……一時はどうなるかと思った。すごいよね、ウルさんって」

しみじみと言うルーシィ。

「……………フッ」

グレイの表情も悪くない。

「これで俺たちもS級クエスト達成だっ！！」

「わーい!!」

「もしかして、あたしたち2階へ行けるのかな!？」

「ははは………」

4人は、それぞれが違う反応をしていた。よほど自分たちがS級クエストを達成出来たことが嬉しかったのだろう。

いや、実際はそうではないな。どう見ても4人は忘れているのだ。

「お前ら。大事なことを忘れてないか？」

「えっ??」

4人が俺を見る。

俺は指を4人の正面へと向ける。

「4人とも。正面を見る」

4人は俺にそう言われ、正面を見て固まった。

何故なら……

「……………」
「ゴゴゴゴゴゴゴ！」

無言の威圧感が4人を襲う。

そこには、恐ろしい形相で4人を睨みつけるエルザ（般若）が立っていた。

そして、4人は思い出した。

「そうだ！！お仕置きが待ってたんだ！！！」

ルーシイは俺とエルザを見て、なぜここにいるのかを思い出し、顔を真っ青にする。他の3人も同じだ。顔が真っ青になっている。

「お仕置きの前に、悪魔にされた村の人たちを救おう。それが今回

の依頼だろ？エルザもそれでいいよな？

「……………ああ。S級クエストはまだ終わっていない」

「えー？だ……………だって、デリオラは死んじゃったし……………村の呪いだってこれで……………」

ルーシイはまだ終わってないと言われて驚き、これで終わりじゃないのかと聞く。

「いや……………。あの呪いとかいう現象は、デリオラの影響ではない」

しかし、エルザは否定した。

「月の雫^{ムーンドロップ}の膨大な魔力が人々に害を及ぼしたのだ。デリオラが崩壊したからといって、事態が改善する訳がないだろう」

「そんなあ〜」

そう言われてルーシイは、疲れたようにへなへなと座り込んだ。よほどシヨックだったのだろう。

「んじゃ、とつと治してやっか〜っ!」

「あいさ〜!」

ナツとハッピーはハイタッチをしてみた。この2人はまだ元気なようだった。

「どうやって治すんだよ?」

「大体の予想はついてんだけど、まだ確信がないからなあ。とりあえず、話を聞いてみようじゃないか」

そう言った俺は立ち上がる。

「誰に?」

「いや、誰って……いるだろ1人。月の雫^{ムーンドロップ}を実行していた主犯格が俺たちの傍に」

「「あ」

俺の指す方には、黙って自分たちの様子を見ているリオンがいた。

「俺は知らんぞ？」

「何だとオ！？」

「とオ！？」

村人たちが悪魔になってしまった事について、月の雫ムーンドロップの実行者であるリオンに聞いての返事は、全く知らないと言った。

「3年前、この島に来た時、村があるのは知っていた。だが、俺たちは村の人々には干渉しなかった。——奴等から会いに来る事もなかったしな」

「3年間、一度もか？」

村人たちが3年間、一度もリオンたちに接触しなかった事に対して、エルザは疑問を持った。

「そう言えば、遺跡から毎晩のように月の雫ムーンドロップの光が降りていたハズ

だよな？なのに、ここを調査しなかったのは、おかしい話よね」

ルーシィも顎に手を当てながら不思議そうに言った。

「リオンの話が本当なら、月の雫^{ムーンドロップ}の人体への影響も疑問だな」

「そうだな」

俺の発言に対して、エルザは頷いて同意を示した。

「ん？……………何でだ？」

「そうだよっ！！それじゃあ、コイツらは悪くないって事になっちゃうよ！？」

「いや、そもそも考えてみろよ。3年前から今日までずっと月の雫^{ムーンドロップ}の光を浴びて悪魔になっちゃったんなら、その儀式を実際に行ったリオンたちも同じ光を浴びてたんだぞ？なのに、リオンたちに変化がないのは何故だ？」

「確かに」

「む……………そうか」

「あい」

最初に俺の発言に疑問を持っていた3人も、説明を聞いて納得してくれた。

「とにかく、もう一度、詳しく村人に話を聞く必要があるな。行くぞ」

一旦話を切り上げて、エルザは村に戻ろうと言った。

「行くって、どうやって呪いを解くんだよ?」

「さあな」

「あらら……………」

そして、エルザたちは村へと向かって行った。

だが、俺とグレイだけは未だにリオンを見ていた。

「何、見てやがる」

「お前もどっかのギルドに入れよ。仲間がいて、ライバルがいて、目標がいて……………お前にも、きっと新しい目標が見つかる」

「そうだな。見た感じリオンも結構な使い手みたいだし、入ろっつていう気持ちさえあれば、何処でも入れると思うぞ」

「く……………くだらん……………さっさと行け」

俺とグレイにそう言われ、リオンはそっぽを向いた。

「……………素直じゃねえ奴^{ボソ}」

「……………全くだ（ボソ）」

「……………何か言ったか？」

「何でもねえよ。じゃあまたな、リオン」

「今度はどこかにギルドに入っていたら一緒に仕事しような」

「とつとと行け！」

そう言って、俺とグレイもエルザたちの後を追った。

「……………ギルド、か。」

上を向いて、どこか笑顔で呟いたりオンの言葉は、誰にも聞かれる事はなかった。

村に戻ってきた俺たちだったが、

「あれ？」

「誰もいないよ？」

村の資材置き場についたが、そこには誰の姿もなかった。

「ここにみんないたのか？」

「村がなくなっちゃったからね。でも……どうしたんだろ」

村がなくなった今、この資材置き場以外に彼らが住む場所はない。
なのに一人もいないというのは少々おかしくはないか。

「おい」

「とりあえずキズ薬と包帯もらつとくぞ」

「皆さん！ 戻りましたか！？ た、大変なんです！」

「！」

するとようやく姿を見せたが何やら慌てており、

「大変？」

「と、とにかく村まで急いでください！」

せかされた俺たちは何かなんかわからない状態で後を追っていった。

「な、何これ……」

「昨日……村はボロボロになっちゃったのに……」

男に案内され、ついに行った先は村があった場所。……のはずだったのだが。目の前には溶けてなくなる前の村が寸分変わらずに建っており、ルーシィとハッピーは呆然と呟く。

「元に戻ってる……。どうなってんだコリヤ……。まるで時間が戻ったみてーだ!」

「せっかく直ったんだし、アンタは触らないほうがいいと思う」

「というか、時間?」

……ウルティアか。時間を操ることのできるあいつに取って壊れた村を元に戻すことなんて造作もないか。気まぐれな奴だから、気が向いただけなんだろう。次に会った時にでもお礼は言っておくか。

俺たちは、村人から再び話を聞くために、村の入口の所に集まってもらった。

「今までの話を整理しておこう。君たちは紫の月が出てから、そのような姿になってしまった。間違いないか？」

エルザは腰に手を当てて、村長に聞いた。

「ほがぁ……………正確には、あの月が出ている間だけ、このような姿に……………」

「つまり、それは3年前からという事になる」

「確かに……………それくらい経つかも……………」

「あぁ」

それに村人たちも同意を示した。

「しかし……………この島では3年間毎日、月の雲ムーンドロップが行われていた」

そしてエルザは腕を組ながらスタスタと歩きながら話す。エルザの様子は、分からない事を聞いているというよりも、テストの答え合わせをやっているという感じがした。

へえ。流石はエルザだな。どうやらこの島の仕掛けに気付いているみたいだ。

「遺跡には、一筋の光が毎日のように見えてい……きゃあ!」

ズボォ!!

エルザは落とし穴にハマった。その落とし穴は、ルーシィが罠として作っていたものだった。

「お………落とし穴まで復活してたのか………」

「きゃ………きゃあって、言った………ぞ」

「あたしのせいじゃない!!あたしのせいじゃない!!」

「大丈夫か、エルザ?」

落とし穴に落ちたエルザに、俺は手を差し出した。

「……………ああ／＼／（くっ！ラグナの前でこんなことを！この落とし穴を作った本人を見つけたら……………ただでは済まんぞ！）」

そして、エルザは俺の手を掴んで穴から出て来た。

「つまり。この島で一番怪しい場所ではないか」

落とし穴から出て来たエルザは、何事もなかったかのように話を続ける。

「うあ……………（汗）何事もなかったかのようにだぞ」

「たくましい……………」

「なぜ、そんな場所を調査しなかったのだ？」

ざわ……………ざわ……………ざわ……………

エルザの問い掛けに村人たちは、ざわめき始めた。

「そ、それは……………村の言い伝えで……………あの遺跡には、近付いてはならんと……………」

「でも、そんな事を言ってる場合じゃないはずだぜ。死人も出てるし、ギルドの報酬額の異様な高さから見てもな」

俺の追い込み、さらに村人たちはざわめきだした。村長の額には冷や汗が滲んでいる。

「……………本当の事を話してくれないか？」

「そ、それが……………ワシらにも、よく……………分からんです……………。正直、あの遺跡は何度も調査しようとしたしました。皆は慣れない武器を持ち、ワシはモミアゲを整え……………何度を遺跡に向かいました」

……………モミアゲ整える必要、あるのか？

「しかし、近付けないのです」

「!？」

「遺跡に向かって歩いても……………気が付けば村の門。我々は遺跡に近付けないのです」

「……………？」

「ど、どという事？近付けない？」

「俺たちは、中にまで入れたぞ!!ふつ」

「あい」

村長の言葉にナツたちは、それぞれが驚いた。

「こんな話、信じてもらえないでしょうから黙ってましたが……………」

「本当なんだ!!遺跡には何度も行こうとした!!だが、たどり着いた村人は1人もいねんだ!」

村人は隠していた事を全て話した。どうやら、これ以上は本当に何も隠してないらしい。

「やはり……………か」

その答えを聞いて、エルザは1人、納得した。

「わかったか？」

「ああ。そう言うラグナも、分かっているのだろうか？」

「まあな」

エルザは俺の反応を見て、ふっと笑みを浮かべてから、鎧を身を纏った。

「ナツ、着いて来い——」

——これから月を破壊する」

「おおっ！！」

『え——っ！——！！』

興奮するナツの後ろではグレイたちが驚愕の声をあげる。

「月を……壊すって……さすがのエルザでも、それは無理……だよな」

「な、何をするつもりだれ……？」

「ドキドキするね」

「おう！ドキドキだぜ！」

「いろんな意味でね……（汗）」

エルザが月を壊すと言い切った後、エルザはナツを連れて村の一番高い場所——櫓うぐいすに登った。エルザが何をするつもりなのか分からない、グレイ、ルーシィ、ハッピー、リクを始めとする村の人々はた

だ上を眺めていた。

「ラグナはエルザが何をするつもりなのか分かってるんだよね？？」

「まあな」

「じゃあ、エルザとナツは何をしようとしてるの？

「まあ、見てろって。面白いものが見れるし、起こるからよ」

そうグレイたちに言って、俺は再び空に目を向けた。

「この鎧は？巨人の鎧”。投擲力を上げる効果を持つ」

エルザは櫓の上で自ら纏う鎧について、ナツに説明する。

ジャキイイイイン！！

「そして、この槍は闇を退けし？破邪の槍”」

エルザの右手には長い槍が握られていた。

「それをぶん投げて月を壊すのか！……うおおっ！……すっげえ！！！」

「（イヤイヤ、無理だから）」「」

その声が聞こえたグレイとルーシィは内心で突っ込みを入れた。

「しかし、それだけではあそこまでは届かんだろう。だから、お前の火力でブーストさせたい」

「？」

エルザの言っている意味がよく分かっていないナツ。それを見てエルザは、

「石突きを思いっきり殴るんだ。巨人の鎧の投擲力と、お前の火力を合わせて月を壊す」

「おし！……わかった！……！……けど、それだったらラグナでもいいんじゃない？」

ナツはやつと理解できたのか、拳を握った。が、俺を見てエルザに聞いた。

「いや。ラグナの力では槍が壊れてしまう」

『それには同意だ』

「みんなして酷いな」

確か俺の魔法やブーストはかなりヤバいものばかりだけども。

「いくぞ！」

俺が落ち込んでいる中、エルザは腕を思い切り引いて投げる体勢をとった。

「ナツ！――！」

「おおっ！――！そらぁあ――！」

ドン！！！！！！

「届けエエえええつ！！！！」

そして、エルザたちが放った槍は月に向かって飛んでいった。

ナツが殴って、エルザが投げた槍が空へ……あの紫色の月へと向かっていく。

俺以外の皆は微妙な表情をしている。

だが、

……………ピキッ

「！？」

「え？」

「は？」

「あ、い」

「お、おお」

月にヒビが……………

ピキピキピキピキッ……………

そのヒビはドンドン広がっていく、

そして……………

ピキッピキッ……………パキイイイイン

月が、割れた。

そして、割れたその向こうに見えたのは……

「え!？」

「これは……」

「月!？………どうなってんだ!?!コレあ!?!」

明るく俺たちを照らす月の姿があった。

「やっぱりか」

粉々に砕けた破片がキラキラと月の光を反射して、俺たちに降り注ぐ。

その光景を見て、ルーシィは一つの仮説を立てたのか、言い始める。

「割れたのは月じゃない………空が、割れた？」

「この島は、邪気の膜で覆われていたんだ」

「膜？」

割れた空を見上げて、啞然としているみんなに俺は話した。櫓の上
ではエルザがナツに俺と同じことを話している。

「そう、膜だ。まあ簡単に言うと、月の雲ムーンクラウドによって発生した排気ガスだ。それが結晶化して空に膜をはってたんだよ。その膜のせいで、月があんな色に見えたって訳だ」

「へえ」

凄いなあ、と俺の話を聞いてルーシィは感心した。

シュウウウウウ……

すると村人たちの身体が光だした。

「わああ、きれい」

どうやら村人たちに掛かっていた魔法が解けるようだ。

「邪気の膜は破壊され、この島は本来の姿を取り戻す」

そして村人たちを包む光はだんだんと治まっていき……

「あ……」

「あれ？」

何の変化もなかった。

「元に戻らねえのか……」？

「そんな……」

グレイはその状況に焦り、ハッピーは涙目になる。

「いや、これで元通りなんだ」

すると、櫓^{ちゅう}からエルザとナツが降りてきて説明する。

「……………」

「邪気の膜は、彼等の姿ではなく彼等の記憶を冒していたのだ」

「記憶？」

「そう……………夜になると悪魔になってしまつ……………という間違つた記憶だ」

「？」

「ま…ま……………まさか……………（ブルブル）」

「そういう事だ」

「彼等は元々悪魔だったのだ」

「！」

「な！」

「きゃああああああっ」

「ま…………マジ?」

「う……………うむ……………。まだ、ちょいと混乱していますが……」

開いた口が塞がらない様子のグレイと、自分たちの正体を思い出した村人。

「彼等は人間に変身する能力を持っていた。その人間に変身している自分を本来の姿だと思い込んでしまったのだ。それが、月の雫による記憶障害」

「でも…………それじゃオリオンたちは何で平気だったの?」

身体を震わせながらルーシイは聞く。

「それは簡単だよ。人間だからな。どうやら、この記憶障害は悪魔にだけ効果があるらしい。あの遺跡に村人だけが近づけないのも悪魔だからなんだ。聖なる光をたくわえたあの遺跡には、闇に生きる

者は近づけない」

ルーシイの疑問には、エルザの変わりに俺が答える。

「さすがだ……………君たちにまかせてよかった」

そこへ1人の男が歩み寄る。

「魔導士さん、ありがとう」

片手を挙げて、悪魔の姿をした男は礼を言った。

「ボ……………ボボ……………」

なんと現れたのは死んだとされた村長の息子……………ボボであった。

「え……………えっ……………えええ！？！？！？！？」

村人はボボの墓とボボを交互に確認した。死んだと思っていた者が生きていたのだ、驚くのも当然だろう。

「幽霊！……！」

「ああああっ……！」

「船乗りのオッサンか……？」

互いに抱き合うルーシィとハッピー、グレイも驚いている。

「ん？知り合い？」

「俺たちをここまで連れてきてくれたんだ……！」

「あ、そう」

「胸を刺されたくれエじゃ、悪魔は死なねエだろうがよ。」

ガハハ、とボボは大きく口を開けて笑った。

「あ………あんだ、船の上から消えたる………」

どうやらグレイは未だに幽霊説を疑っているようだ。

シュッ

「……！」

それを聞いてボボはグレイの前から一瞬で消え――

「……あの時は、本当の事が言えなくてすまなかった」

「おおっ」

――た、のではなく。ただ自らの羽で空に飛び上がり、あたかも消えてしまったように見せただけのようだ。

「オレは1人だけ記憶が戻っちまって、この島を離れてたんだ。自分たちを人間だと思い込んでる村のみんなが怖くて怖くて」

再びボボは笑った。

「……………（ウルウル）」

ダキッ！

「ボボくくく！！」

そんなボボを見て我慢が出来なくなった村長は、自らも羽を使って飛び上がった。

「やっと正気に戻ったな親父」

そして2人の親子は抱き合って、再会の喜びをかみしめる。

その様子を見て村人たちも、

「生きてた〜！！」

「ボボが生きてたぞ〜！！」

「やった〜っ！！！！」

「めでたいぞー！ー！！」

と言いながら、村長の後を追いつながら一斉に空へと飛び上がった。

「ふふ………悪魔の島………か」

天頂に光り輝く十五夜の月――

「でもよ………みんなの顔見てつと………」

その白き光に照らされる姿は――

「悪魔つてよりも天使だな」

――天へと昇る天使の群れに見えた。

「今夜は宴じゃー！！悪魔の宴じゃー！！」

「おおおおー！！ー！！」

「なんか、すごい響きねソレ……………（汗）」

「あい（汗）」

「うむ（汗）」

彼らと俺たちの夜はまだまだ続く……………

↓次の日↓

「な……………なんと！報酬は受け取れない……………と？」

ガルナ島の一件が無事に解決し、その感謝の意味も込めた宴会が開

かれた次の日の朝。

俺たちがギルドに帰る際に、村長に今回は報酬を受け取らない事を告げた。

「はい、気持ちだけ受け取っていきます」

「ほが……しかし……」

食い下がる村長。感謝の気持ちを見える形で示したいのだろう。

「昨夜も話したが、今回の件はギルド側で正式に受理された依頼ではない。一部のバカ共が先走って遂行した仕事だ」

「ほがぁ……それでも我々が救われた事には変わりません。これはギルドへの報酬ではなく友人へのお礼という形で受け取ってくれませぬかの？」

村長はエルザの言葉を聞いても諦めずに、朗らかな笑顔で言った。

いい人だな……。

エルザは仕方ないという風に首を左右に振って、

「そう言われると拒みづらいな」

「700万」！！！！」

「おおお！！！！」

「ナツ、鼻からも炎出せたんだな……………」

お礼を受け取って貰えると分かり村人たちも盛り上がった。

「しかし、これを受け取ってしまうとギルドの理念に反する。追加報酬の鍵だけありがたく頂く事にしよう」

「「いらね〜っ！！」」

「いるいる！！」

「ナツ、口から炎出てるから……………」

しかし、鍵だけ貰うと付け足され、村人たちの盛り上がりも少し下がり、ナツとグレイのテンションは急降下、星霊魔導士のルーシィだけが嬉しそうにしていた。

「では、せめてハルジオンまで送りますよ」

「いや……………船は用意できてる」

「ああ。とびっきりのな」

「!？」

く砂浜く

「つて、海賊船!？」

「まさか、強奪したの!？」

「イヤよ!?!?!こんなに乗りたいくない!?!」

俺とエルザが乗ってきた海賊船を見て、それぞれの反応をするナツたち。

すると、

「姉御〜！兄貴〜！出発はいつでもできまっせ！！」

「姉御サイコー！兄貴サイコー！」

海賊船の船長とその手下が俺とエルザに向かって手を振る。

「ルーシイ。乗るのが嫌なら泳いで帰るか？泳ぐなら付き合っぞ」

「無理！！」

そんなナツの誘いを即答で断ったルーシイ。

「まあまあ。中は結構、普通だから……………とりあえず乗ろう」

俺の促しもあって、ナツたちは船に乗り込んだ。

そして全員が乗り込んだのを見計らって、船は出発する。

「みなさん！……ありがとうございます……！」

「ありがとうございます……！」

「また遊びに来いよ」

「妖精の尻尾サイコー……！」

「蝶サイコー……！」

船に向かって村人たちが叫ぶ。一人だけ変なのが混じっていたけどな。

「みんな、元気でね……！」

それに答えるようにしてルーシーも手を振る。

村人たちは船が見えなくなるまで叫び続けた。

第19話 デリオラ編、終結（後書き）

ふう……これにてデリオラ編は終わりです。

次回からは少しだけアニメオリジナル編を書こうと思います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0652y/>

Fairy Tail ~ 魔を極めし者 ~

2011年11月21日06時57分発行